

# オリ主と藤丸立香の人理定礎復元

コガイ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

第五次聖杯戦争。それを生き延びた彼の十年後の話。

彼、古崖創太は魔術師である。しかし、その考えは異端でしかなく、世のため人のために生きようとしていた。善き物であろうと人々を救い、日々世界を駆け巡り、友人と別れようとも意思を継ぎ、正義の味方として活動していた。

ある日、彼は組織から話を持ちかけられる。その組織の名はカルデア。人類史の未来を守るためと言われるが……

ステゴロでサーヴァントに勝ち、一度見た魔術は即座に習得し、できない事はほぼないとされ、理論だけならば最強の彼が死にももの狂いで仲間と共に未来を掴み取る。

これはそんな平凡な魔導者の旅路である。

この小説は「オリ主と衛宮士郎との友情ルート」の続編となっております。そちらを読まなくても内容を理解できるようにしますが、読んで頂ければより良く楽しめるかもしれません。

大体シリアスなので、ネタを求める人はブラウザバック推奨です。

前作はこちらから↓<https://syosetu.org/?>

[mode=detail& n i d || 1 1 4 5 9 3](https://syosetu.org/?mode=detail&nid=114593)

目次

|             |     |
|-------------|-----|
| 序章・似て非なる世界で |     |
| 勧誘          | 1   |
| 人理焼却        | 8   |
| 昔の敵は        | 24  |
| 宝具解放        | 45  |
| 懐かしき者       | 60  |
| 解決          | 76  |
| 幕間・少しばかりの休息 |     |
| 次への準備       | 98  |
| 特訓開始        | 110 |
| 魔術という力      | 123 |
| 遠い遠い夢       | 133 |
| 記憶と心情       | 146 |
| 呼び寄せられし虚像   | 163 |
| 第一章・旗を掲げよ   |     |
| 開始・強襲       | 181 |
| 情報収集        | 201 |

## 序章・似て非なる世界で 勧誘

目の前には光、周りには死体の山、隣には一緒に戦ってきた友人がいる。

「結局、お前は世界と契約しちまうんだな。」

俺が発したのは諦めたような言葉だった。普段なら隣の奴から活を入れられる所だが今回は違った。

「ああ、そうみたいだな。」

肯定された事で、俺はこれが現実なのだと思えて実感してしまう。

俺達は今まで何人もの命を救ってきた。一を切り捨て十を救うやり方では無く、全てを救うやり方で。最初は失敗ばかりだった。救えなかった命があった。

悔しかった。

でも、前へ進まないわけにはいかなかった。失敗と成功を繰り返して、ここまでできた。

だが、現実残酷だ。

アーチャーから聞いた話では、衛宮士郎は死んでしまった人間を生き返らせるために世界と契約したと言う。そしてそれが今、行われようとしている。これは決まった事なのだろうか。

今から行おう衛宮との会話、それはおそらく最後となるだろう。そう思い俺はその内容を慎重に考える。

「あく、えーつと……」

いざ切り出そうとしてみれば言葉が詰まる。こいつとの最後が、こんなに早く来るとは思わなかった。そんな俺を気にかけてくれたのか衛宮から話しかける。

「俺さ、お前と出会えてよかった。」

「お決まりのセリフだな、おい。」

「本当に思ってる事だ。」

何を言ったかと思えばそんな事かよ。全く、そんな言葉は女性にで

も言え。

「アーチャーが言ってただろ。お前は、お前だけは生前にいなかったって」

……大体、衛宮が言いたいことは判った。俺は不確定要素だ。この世界にしか俺という存在しない……は言い過ぎだが士郎が存在し、さらに俺が存在する世界はそう多くはない。

「だからさ、嬉しいんだよ。何というかこう……」

「解った。だからその先を言うな。」

照れるし恥ずかしいから止める。だがそつち系には目覚めないからな!!

「これを受け取れ。」

そう言つて俺は腕輪を渡す。宝石がついているわけでもない、ただの金属でできた腕輪。ただ、そこには細かい文字が敷き詰められていた。

「この腕輪は？」

「少しだが俺の魔術が使える。使い方は念じて魔力を込めればいいだけだ。俺の最後の贈り物だからな大事にしろよ。」

「ありがとう。皆には上手く説明してくれよな。」

「もちろんだ。」

「じゃあな、創太。」

「ああ、またな衛宮。」

それが最後の会話だった。

「世界よ!! 俺の死後を預ける!! だから、ここにいる人達を生き返らせてくれ!!」

その言葉が終わると同時に光は士郎を包み消えていった。残されたのは俺と生き返った人々だけだった。

「さて、これからどうするかねえ。」

まずはここにいる人達を何とかしなくちやな。

—————

俺の名前は古崖創太。魔術師改め、魔術遣い兼正義の味方だ。

この正義の味方というのは、今は亡き友人衛宮士郎からの受け売り

だ。といつても、完全に正義の味方となった訳でもない。そもそも、正義とは何かすらも理解していないのだから。

話を戻そう。先ほど話した出来事についてだ。それは三年前の事で、衛宮士郎との最後の思い出である。

今の俺、いや六年ぐらい前から、表の顔は貿易商として世界中にある支部社を見回って管理していると同時に、裏では紛争を解決したり、怪しい組織を監視、場合によっては制圧などを行っている。

もちろん、俺一人でやっているわけではない。同じ貿易商の仲間には何人か俺と同じ魔術師もいる。と言うか古崖の当主である叔父がその貿易商の社長で、前々から俺と同じ事をやっていて、仲間も集めていたらしい。血が繋がっているというかなんというか。

現在、俺はロンドンにいる。仕事で来ているのだが、もうそれは終わった。たまたま時計塔に居た遠坂への挨拶は済んだし、そろそろ次の仕事場に行かなければならない。そういえば、遠坂が最後に何か言っていたな。カルデアがどうのこうのと……。

「貴方、古崖創太さんですね？」

と、考え込んでいるとある一人の少女に話しかけられる。何やら話があるとのことだが、人が歩く往来の道のド真ん中で話す訳にもいかず、場所を変える。

そして、不味い。状況がじゃなくて今飲んでる紅茶の味だ。セイバーや遠坂の気持ちがよくわかる。そんな事はどうでもよくて、現地は喫茶店。椅子にかけているのは銀髪の女性とシルクハットの緑スーツ、そして俺だ。銀髪の方の名前は……

「それでオマリィ。」

「オルガマリィよ！ 私の名前は！」

あれ、そうだったけ。多種多様な色を持った植物の生き物を連れていそうな感じがしてたんだが……まあ、いいや。

冗談はさておき、銀髪の少女の名前はオルガマリィ・アニメスフィア。どっかの所長らしい。こんな幼いのに、よくそんな大役が務まっているな。

経緯としては、先程道端で声をかけられ、名前を確認された後、こ

の喫茶店に連れて来られた。

「悪い。それで本題の方なんだが。」

「人の名前を間違えるとか……」

「何か言った？」

「いいえ何も。」

絶対言ってたが突っ込むと面倒くさそうなので黙っておく。

「色々と言いたい事はありますが、まずは率直に言います。貴方を人理継続保証機関フィニス・カルデアへ引き入れに来ました。」

それを聞いた瞬間、思い出す。遠坂からその名前を聞いた事を。

遠坂もそんな話が来たとかなんとか言ってたな。未来が来ないからどうのこうのと。詳細は遠坂から聞いたが、まさか本当にいるとは。ちなみに彼女は了承したらしい。

「未来を守るための組織だったな。」

「話が早くて助かります。貴方は人々を救うためと言って、世界中を飛び回っているそうですね。その心中が嘘か、真かは分かりませんが、遠坂の当主からは信頼できる人物だと聞いています。そして、あの聖杯戦争を生き延びた一人とも。」

「あいつ……よくもペラペラと……。」

悪い事を喋っている訳ではないが、人の情報をバラすなよ。けれど、一つ疑問がある。いや、疑問というよりただの確認がしたいというか。

「俺の魔術の事は、遠坂に聞かなかったのか？」

「いいえ。貴方達、古崖家の魔術は代々行使する魔術が変わるとだけ。私達が調べても、それに違いはありませんでした。」

けれど、正直に言って、貴方に対して魔術師としての力は求めていません。」

こいつ、はつきり言いやがった。

まあ、遠坂が俺の魔術をバラさなかった事が聞きたかったもので、その事はどうでもいいだろう。

「貴方が偶然にもロンドンにいた、という情報を得て、遠坂凜に話を持ち込んだついでに、貴方を引き入れにきました。」

どうでもいいって言ったのは、訂正する。こいつ腹立つ。ついであつて何、ついであつて。

「私は貴方に指揮官として、組織へと引き入れたいのです。」

「なんで指揮官なんだ？」

「一癖も二癖もある魔術師達を纏めている貴方のカリスマ性を見込んでの事です。」

ああ、なるほど。俺はたしかに色々な魔術師と交流を持っている。今いる仲間もそうだし、貿易相手の中にも魔術師がいる。

そして、カルデアには多くの魔術師が集められる。けれど、普通の魔術師達が勝手に纏まるはずもない。むしろ、空中分解を起こすだろう。

「人々を救うという、魔術師にとっては異端の目標を掲げながらも、なおも今、貴方は魔術師の仲間を引き連れています。」

そのカリスマ性があれば、カルデアの指揮官として活躍できる事でしょう。」

「俺の力を評価してくれるのはありがたいけど、俺の叔父には頼まなかったのか？」

仲間を引き連れていると、オルガマリーは言っているが、あくまでも俺は前線に立っているだけで、リーダーをやっているわけではない。

さらに言うと、仲間の大半は父と叔父が集めた人か、その身内だ。俺が引き入れた仲間なんて、数少ない。

「依頼はしました。けれども彼は貴方を推薦していました。」

ちよい待て。あの人そんな事をしてたなら、なんで俺に何も言わないんだ!?!俺の居場所分かってるよね!?!いつも直接報告してんだからよ!

絶対面倒くさいからだろ! 確かそういう性格だったな!

「そろそろ、答えをお聞きしても?」

……あとで締めよう。

答えとしては、もちろんイエス・キリゲフンゲフン。もちろん、はいと言いたい



「俺はパスだ。」

「は?!? どうしてよ!!」

おい、ここは公共の場だぞ。うるさくするな。ほら、周りの目線が一気にこっちに向いた。オルガマリーはすぐに気づいて縮こまったみたいだけど。

「理由を聞いてもいいかな?」

オルガマリーの隣にいる緑シルクハット、レフ・ライノールが聞いてくる。

「簡単な話だ。あんたらの言っている事が信じられないからだ。未来が危ないからと言って、はいそうですかと話には乗れない。」

信じられないというのは嘘だ。オルガマリーは真剣な表情で話をしていたから、未来を守るといっているのは嘘ではないと思っている。だがレフさんよ、お前からはプンプンと胡散臭い匂いが漂ってるんだよ。そんな奴と一緒に居たくはないのが本音だ。

「それなら私達と共にカルデアへ……」

「信用できない奴の本拠地に行けるわけねえだろ。」

それくらい普通に分かれよ。

「悪いが他を当たってくれ。けど俺は俺であんたらが言ってる事が本当かどうかを確かめる。それが真実だったら今度はこっちから連絡を取る。」

「解ったわ。その時はまた貴方をカルデアの一員として迎えいれましょう。」

「あんま期待すんなよ」

良かった。一度断ったから、もう来るなどか言われずに済みそうだ。

「はい、これが連絡先よ。」

「サンキュー。」

そんなでもってごめん。本当は使い魔で追跡して、カルデアの場所を特定するつもりだから。

名刺を渡されても全く使わないから。

「そんじゃまたな。」

「ちよつと待ちなさい勘定は……」

ちつ、バレちまったか。

「いいんだよ、俺が払う。断った詫びだ。」

手に持った伝票で、ひらひらと空を仰ぎながら言う。

「……解ったわ。」

「素直でよろしい。んじやな。」

「でも、最後に一つだけ。」

ジアナ・ドラナリク、彼女は今どこに？」

「……さあな。」

お茶を濁しながらも会計を済ませ、俺は喫茶店を出て行く。さて、世界を救う準備でもしますか。

## 人理焼却

オルガマリーの誘いを断ってから一週間が経ち、俺は北海道の実家へと帰省していた。

実家の見た目は遠坂宅のようなでかい洋館、ではなく現代風の豪華な邸宅という感じで、伝統あると言った風には見えないものだ。

その入り口を開けると、たまたま通りかかっていた使用人が出迎えてくれる。

そして、廊下を抜け、奥の方にあるドアの前に立ち、ノックする。「どうぞ。」

許しを得たことを確認し、ドアを開けると左右の本棚がこちらを向いて、ぎっしりと並んでいる。

そして、その真ん中には叔父の古崖そうじ創次そうじがいる。

「久しぶり、叔父さん。」

「久しぶり、創太君。」

「……相変わらず本が好きなんだな。」

挨拶を済ませた俺は叔父が片手に持っている物を見ながら、呆れ顔で皮肉を言う。すると叔父は

「まあね。」

と澄まし顔で返す。全く効果がない。

この人は本当に本が好きだ。趣味がなんなのかと聞かれれば、読書と答えられる。それが本の虫こと、古崖創次だ。

しかし、しかしだ。よくよく本の内容を探ってみると、小説やエッセイの他に、実は驚きの物がある。

「はあ………。甥の目の前でよく官能小説なんてものが読めるな。」

十八禁物の小説だ。

「別に良いじゃないか。君も成人なんだし。」

「良くねえよ！ アンタ、嫁候補がいるんだろうが！」

「ちよっ……、あんまり大声で言わないでよ！ 彼女に聞こえるじゃないか！」

「だったらどうしようそれはしまえ！」

叔父さんはしぶしぶといった感じで、手に持っていた小説を机に仕込んであった隠し場所へと片付ける。

百歩譲って読むは良いにしても、前もって帰る日時を連絡してんだから、少しは隠そうとしてくれ。

「……それで、本題に入っているか？」

「ああ。」

これでやっと話したい事が話せる。

「カルデアからスカウトが来た。叔父さんも話を持ちかけられたんだろ？」

「来たね。しかも、所長直々に。」

「やっぱりか！ やっぱり来てたんだな！」

叔父の言葉に、俺は突如として怒りを露わにさせる。叔父さんは何が起こったのかと思い、困惑している様子だ。しかし、こちらら知ったこっちゃやない。

「面倒だからって、断るのはまだいい！ けどな！ 俺に回すのは、止めろよ！」

そもそも、連絡してくれよ！ カルデアの人がそっち行くって！

こっちだって予定があるんだからさー！」

机を壊れるぐらい何度も叩きながら、早口でまくしたてる。

「いっつも、いっつもそうじゃねえか！ この前のあれも……」

その後もネチネチとした怒りを思いつきり口から吐き出し、発散させる。やがてそれが尽きた頃には、俺は肩で息をしていた。

「あー……。」

叔父はあぜんとしている。少しでも罪悪感を覚えているのか、謝る言葉を探しているようにも見えるが、その実

「まあ、別にいいじゃないか。」

見えるだけだった。

「……今日はその件で話しに来た。」

そして、俺は諦めた。叔父さんの性格はもう治らない気がしてきた。四十にもなっている中年の性格を変えるなんて難しい。

「休暇を取る。いつまでかは分からない。」

「理由はカルデアだろ？」

「ああ。」

話が早くて助かる。

「創太君は断ると思っていたよ。指揮官なんていう立場は自分には不  
相応だって……」

「いいや、断った。」

「え？」

言葉を聞き間違えたかのように、驚きの表情を見せる。

「だから、断ったって言ったんだ。」

俺としては指揮官でもなんでもいい。そこから力を見せて前線に  
異動するなり、教官になるなり、相応の役割を貰う。まあ、世界を救  
うためなら雑務だってやるさ。」

「だったら、なんで断ったんだ？」

「所長の付き人が妙に怪しいからな。そんなやつと一緒になんて、休め  
る気もなくなる。まずは外からカルデアを調べて他にも不審な部分  
がないかを調べる。」

「あの娘、オルガマリーちゃんには怪しい部分はなかったと思うけど  
？」

「だからだよ。俺から見てもあいつが嘘をついている様子はなかつ  
た。世界を救うことは本当だろう。けども、付き人の事を信頼してい  
た。」

なら、最初は情報収集だ。そいつがクロなのかシロなのか、共犯者  
は誰か、一体何をしているかを探る。」

俺の考えを聞いた叔父は少し考えた後、納得したような顔で『なら、  
そうすると良い』と言って、賛成してくれた。

「よし、だったら早速人員集めだ。」

「絶対に半分は残してくれよ？ 君が世界を救う間、また紛争が増え  
ないように、こっちも色々人手が必要だからさ。」

叔父はどうやら、別の意味で世界を救うそうだ。まあ、俺も最初か  
らそのつもりだった。世界を救ったのに、世界中で犯罪が起きてるな  
んて本末転倒だ。

だから、叔父さんには残ってもらわなければならない。

そうして、互いの行動が決まった直後、ドアをノックする音が聞こえる。

「失礼します。コーヒーを淹れてきました……おや、創太くん、久しぶりですね。」

ドアを開け、コーヒーが入ったカップをトレイに乗せて持ち運んできた男装の麗人は

「久しぶり、バゼット。」

元封印指定の執行者であるバゼット・フラガ・マクレミッツだった。

「ええ、以前にこちらへ来た時はちょうど一年前でしたか。」

どうぞ。砂糖は二個ですね。」

「ありがとう。」

かつては脳筋とか、ボクシングバカとか呼ばれていた彼女は丁寧にコーヒーを叔父の前に出す。

しかし、それとは別に俺はある変化に気づく。

「バゼット、その義手また改造されたのか？」

「はい。様々な機能が追加されたとは伺いました。」

かつて言峰神父に取られた彼女の左腕は、現在古崖の技術班が開発した義手となっていた。もちろんただの義手ではなく、彼女の意思で思いのままに動かせ、強度はかなりの物。さらには仕掛けが搭載されているのだが……

「一応聞かせてもらっても？」

「分かりました。まずは超強力な電気ショックですね。腕を螺旋状に回転させることにより電気を溜めることができ、相手に直接触れられれば即気絶というものらしいです。」

さらには地面に叩きつけることにより、生物には全く聞こえない高周波の音を反響させ、敵の位置を知ることにも可能になりました。

後は遠距離用として腕を取り外した瞬間に接合部からジェット噴射による推進を行い、相手を攻撃するという機能も追加されたそうです。遠隔操作も可能となっています。」

「おいそれって……」

「……。」

それを聞いた後、俺はあるいやーな予測を立てながら叔父を睨みつける。

あ、こら、目え逸らすな。

「しかし、それ以外にもやたら眼帯をつけるよう勧められたり、ツノを生やそうなどと言っていました。」

「完全に鬼蛇じゃねえか！」

もつと言ってしまったえばメタル○アじゃねえか！

「おいアンタ、最近あれやっているからって流されすぎだろ！」

「ぼ、僕じゃないって。技術班が勝手にやったことだよ。」

「知ってんだぞ！ アンタが発案者だって事は！」

「な、何でそんな事を!?!」

技術班に内密者がいるからって事は黙っておこう。

「とにかくだ、あんまり趣味趣向で人の腕を改造するなよ。」

「いえ、私はこの機能には実用性があるとは思いますが。」

その時、俺の顎が外れた。

何だこの人は。隠密行動でもするつもりか。

「特にこの……ロケットパンチなる物でしたか。遠距離からの攻撃をほぼ持たない私にとっては十分に活用できます。迎撃や追撃なんかにも使えそうですし。」

いや違うな。この人は筋肉ゴリラだったな。

「……まあ、二人とも末永くな。」

「ちよつと創太くん!? 別に僕とバゼットくんはそんな関係じゃ……!」

「うるせえ。さっさと結婚しやがれ。」

ったく、十年も嫁候補になっただから、貰ってやれ。バゼットが恥ずかしそうに顔を赤らめているが、関係ないね。

「んじゃ、俺はそろそろ行くぞ。飛行機の便に間に合わなくなるからな。」

「ま、待つん……」

俺は最後の叔父の言葉を聞かず部屋を出て行く。

どうせ、邪魔者がいたって何の進展もないだろう。だから、きつさと結ばれてほしい物だ。

さて、それじゃあ冬木地元に帰るか。最近あいつらに会ってないしな。世界救う前に挨拶ぐらいはしとくか。俺のいない間に何かあったかもしれないし、なかつたかもしれない。どちらにしても、他愛の無い話でもしに行こう。

—————

と思つて懐かしの場所へと帰り、少しはのんびりしようかとくつろいでいたら、

「なんだって一瞬で街が焼け野原になりやがるんだ！」

事件が起こる。

先も行ったが、街が瓦礫と火の山となるといふ、まるであの時のような光景だった。二十年前の大災害そのもの。俺のターニングポイントとなつてしまった出来事。

これではまさに、あの時の焼き直しじゃねえか。

その中で俺は走る、誰かが生き残っている事を信じて。しかし、  
「誰も、誰の遺体も無い……？」

人類が生み出した文明の遺産は残っているのに、人がいたという痕跡は全くない。

以前にオルガマリーが言っていた事と関係があるのか？

周りの磁場というか、人を消し去ろうという結界が地球全体に働いているように感じられる。俺はある方法でそれから身を守つたのだが。

「……使い魔よ。」

ここ以外の状況も把握するため、使い魔を五体作る。とても小さく、ほとんど虫のような大きさだ。

しかし、索敵という目的であれば十分な大きさで、さらには僅か十分足らずで、この星全てを探索できる速さも持つ。

「頼んだぞ。」

それを四方八方に飛ばし、念話を応用した視界共有で使い魔からの情報を受け取る。



せめてここだけであつてくれればと願うが、しかしその結果はさらに酷かった。

どこもかしこも火の海だらけで、冬木となんら変わらぬ惨状だった。まるで人類を焼却しようとしているかのようで、生命体の反応もない。

何にしても、あまりに

突然、頭がふらつく。

「っ……トラウマを完全に克服したとは言い切れないか。」

世界が歪む。

似たようなものは何度も見てきたが、冬木ここがこうなってしまう、嫌でも父さんと母さんが死んだ事を思い出してしまう。

けどな、立ち止まってなんかいられない。じゃないと、今までが全て無駄になる。

「生存者はいない。なら、あそこに行くしかないよな。」

トラウマから持ち込めたえたと同時に、ある魔術を行使する。

目標地点は既に決まってある。そこに潜伏させていた使い魔に飛ぶだけ。ならば

「詠唱破棄、転移ー」

詠唱はいらぬ。その名を呼ぶだけだ。

意識が世界に置いていかれる感覚。一瞬にして視界が赤から白に変わる。火によって熱気を帯びた空気はなく、吹雪が吹く雪山が目の前に広がる。ここが標高何メートルだか知らないが、魔術で保護すれば大丈夫だろう。その中にポツンと、周りからの関わりを一切絶つたような建物があつた。

どうやって建てたかなんてのは少し疑問ではあるが、視た瞬間に理解した。世界に起きている異常事態の原因はここに、正確に言えばこの中にある異次元のような入り口の向こう側にある。

さらには唯一の生存者がここに集まっているようだ。

「ちよつと荒っぽいけど……」

そう確信した俺はなりふり構わず、玄関扉をぶつ飛ばした。

不審侵入者用の警報が鳴っているが、非常時に丁寧な事はやってら

れない。

異次元への入り口まずはそこを探す。正確には異次元とは少し違うが、とにかくこの施設内を走り、目的の場所まで着いたらまたドアを豪快に開き、部屋へと入る。

目指した場所、そこには真ん中に溶岩のように赤い球体と、それを囲むように棺桶とその残骸が散らばっていた。

ここでも爆発かなにかが起きたのだろうか。

「き、君！どこから来たんだ!?!」

それと同時に、部屋の外から声が聞こえる。その方向に振り向けば、今は吹き抜けではあるがガラス張りだったと思われる部分があり、その向こうには何故か頼りなきくわそうない医師のような格好をした人がいた。

「そんなのはどうだっていいだろ！ それよりも……!」

壊れている棺桶の中から比較的状态の良い物を探し、その前に立つ。

「ここから、向こうに行けるんだろ！ さっさと俺を飛ばしてくれ!」

「そんな無茶な……!」

「無茶かどうかじゃ……チツ、仕方ない。」

ここからでもわかる。誰かがこの棺桶の向こう側で戦っている。その中にはオルガマリーもいる。きつとここで行かなくては世界を救えない……!」

「……フォース性質、チェンジ変化。」

今まで幾度となく使ってきた詠唱。

俺が魔術を使うとき、絶対に必要な作業。

自身の魔力の性質を変えて、行使する魔術に合わせる。

棺桶コフィンに宿る魔力と術式を読み取り、欠けた部分すらも知識で補う。

「まさか、一人で……!?!」

俺自身が作った術式と備え付けてある術式を重ね合わせ、魔術を完成させていく。

「プロセス工程、フルコンプ完全踏破……!」

あと足りないのは魔力。筋力や瞬発力を魔力に変換するなんていう事はできるが、そんなの地の魔力が足りなかった十年前にやる事。今は効率良い運用と、ある課程で生まれた膨大な魔力量、そして俺専用で作られたこのローブ魔術礼装によって面倒な作業を省き、たった一工程で大魔術を行使する……！

「レイシフト霊子転移！」

術式を完成させると同時に、また意識が世界に置いていかれ、周りの景色が変わる。着いた先はまた赤い荒野だった。

さつきも見た冬木の光景そのもの。レイシフト転移をしたはずなのに何故またさつきと同じ所に。

……いや、何か違う気がする。違和感がどこことなくある。これは一体なんなんだ？

「クックツ、マタ漂流者ガキタカ。シカモ、コドモトハナ。」

それよりも、今考えるべきは眼前の敵か。

「もしかして、貴方……！」

「よう、今度はちゃんと憶えてるぜ、オルガマリー・アニメスファイア。」  
転移先にいた銀髪の少女、オルガマリーは俺の姿を見た瞬間、何故ここにいるのかという、驚いた顔をする。

「あの子は一体……？」

「え？ え？ まさかの地元住民？ けど、所長さんも知り合いみたいだし、違うのか？」

その他にもひょうきんそうなツンツン黒髪の少年と生真面目そうな片目隠したピンク髪の……なんだ？ ボディアーマーを纏って盾を持ち、そして人並み外れた力を持つ少女、という事は英霊か？ にしては、人っぽいというか、慣れてない感じがするというか。

「サテ、デハドチラヲエラブ？」

「カッテニエラブ。」

ま、後で確認するとしてだ。目の前の真つ黒い奴らが敵っぽいな。しかもサーヴァントの型落ちではあるが、その片目少女よりかは確実に強い。確実ではあるが、一応確認してみるか。

「おい、オルガマリー。敵はあいつらで良いんだな？」

「え、ええ。もしかして、助けてくれるかしら？」  
「まあな。」

よし、勘違いはなし。なら次は

「そこ二人。日本人っぽい子はマスターで、ピンク髪はサーヴァント。そんなもってオルガマリーを守ってあいつらを倒したい、つてことで良いな？」

「は、はいー！」

「そうです……けど。」

これで最低限の状況把握は完璧だ。最後はあいつらを倒すだけだ。

敵は二人。一人は腕に包帯を巻いた見たことあるようなアサシン<sup>奴</sup>、もう一人は様々な武器を持った武士といったところか。英雄王よりは大分マシだろうな。

正直どつちでも相手になれるが、盾少女の能力を見るに搦め手を使うアサシンを任せるのは酷だろう。

「なら、そっちの武者は任せた。俺はもう一人の奴をやる。あくまでも時間稼ぎをしろといてくれ。」

「分かりました！」

「よく分からないけど、了解です。」

簡単な作戦を支持した後、互いに戦う相手と対峙する。

「私ノ相手はキサマカ。ナマイキナ子供トハ実力ブソク……。」

英霊と戦う人間、そんなのは一握りすらいない。けれども、俺は過去に英霊と戦い、そして勝ってきた。都合の良い様々な条件付きがあつたとしても。

「哀レナ、目立チタイトイウ欲望ガ先走り……。」

勝利の理由、それはこの魔術。力を一点に集中させ、相手よりも優れた部分を作る。

今回は俊敏力を強化する。相手が反応できないほどのスピードで、戦況をこちらの手に取る。

「……キサマ、キイテオルノカ！」

「お前、やっぱ型落ちだな。色々と下がりすぎだ。」

「何ヲ……ッ！」

体を最高速まで上げ、背後に回りうなじを斬ろうとしたが、やはり英霊と行ったところか、流石に単調な一撃は防がれる。

「これは流石に防ぐか。けど、ギリギリだな。」

「ナゼ、コンナヤツガ……!?!」

確かに子供に見えるかもな。けど、

「見た目だけで判断するのは三流以下だぜ、四流サーヴァント。」

また体を加速させ、今度は距離を離す。

さっきの一撃は布石。本命はこの後……!!

「苦しみなき拷問を、鉄の処女!」  
アイアンメイデン

アサシンを攻撃した際に仕掛けた魔術陣を発動させ、周りにある瓦礫を集める。敵を押し潰すかのように。

「アガツ……! ウガガガ……!!」

そして、大量のコンクリートが敵を覆い隠した時、瓦礫の収束は治まる。アサシンは生きてままだはあるが、まさにコンクリート詰め状態で、動く事は不可能だ。

「……焼かれる。」

だから、今度は火を集める。全てを焼き尽くそうとする火を操り、纏わせる。

「つ……! これは……!」

「嘘でしょ、まさか彼がここまでの人材だなんて……。」

集められた炎は光と熱が強くなり、それを極限まで引き上げられ、目にした者の眼すらも焼き尽くすような光だった。

熱が体を溶かし、光が霧散させる。形など残させない。痕跡すらも消す。そういった意思を持つかのような残酷な火焰が数十秒の間、敵を焼くと次第に治まり、そして元の場所へ帰るように拡散していく。

「手応えあり。気配遮断による逃走もないだろう。」

確実に倒した。

まあ、十年前よりも成長したんだ。英霊もどきに勝っただけだが、強くなったと実感できる。むしろ、こんな奴は俺一人で勝たなければ、あいつらに申し訳が……

「だから言っただろ、型落ちだつて。」

突然、俺は後ろを振り向く。

何故か。それは背後に敵がいたからだ。

振り返れば、俺にナイフを突き刺そうとしていたアサシンがいた。あそこから脱出し、気配遮断によつてそれを悟らせないようにしてたんだろう。

「ナ、ナゼ……!」

「お前は耳も悪ければ、自覚もないのか。ならもう一回言つてやるよ、お前は型落ちだ。気配遮断もお粗末だし、読みも甘すぎる。わざと気配遮断に気づかない振りをしたら、案の定動いた。

昔、お前の本来の姿を見たが、あまりにも違いすぎる。根底すらも変わつちまつたお前に負けはしない。」

しかし、そのままであればナイフがこの体に刺さるのみ。

その前に俺は古風な魔術杖を召喚する。古代からあるような杖で、細長い木製の杖の先端に魔術的な装飾、特に目立つ藍色の石が施されている。

それを相手に向け、最後のトドメを刺す。

フォトンスピア  
「光 槍!」

「ゴハッ……!」

まさに名が表す通り、杖を柄として魔力の刃が先端に形成され、光の槍ができあがる。

しかし、貫くというよりかは、アサシンの上半身と下半身を分断させるような大ききさで、胸を押し潰す。

そのまま、アサシンはもう何も喋らずに、光へと還る。

「今度こそ終わりだな。さて、そっちは……」

一先ずアサシンは倒せた。

ならばと思ひ、武士の方を任せた黒髪の少年とピンク髪の少女がどうなっているかと、そちらの方へ見ると、

「はあっ……はあっ……、戦闘終了……です。」

「すごいぞー！ よくやったな、マシユ!」

すでに倒した後だったようだ。

「お前ら、よくあいつを倒したな。」

「は……はい……。ありがとうございます……。ござい……ます。」

少女の方は慣れない戦闘だったのか、息絶え絶えで答える。対して少年の方は、

「あ、ありがとう。ところで君、迷子……なのかな？　どこの子か分かる？」

あらまあ、子供扱いですか。けど、こればかりは相手に非があるわけでもないのでしょうかない。

何故なら、身長一三〇センチしかないこの体であれば、小さい子と見間違えられても仕方ない。さらにはローブも被っており顔が見えないので、体格からしか歳が判断されないのだ。

「ちよつと、貴方！　年上に、しかも本来であれば上官にあたる人になんていう失礼を働いているのよ！」

「え!?　この子……いや、この人年上なんですか!？」

元々俺を知っているオルガマリーは、激怒しながらも彼の勘違いを正す。

「というか所長、この人……」

「ああ、やっと繋がったよ！」

藤丸が何かを言いかけるが、話の途中で邪魔が入り、目の前にある人物のホログラムが映し出される。この声は確か……

「何、ロマニ？　今から少し忙しくなるのだけだ。」

「突然このカルデアに子供が入ってきたと思ったら、単身でレイシフトをしてそっちに向かったんですよ！」

確か見た目は……」

医師らしき男がオルガマリーに説明をしていると俺と目が合い、驚いたような顔で

「彼です！　そう、彼そのものの姿をしていました！」

いやそれ俺だよ。

「……はあ、ちよつど良いわ。ここで纏めて話した方が良いわね。

創太さん、情報共有のため、まずは自己紹介をしてくださってもよろしいかしら？」

「ああ、けどそつちからも説明しろよな。」

みな注目が集まる中、俺は一つ咳払いをして自己紹介を始める。  
「俺の名前は古崖創太、これでもれっきとした二十七歳だ。この体については……まあ色々あった結果だ。」

今は魔術師として世界を飛び回っていて、魔術の開発、実践投入を  
行いながら、紛争やテロの解決なんかもやっている。

オルガマリー、こんぐらいでいいか？」

「ええ。付け加えるなら、彼は冬木の聖杯戦争の生存者で、さらには  
元々指揮官、つまり貴方達二人の上官としてカルデアにスカウトされ  
ていました。」

……何故か、断られましたか。」

「へえ、彼が……」

ロマニと呼ばれた医師は俺の事を耳にしていたのか、なるほどなあ  
と言いながらじつくりと眺めてくる。

「それで、一度は断った貴方が何故急に……へ？」

オルガマリーのその質問、俺は何故か違和感を感じる。

急につて言ったつて外があんな風になって、しかも生きている人が  
集まっているなら、ここに……いや待てよ。

「それに答える前に確認しておく。この……いや、カルデアつて  
言ったか？ その外がどうなっているのか分かるか？」

「外？ ロマニが外部との通信ができないとは言っていましたか  
……」

「つまり、まだわかっていないと。」

「何ですか、そのシュレディンガーの猫みたいな話は。」

どうやら本当に把握していないようだな。

「お前らにとつては、正にその状況が正しいかもな。なら、最初に言っ  
ておいてやる。」

カルデア内にいる人間以外はほぼ全滅だ。」

その事実は、彼女らにとって大きな衝撃となる。



「冗談はやめなさいよ！ 今こっちは……！」

「残念ながら事実だ。いたとしてと極少数。しかも死にかけでしかない。」

俺だって冗談だと思いたい。人が死んでいるなんて考えたくもない。

「そんな……だったら親父は……母さんは……姉ちゃんは……浩二は……？」

少年は泣きながら、俺に擦り寄る。それが嘘であってほしいと、親しくしていた人間は死んでいないと、願う。

そんな彼に何を言うべきか。そう考えていたら、かつての自分と重なり、そしてまたもやフラッシュバックする。

俺は彼女の支えがあって今ここにいます。彼女が俺にかけてくれた言葉、そして行動が俺に活力を与えた。

ならば、それと同じ事を彼にもするべきなのだろう。

「なあ、親しい人が死んで、お前は確かに悲しいんだろう。大切な人が亡くなり、自分が残されて。」

今は思う存分泣け。無理に前を進めとは言わない。いつか、お前自身が一步前に進みたいと思った時、俺が付いていてやる。」

「何を……何を言っているんですか！ 何が思う存分泣けとか！ 前に進みたい時とか！ もう終わったんですよ！ 何もかも！」

なのに、なんでそんな事を言えるんですか！ 貴方は……貴方はどうなんですか！」

「少し待ちなさい、藤丸立香。」

暴走気味の彼であったが、それをオルガマリーが止めようとする。

「待つのも何もないでしょう！」

「アンタは勘違いをしている。それを直そうとするだけよ。」

「勘違いって……！」

「まだ全てが終わったわけじゃないわ。説明会の時に言ったでしょう。彼が言っている事、つまり人類の滅亡の滅亡はこの特異点によって引き起こされていると。」

その説明に少年はハッと気づく。

「ということとは……この特異点を解決すれば……」

「元に戻るかもしれないわね。」

さつきまで絶望のどん底に落とされていたのが嘘のように、明るい表情を取り戻す。

「よかった……本当に良かった……！」

と思いきや、感極まって嬉し泣きをし始めた。

まったく忙しい少年だ。けど、彼動けるまでもうすこし時間がかかりそうではある。なら、置いていくのは危険だしもう少し置いていくか。

## 昔の敵は

「色々と迷惑をかけてしまい、すいませんでした。」

藤丸立香と呼ばれる少年が泣きに泣いて数十分後、完全にとは言い切れないが、ある程度復帰したようで、目が赤く腫れながらも自身によって皆の足を止めてしまった事を悪く思っているのか謝罪をする。「本当にそうですね。あんな状態では、置いても行けないし、無理やりひっぱることもできないから、いい迷惑でした。」

「所長、それは流石に辛辣と言いますか……。」

「そうだな。一般人が急にこんな状況で冷静にいられるのは異常だ。藤丸、あんまり気を負うなよ。」

「うん、彼の言う通りだね。」

「フオウ！」

「はい……ありがとうございます。」

オルガマリー以外は藤丸を励まそうと、優しい言葉をかける。オルガマリーも励まそうとはしているのだが、素直になれないのかキツイ言い方をする。

「さて、藤丸。お前が泣いている間にお前以外の自己紹介、そして状況把握は終わった。もちろん、お前の事も少しだけ説明してもらった。」

藤丸以外の自己紹介を簡潔にまとめるところだ。

元々このカルデアに所属し、今回の騒動の中でサーヴァントをその身に宿し、人間として生きている天然真面目少女、マッシュ・キリエライト。

医療班に所属しているが、カルデアのお偉いさんが一気に意識不明となり、今は一時的に全体の指揮官として動いているゆるふわ系男性、ロマニ・アーキマン。

謎生物、フオウ。

オルガマリーに関しては前に自己紹介してもらったので、省略されて流れたが、もう一度説明しておく、前所長でもあり彼女の父親が亡くなってから現在までカルデアの所長を務めている経歴があり、魔術の腕は一流なのだとか。

後の説明は、カルデアは人類の未来を観測しており、二〇一六年までしか人類が生存できないとされ、その原因がこの冬木市が特異点であるとは言われていた。しかし、その観測よりも早く人類の焼却が行われてしまった。

ここからは推測ではあるが、予測よりも早く人理焼却が行われたのは、特異点が新たにでき、それが外の悲惨な光景を生んでしまったのではないか。だが、何故カルデアはその影響を受けないのかと、それをオルガマリーに話したら、カルデアスの磁場がカルデアを守っているのだろうかという事だ。

以上がオルガマリー達との会話における説明だ。

「けど、俺としてはお前の口からも話してほしいと思ってる。本人の口からっていうのが一番だからな。」

「分かりました。」

俺のわがままを聞いてくれた藤丸は一呼吸を入れて、自己紹介をする。ただ、圧倒的に俺の方が身長が低いので、必然的に見下ろされてしまう。

いつも思うが、何度体験してもこれには敗北感がある。特に女性を、さらに言えば実家へ帰った時にバゼットを見上げるのは屈辱的ではない。

「僕の名前は藤丸立香、日本生まれの日本人です。十七歳の学生で、魔術師じゃないんですけど、二週間前の高校の定期検診でマスター適性？ とレイシフト適性？ が高いらしいから、それが必要だとされて昨日家でくつろいでいたところ、強制的にカルデアに連れてこられました。」

……なんか、疑問がありすぎる自己紹介だな。

「オルガマリー。」

「私は知らないわ。確かに世界中から才能ある者を集めるとは言ったけど、こんなド素人をカルデアに招き入れろという指示はしていないわ。」

「そういう事じゃねえ。」

何故能力を持たない人がここにいるからじゃなくて、強制的に連れ

てこられたつていう所に疑問を持ってんだよこちとら。

「はあー……。藤丸、お前運が良いのか悪いのかよくわかんないな。」  
「いや、運は良い方だとは思いますが。結果論ですが、まだ生きていますから。」

わお、この子ポジティブ。

俺が同じくらいの歳には、こんな事考えてられなかったのにな。

「なんとも、たくましい。さっきまで泣いていたのが信じられないくらいだ。」

「そうですね。先輩のときたま発揮する凶太さには驚きです。」

「マシユ、その言い方は褒められているように聞こえないよ……。」

初対面であるはずなのに、いつの間にか打ち解けてきた俺たち。藤丸が一般人でマシユが天然という事からかか、あまり疑心暗鬼せず話をしていく。

「いやあ、仲が良くてよろしい。僕もそこに混ざりたいくらいだ。」

「ぼっちはぼっちでいてください。」

「辛辣！ どういう育ち方したらこんな子になるの!?!」

俺が来る前に何があったのかは分からないが、ロマニ哀れ。と言いたいところだが、何故か俺はナイス藤丸と内心親指を立てていた。

なんかこう、ロマニに対しては無条件で嫌悪するというか。居てはならない存在というか。

アーチャーもこんな心情だったのだろうか。

「はい、そこ。騒がない。」

これでやつと先へ進めるというのに、口を動かすのはやめてください。」

しかし、そんな場合ではないとオルガマリーは邪魔をする。いや、彼女の言い分も正しい。

そもそも、今はそんな事をしている場合ではない。

けども、だ。

「まあ、待てオルガマリー。まだ話していない奴がいるみたいだぜ。」  
「訳の分からない事を言わないでください。私達はこの特異点を解決しなければ……。」

そんな事は知ったことではないと言わんばかりに、俺はその言葉を無視し、今の今までずっと俺たちの事を監視するように見ていた人物へ振り向く。

「そこに隠れてる奴、こっちに來たらどうだ。」

瓦礫の影に隠れていた人物、そいつに姿を見せるように威嚇する。

「おいおい、そんな殺気立たせなくてもいいだろ？」

悪気はなかったと言いたげに、手をヒラヒラさせながらあっけらかんとした態度で現れたそいつは、かつて冬木の聖杯戦争で戦ったランサーだった。いや、その姿や力からしてランサーとは別のクラスを以って召喚されたようだが。

「サーヴァント!? 反応は無かったはずなのに！」

しかし、そいつの姿を見た瞬間、俺以外の全員が戦闘態勢に入る。

「てててて敵!? アンタたちなんとかしなさい！」

ごめん、オルガマリーと俺以外な。

所長だつて言うのに焦りすぎだろ、この人。

「マ、マシユー！」

「はい！ 先輩は後方に……！」

「待て。あいつに戦う意思はない。もしあったならいつでも攻撃していたはずだ。」

しかし、俺は肩に手を置いて止める。

ギリギリ、ギリギリ届いてる……。腕を思いっきり上げてギリギリ

二人の肩に届いてる！

低身長はやっぱ嫌だな……。

「ほう、いつから気づいていた。」

「最初からだ。」

最初から、つまり俺がここへ來た時、ランサーはすでに藤丸達を隠れながら見ていた。

「流石といったところか、魔術師。このまま気づかれなかったら、どうやって出てこようかと思っていたから、助かったぜ。」

「まあな。とりあえず名乗ってくれ。話はそれからだ。」

真名は知っている。しかし、相手が何処まで話してくれるか。その

誠意というものは知りたい。さらに、彼の姿からして今回はランサーではなく、別のクラスで限界している可能性が高い。

「そっちから名乗る気は？」

「どうせ隠れて聞いてたんだろ。」

「そこまで、気づいているとはな。」

「なっ……！ アンタ、知っていながら私達に話させていたわけ!？」

知らず知らずの内に敵であるかもしれない奴に情報を明け渡していたことに、怒るオルガマリー。

「知られても不利になるもんは話していいいだろ？」

それに言ったじゃねえか、あいつは敵じゃない。少なくともな。もしそうではなくても俺がなんとかする。信じてくれ。」

俺は真剣に、そして確固たる意思を持ち説得する。信頼を預からせてくれと、頼むように。

「……貴方は頭が回るとも聞いた。それを信じるわ。二人もそれで良いわね。」

「はい。」

「まあ、僕は最初から信じてますけど。」

藤丸とマシユの二人からは快諾をくれるが、一人うるさい奴がいるな。

「おーい！ 二人つて、僕の意見はー!？」

「さて、そこのサーヴァント。クラスぐらいは教えてくれるわね。」

「所長!？」

あ、無視された。

「このお嬢ちゃんは気が強いのか弱いのか。」

俺のクラスはキャスター。魔術師として召喚されたんだが、今はそのちっちゃい奴の方が強いと思うぜ。」

英霊に認められるのは光栄なことだ。前は状況が為にそんなのは拒否したが、今は純粹に嬉しい。二回も殺されそうになった相手というのを除けば。

「それで、目的はなんだ？」

「本当はちよいとばかり協力を仰ごうかとな。俺としちゃあ、この戦

争を終わらせたい。

だが、お前がいるならそつちのメリットがねえな。さっきの戦闘で助ければ信頼はしてくれるだろうとは思ったが、こりゃあ、俺の目的も達成できなさそうだな。」

なるほど。最初から勘付いてはいたが、予想通りといった所だな。「だってよ。どうする、お前ら？」

「私は賛成よ。信頼とまではいかないけど、戦力が必要ではあるわ。」  
「僕も賛成です。」

「私もです。彼がこの世界において、まともな人ですから。」  
全員一致というわけか。

「あ、僕も……」

「というわけでキャスター、一時的だが協力よろしく頼むぞ。」

「へっ、ありがとうよ。」

「また無視かい!？」

「おう軟弱男、ちよつとは自重つてもんを覚えろよ。」

「そしてまた辛辣!」

ロマニよ。どうやらいじられ役という星の下に生まれてしまったようだな。

「でしたら、仮でも契約は必要ですね。この場合、誰がマスターになるのですか?」

「立香しかねえだろ。そこのお嬢ちゃんはマスター適性がないみてえだしな。」

「うるさいわね。好きでこうなった訳じゃないのよ。」

そういえば、そんな事を自己紹介の時に言ってたな。魔力の量や質はかなり高いはずなんだが。

……あれのことは言うべきだろうか。

「創太でも良いんだが、適性で言えば坊主の方がたけえしな。」

まあ、俺はマスターではなかった訳だし、妥当な判断だろう。

「さてキャスター、協力しあうならお互いの状況を知る必要があるわ。けど、貴方はもう知っている。」

おい、オルガマリー。誰かさんのせいとどかっていう眼差しで俺を



見るな。

「なら、次はそつちの番じゃない？」

「確かにな。説明できることならなんでも良いぜ。」

「では一つ、貴方はこの惨状がどうやって起きたか知っているのかしら？」

「どうやってかは分からん。ここでは聖杯戦争が起きていたんだが、いつの間にか炎が街を襲って、人を全部焼き尽くしやがった。」

聖杯戦争、つまりは冬木の第五次聖杯戦争のことだろうか。しかし、俺が経験した事は今の状況とは全く違う。そもそも、クー・フーリンがキャスターで召喚されていない。

どういう事なのだろうか。

「だが、俺たちサーヴァントだけはマスターが死んでも生き残った。これからどうするかと考えていたら、セイバーの奴が急にほかのサーヴァントを襲っていったな。」

聖杯戦争を再開させたつもりなんだろうが、奴にはおかしな点があった。まず姿が変わっていた事、もう一つは倒した相手を従わせた事だ。そのせいで俺以外のサーヴァントは全員セイバーの隷属だ。」

「では、そのセイバーがこの特異点の主犯格だと？」

マシユが話から予測を立てるが、俺としてはそうではないと思う。そもそもセイバーがこんな事はしない。おそらく姿が変わったという事から、彼女の身に何か起こったのではないのだろうか。

「いいや、それはない。あいつとは異変が起こる以前に戦った事があるんだが、そんな事をするようには見えなかった。」

俺の声を代弁するかのように、マシユの推測を否定するランサー。

「ならば一体誰が……。」

「さあな。けど、この特異点は聖杯を手に入れる事で直るんだろ？」

なら目的の場所は決まってる。」

「まさかとは思うが柳洞寺の奥にある……。」

「そういやお前さんはここの参加者らしいな。ああ、その通りだ。創太の言う場所、その寺の奥にある大空洞に聖杯はある。」

やはりか。

俺たちもあそこが決戦の場所になってしまった。大聖杯が眠る大空洞が。

「ならば、ここでの目的地は決まりましたね。藤丸立香、マシユ・キリエライト。貴方達に命令オーダーを与えます。この特異点を解決するためその聖杯を回収する事。」

「了解です。」

「分かりましたよ、所長。」

自身が上である事を知らしめておきたいのか、二人にあえて命令しているオルガマリィ。なんか、小物っぽく見えるからやめた方がいいと思うな。

「創太、貴方も良いですね。」

「本当にそれで世界が救えるならな。」

それしか方法がないっていうなら、やってやろうじゃねえか。ただ、人が死ぬのだけは勘弁な。

「ならば、行きましよう。聖杯の回収へと。」

—————

相対する敵は五体。どれも骸骨兵、いや竜牙兵といった方が良いか。何しろ、正史のキャスターが使っていた物に似ている。槍や剣、弓矢を巧みに使ってくるが、敵ではない。

「やあつー！」

その内の最も前に出ている敵を、マシユが盾による打撃でよろめかせ、

「A！」  
アンサズ

直後にキャスターが火のルーン魔術で燃やし、  
「風弾！」  
エアロ

最後に俺が風を送り込み、更に火を広げ、後方の敵まで燃やし尽くす。

「……敵影、反応共になし。戦闘終了だ。みんなお疲れ様。」

ロマニが状況報告をしたところでようやく全員の緊張が解かれる。しかし、警戒は怠らない。いつ誰が襲ってくるかは分からないのだから。

「はあ……はあ……。」

だが、マシユはそんな余裕もないくらい息を荒げる。

やはり戦闘に慣れないのか、体が疲れてるんじゃないのか？

「無理はするなよ、マシユ。あともうちよいで休めるから。」

「は、はい……。」

「辛いなら、後ろ退がってろ。このぐらいなら、まだ二人でもいける。」

「いえ……まだ……。」

粘ろうと頑張っているのだろうが、本命の前にやられていえば元も子もない。キャスターの言う通り退がった方が……。

「……着いたか。」

いや、その前に中継地点か。

「ここが俺の家だ。」

俺が指を指した場所、そこにはただの瓦礫と、燃やし尽くされた跡が残っているだけだった。

「創太さん……。」

「こういうのは慣れてんだ。そんな気にするな。」

涙が出そうなのを我慢して、俺は瓦礫をどかす。確かに我が家が崩壊しているというのは堪える。けども、今はまだそんな時間じゃない。

「ええと、確かに……。」

家が破壊されているとはいえ、地下室はまだ健在だろう。どうやら災害の中に地震はないみたいだし。

しかし、その結果

「無……。」

あるべきはずの地下室が存在すらしていなかった。

破壊されているわけでも、埋まっているわけでもない。魔術を駆使して調べても、この下には霊脈はあっても、部屋があつた痕跡すらないのだ。

「何を立ち尽くしているの？　ここに工房があるって言ったのは貴方じゃない。」

「元の世界ではあつた。けど、ここには無いんだ。」

「……そう。これも正史とズレた結果でしょうね。」

つまり、ここは俺の家ですら無いという事だ。

「なら、次だ。今度は確実にあると思う。」

「本当に？ 彼女もそろそろ限界が近いようだし、休める場所は早く見つけないといけない。」

「大丈夫だ。ここから歩いて十分ほどで着く。」

前にも言ったかもしれないが、俺はイレギュラーだ。ほんのちよつとした事で変わってしまう者。だから、今ここにいられるのは奇跡そのものだ。

しかし、あいつは違う。あいつは良い意味でも悪い意味でも強い運命が存在する。そうそうなる理由で変わらない筈だ。

「ほら、見えてきた。」

「あの武家屋敷が……？」

俺が言った通り、歩いて十分。ようやく休憩できそうな場所に到着する。

「何故ここを？ さっきのは貴方の家かもしれないというので分かるけど。」

「なあに、友人の家だからだよ。」

幸いにも結界の跡はあるからそこから再現はできるし、建物自体も雨風をしのげる程度には残っている。

誰もいないようだし、これならば簡易的な拠点にはなるだろう。

「さあ、入ってくれ。俺は外で結界を張るから。」

「あんがとよ。さ、ひとやす……」

「お前もやんだよ、キャスター。」

「冗談だって。そんな怖い顔しなさんなって。」

嘘つけ。完全にサボるつもりだっただろ。

「つたく。……みんな、入ってすぐの角を曲がって右側の襖を開けたら居間だから、そこで休むと良いぞ。」

「そうするわ。」

「すみません、私が不甲斐ないばかりに……。」

「マシユは気にすることないって。僕なんか何にもできてないんだ

し。……なんか自分で言っつて惨めだなあ。

あ、お二人ともありがとうございます。使えそうな物があるかは先に探しておくのでよろしくお願いしますね。」

三者三様で返答しながら、元衛宮邸に入っていく三人。特にマシユは疲れた様子だった。急に戦闘できる体になっていえば、精神の方が保たないのだろうか。

なら、そんな彼女の為にも一仕事しよう。

「キャスター、この建物の裏に少し開けた庭がある。そこで結界の起点を作るぞ。」

「はいよ。だが、俺が使うのはルーン魔術だぜ。創太の使う魔術と合うのか?」

「大丈夫だ。魔術の豊富さも自信はある。お前に合わせることもな。」

「ほう、さつき使ってた魔術も火だったり地だったりと色々だったな。もしかしてだが、お前の属性は五大元素アペレージ・ワンか?」

「残念、全くのハズレだ。」

そう勘違いされても仕方ない。この力を持っていることは機密事項だ。魔術師キャスターの英霊でも、知る者はそうそういない。あのコルキスの王女ですら、知識外みだいだったし。

「それを全て使えるのは事実だけだな。ほら、さつきとここに結界の起点張るぞ。」

「へいへい。」

テキトーな返事をした後、彼の目は真剣そのものとなり、魔力を練る。

俺もそれに続き、キャスターの魔力に合わせるように、魔術を即構成、即行使用する。

ルーン魔術であろうと、神代の魔法であろうと、未知なる技術であろうと、俺にかかれれば一瞬にして自身の物にし、どう動けばいいかを理解する。それが俺の魔術だ。

結界を張り始めてから、数分も経たない頃、結界は完成される。

これならば一時間程度は保つだろう。骸骨はおろか、サーヴァントでも突破は難しい。もし来たとしても、逃げる時間ぐらいは準備でき

るだろう。

「本当に合わせちまうとはな。アンタ、本当はどっかの英霊じゃねえのか？」

「真正正銘の人間だよ。」

体はどこぞの聖女さんの物でしたけど。

「キヤスターこそ、どこの英雄だ？ 魔術師にしては重心移動や足の並びが槍術に近い。そんなに動ける魔術師なんてのは聞いたことはねえぞ、ランサー。」

「ハッ。気づいてんなら最初から言えや。」

「おっと、ついつい口が滑っちゃまった。二回も槍で殺されかけてんに、こんな事言っちゃまえばどうなることやら。」

それはわざとらしく、皮肉をたっぷり込めたお返しだった。

別に根に持つちやいないが、どうしても頭の片隅にあったもんで話さざるを得なかったと言うか、何というか。まあでも、ランサーがこんな事で逆ギレすることはないだろう。現に、

「そりやさぞかし、大変だったろうよ。」

笑い飛ばしながら、後で酒のアテにするかのように応える。

「安心しな。今は槍なんざ持ってねえし、あつたとしてもお前を殺る気もねえよ。」

「そうしてくれ。三回目も勘弁だ。」

まあ、体を貫かれたのは四回ぐらいあるけどな。

「さあな。次の召喚でどうなるかも知れねえし、運が悪けりや今回中に……」

「脅かすように言うのはやめてくれ。」

「創太もそんなお堅いことは言うなって。もしそうなくてもアンタは生き残る。心臓を穿たれたのにここにいてこたあ、そう言うことだ。」

自慢の槍を完全攻略されたと知ってなおも、俺の実力を認めるような口ぶり。やはり、ランサーという男はさっぱりとした奴なんだろう。

「そんなことより、さっさと中へ入ろうぜ。アンタは生身の人間なん

だから、少しくれえは休んどけ。」

「分かってるよ。」

俺にとつては昔話、キャスターにとつては何も知らない他愛のない話をしながらも、屋敷の中へと入っていく。ただし、靴は脱がず、土足のままで。どこから変なもんが飛び出してんのかわかんないからな。

「で、藤丸どうした？」

と思つて、居間に入ればオルガマリーが魔術で藤丸の足の手当てをしていた。

マシユはその横で座っており、藤丸を心配するようなしぐさだった。

「彼が靴を脱いで屋敷内を歩き回りだして、案の定床から飛び出た釘を踏んだのよ。」

俺の質問を、呆れたようにオルガマリーが説明をする。

さつき懸念してた事を他人がやるのは予想外でした。事前に言つとくべきだったなこれは。

「しよ、しょうがないじゃないですか……。日本人は室内に土足で入ってはいけないって……。」

「彼はどうなの？」

俺の方を指差して、藤丸に靴を履いていることを確認させる。

「あ、あははー……。」

「倒壊していないとはいえ、所々は壊れてる。そういうことも頭に入れないと、この先で生きて行けないわよ。」

「……はい。すいませんでした。」

なんか怒られている生徒と叱っている先生を見ているかのような感じだな。

まあ、たしかに藤丸には少し自覚がないというか注意不足というか。けど、おそらくは役に立とうとした結果なのだろう。それに関しではあまり責められない。

「それで、何か目につくような物は？」

手当てをまだ受けている藤丸の正面に俺は座り、収穫内容を聞き出

す。

「無かった、少なくとも居間にはね。何か応急処置に使えそうな物とか探していたけど、使えそうにないわ。」

ま、そうだろう。あつたとしても土蔵の中ぐらいだ。

「なら、今は休んだ方が良い。マシユも疲れてるし、どつかの誰かさんは怪我をしたし。」

「あつははは……はあー……。」

おいそこ、愛想笑いしない。

「だが、作戦会議ぐらいはできる。」

「そうね。誰が何をできるかぐらいは確認した方が良いでしょう。」

俺としては、人理が修復された後の事も考えて、あまり能力の全ては明かせない。だから、今回は彼女らに少し誤魔化されてもらおう。

「なら、まずは俺だ。さつきランサーには言ったんだが、一応アベレージ・ワンの属性全てを使える。地だろうと空だろうとな。」

「え、今なんて!?!」

ゆるふわうるせえ。

確かにアベレージ・ワンという単語だけで驚きかもしれんが、こちら他にも秘密があるんだよ。

けど、オルガマリーはそうはせず、

「薄々気づいてたわ。」

と、淡白に答える。

「所長!・アベレージ・ワン 五大元素なんてかなり希少な属性じゃないですか! それを」

「うるさいわね、ロマニ。最近スカウトしてきた彼女もそうだったじゃない。」

アベレージ・ワン 五大元素の彼女……?」

「なあ、それって……」

「え? ……ああ、そうだったわね。彼女、遠坂凜はおそらく無事よ。爆発の被害に遭って冷凍されてはいるけど。」

オルガマリーは俺の心配を汲み取ったかのように答える。

そうか、失念していた。彼女もここに来ているんだった。今の今ま



で考えてはいなかったが。

「ありがとう、オルガマリー。」

「な、なによ突然。」

「そうしたのはお前の指示だろ？ さっきも似たような事を言っていたし。」

藤丸が泣きまくっていた間に受けた説明の中で、スタッフとマスター候補を冷凍したと聞いた。多分その時に遠坂も一緒にそうしたんだろう。

「言つとくけど、私は責任を逃れるためにそうしたまでです。」

「それでもだ。」

真つ直ぐと、オルガマリーの目を見ながら力強く答える。

仲間が助かったというのは、それだけで心の救いだ。死なせたくないと願う俺の心の。

「あゝ、少し良いですか?」

と、その空気を邪魔することに申し訳ないと思いつながらも、割り込む藤丸。その声に二人とも注目をする。

何を質問するのかと、続きを聞いていると、

「その五大元素アベレージ・ワンっていうのは?」

ああ、そう来たか。

一般人からすれば、そのワードは聞いたことのないものだ。それが分からないというのは当然なんだが……

「先輩、五大元素アベレージ・ワンというのはですね……」

「待った、マシユ。」

細かく説明しようとしてる彼女を止め、オルガマリーとの相談の間を作る。

「どうする? この特異点が終わったら、カルデアの外は戻るんだろう? そんな時の藤丸の事を考えたら……」

「あまりこつち側に踏み込ませる気は無いわ。戦力は他から調達する。そうでなくても、今は細かく説明する必要はない。」

「じゃあ、端的にするぞ。」

「そうしてちょうだい。」

わずか一分の話し合いの中で、出た答えは端折るという事だ。

「取り敢えず藤丸、俺は魔術であれば何でも使える。そういう事だ。」  
「へえ、そうなんですか。」

追求はせず、相槌するのみ。

藤丸があまり深くまで聞いてくるタイプじゃなくて助かった。

「そんじゃあ、次はキャスターだ。」

「俺か？ つつても、多分だが俺のできることは創太も大体できん  
じゃねえのか？」

「良いから。俺はルーン魔術を使えるが、完全にマスターしているわけでもない。なんなら、それ以外の能力を伝える為にも真名もバラして良いんじゃないか？」

「真名って……まさか貴方、彼の正体を？」

おっと、そういうええ言っただけじゃなかったな。

「キャスターはな、俺の聖杯戦争ではランサーで召喚されてたんだ。  
その経緯で真名も知ってる。」

今まで黙ってたのは、他人である俺から言うのも何だと思っただけ。  
あまり他人の情報を話すのは好きじゃないんだ。」

「貴方！ また黙ってたわね！」

「すまん。悪気があった訳じゃない。」

睨みつけるオルガマリーに対して謝罪すると、膨らんだ風船がしぼんでいくように怒りが抜け、あきれ返ってしまう。

「……今ここでそれに関して文句を言うのは時間の無駄ね。」

「本当に悪い。」

それでもつてありがとう。

「それでキャスター、彼からは言う気はないみたいだし、真名を聞いても？」

「別に構わんぜ。」

その後、キャスターの真名がクー・フリーンであった事、そもそも槍が得意である事、藤丸が全く聞き馴染みのない名前であるので、彼の伝承を色々と話していった。

「ほえー、ゲイボルクとか名前だけは聞いたことありましたけど、

クー・フリーンさんが使ってたんですね。」

「元々は師匠が使ってたんだけどな。」

——その師匠という単語に一瞬、悪感がする。

忘れていたが、キャスターの師匠ってあいつだったか。嫌な思い出しかないんだよなあ。半分事故とはいえ、俺が悪いのはわかるが、その後になんでああなんだよ……。

「さ、さあ。次はオルガマリーだ。」

「なんで詰まったのよ。」

う、う、うるせえ。変なことを思い出しちゃったんだよ。

「そんな事はいいから、さっさとできること言ってくれ。」

「できることって……アンタたちに比べれば何もないわよ。せめて、障壁を張って身を守ることぐらいかしら。」

「他にもあんだろ。サーヴァントはともかく、そこらへんの雑魚には負けることがないだろ、その魔力の量と質があれば。」

彼女は能力が純粹に高い。

規格外ではないにしても、魔術師の中ではかなり強いはずだ。

「それは慰め？ それとも、皮肉なの？」

「どっちでもねえよ。少なくとも、俺がお前ぐらいの時はそこまでの力はなかったし、優秀なのは間違いない。」

それは純粹に評価した言葉だった。嘘偽りのない俺から見た彼女の能力を。

「……ふん。ええ、分かった。それぐらいはしてやるわよ。」

「そうしてくれ。なら、最後にマシユだ。」

正直言つて彼女が一番の不安要素だ。何というか力を十全に使いこなせていないというか、自身の力を理解していない気がする、

「あの一、僕は？」

「答える必要があると思うの？」

「サーセン。」

「おいそこ、漫才をしない。」

まったく、何だつて藤丸はボケたがるんだ。

まあ、気を取り直してだ。

「マシユ、自分に何ができるかを言ってみてくれ。」

それは、この場にいる全員に情報を共有するためではなく、マシユが自身に宿しているサーヴァントを正確に把握しているかを確認するための質問だ。

藤丸と違つて、マシユの力はこれからも必要になってくる可能性が高い。ならば、彼女の為にもこの質問は重要だ。

「え、えつと……」

しかし、しどろもどろに話し始め、何から言っているのかを悩んでいる様子。

どうやらこれは、懸念していた事が現実となっているのか。

「先輩と所長には伝えてたのですが……その……私に力を託したサーヴァントというのが誰か、それが分からないんです。」

悪い意味で俺の予想が大当たりしてしまった。

「宝具は？ さっきまでの戦い方は自己流じゃなくて、そのサーヴァントが使っていた物なんだろう。なら、それと同じように宝具も自ずと分かるだろう。」

「それは……」

マシユの困ったような答え方は『NO』としか捉えられない。言つてしまえば、自身のサーヴァントの知識は全くないということになっていた。

「あの、宝具って一体？」

また藤丸くんですか。貴方は知らない事だらけですね……。

いや冗談だけど、ここで説明するのは……まあいいか。

「英霊が英霊たらしめる要素だな。技、伝承、持っている武器など、英霊によって違うんだが、それがあるから英霊と呼ばれ、後世に伝説として語り継がれる。」

分かりやすく言えば、英霊の最大の特徴が宝具っていう事だ。例としてはアーサー王が持っていたエクスカリバーとか。」

知り合いの名前を出して悪いとは思うが、藤丸も分かりやすいといえどこれしかなかったんだ。

許せ、セイバー。

「要は……必殺技って事ですね!」

「うん、大体合ってる!」

合ってはいるんだけどなあ、俺の説明からそれが導き出されるのは、すこし飛びすぎだと思う。

「マシユの場合は、おそらくその盾だ。特徴的であるし、何しろそれしか持ってない。概念的な物が宝具とかかもしれないけど、今は盾が宝具だと仮定した方が良い。」

マシユのその身丈以上の大きさ、十字架ともとれる特徴的な形の盾。それがただの道具であるはずがない。何しろ、エクスカリバーやゲイボルクのように、その盾にはかなりの『力』が秘められている。

しかし、どうにも似たような力を見た気がする。時代特有というか、誰かと関係があったような……。

「しかし、そうだとしても私には宝具の発動方法を理解していません……。」

「まあ、宝具が一朝一夕で使えたら英霊の面目丸つぶれだよな。」

マシユの申し訳なさそうな言葉に、ロマニが慰めようとするが

「なんだそれは。おかしいじゃねえか。」

キャスターが指摘を入れる。

「サーヴァントなら宝具を使えて当然だ。そうじゃねえなら、魔力が詰まってるだけだな。」

詰まってるって……表現の仕方が魔術師<sup>キャスター</sup>じゃねえ。

「気合いを入れりゃ、宝具を使えるんじゃないやねえのか? こう……: 大声出してみりゃ良いんじゃないやね?」

「そうなんですか?」

「そーうーなー……!!」

「キャスター待て。」

「それ犬みてえ……」

「ステイ。」

ふざけた事言ってるんじゃないやねえぞ。

「まあ、なんだ。とにかくキャスターは宝具を使おうっていう気合いが大事って言いたいんじゃないやねえか?」

「……はい。それを肝に命じて頑張ってみます。」

正直言つて、俺はマシユのような経験をした事はないからの確なア  
ドバイスはできない。

次に戦つてできるつていう保証もないな。それはどうやって……

「マシユ、悪いがそれを今使えないと聖杯は取れねえぜ。」

「え？」

「聖杯を守っているのはセイバー、真名はアーサー王だ。」

「おい、それって……」

ここの世界まで、あいつなのか。

というより、やはり今使えないとダメなのか。

「あのブリテンの王と呼ばれてる……？」

「ああ、さつきも創太が言つてたな。あいつは聖剣を持っている。

そこら辺の奴はいいが、あいつと戦うには対抗できるもんは必要  
だ。つまり、お前さんの宝具だ。」

あれを防げるかと言われれば、俺は難しい。一人ならまだしも、全  
員となるとな。しかし、マシユの宝具があればあるいは……

「そんな力が私に……」

「……しようがねえ。すこし表に出ろ。」

全員がキャスターの指示通りに外へ出て、裏庭に移動する。

「マシユはそこに立て、立香もだ。」

「え？ マシユは分かるとしてなんで僕もなんですか？」

「足が痛いかもしれねえが、我慢しろ。」

何が何だか分からないと言つた感じで、立香は怪我した足をかばい  
ながら、マシユの後ろに立つ。

「キャスター、どうする気よ。」

今の状態は藤丸と立香がキャスターと対峙しており、まるで戦闘を  
行うかのようだ。

……いや、本当にそうなんだろう。

「なあに、ただお嬢ちゃんの力を引き出そうつてんだ。」

キャスターがゆつくりと杖を構え、魔力を高める。

「ちよ、キャスターさん？ 嘘ですよね？」

「っ、マスター下がってください！」

何が行われるのかを理解した二人は戦闘態勢に入る。

こんなのだの荒治療じゃねえか。

「さあて、俺の攻撃から立香を守ってみな！ 幸い、足を怪我してんだから動くこともできねえ。」

宝具が出るまでやんぞ！」

「ただの荒治療じゃないですか！」

あ、一瞬、藤丸と心が通じ合った。

## 宝具解放

突如として始まったマシユの宝具を出すためのキャスターとの模擬戦……いや、彼女にとっては命懸けなのだから、戦闘と言ったほうが良いか。何にせよ、キャスターがそれを無理矢理始めたのは間違いない。

「そらよー!」

キャスターがルーン魔術により火の玉をほぼ予備動作なく放ち、

「た、頼む、マシユ!」

「了解しました!」

マシユが、動けない藤丸守るためにそれを盾で受け止める。

さらに、キャスターは動きながら、しかも火を器用に動かしながら四方八方の同時攻撃でマシユを追い詰める。

「っ……やあっ!」

しかし、それでも彼女はキャスターが放つ魔術を全て防ぎきつてみせる。

けれども、キャスターは本気ではない。彼女の實力に合わせているのか、マシユが受け止められるギリギリを狙ってやっているようだった。

「ちよつと古崖さん!」

「おう、なんだ?」

その途中、藤丸から声をかけられる。

「つたく、戦闘中なんだから目の前の敵に集中しろ。」

「なんで助けてくれないんですか!」

「何故って……そりやお前、俺が助けたら特訓にならないだろ。」

「これ、無茶やってるだけですよね!」

無茶だろうと、キャスターがやろうとしていることは正しい。宝具が今出せるかはマシユ次第だが、限界まで追い込むのは悪くない手法ではある。

土壇場の逆転という言葉もあるように、極限の状態となった時、マシユの真価が発揮されるかもしれない。ならば、これも経験という事



でキャスターの好きにさせてみよう。

それよりもだ。

「オルガマリー。」

「何、突然。」

無愛想にもほどがある彼女にある話をする。

「まず一つ、お前は口が硬いほうか？」

「は？」

「だから、秘密を他人に話さないかって事だ。今から言う事はキャスターには話すが、藤丸達には言わない。つまり、あいつらには知って欲しくない事だ。」

知ってしまえば、俺の策略は全部台無しとなってしまう。

その質問に対して、

「ええ、彼らには伝えないようにしましょう。」

彼女は即答する。

「よし。なら、話を聞いてもらおう。」

まず結論から言えば、俺はセイバーとの戦いで手加減をさせてもらう。

「は!? 一番大事な戦闘で手を抜くって、どういう神経してるわけ!!」

ヒステリックはやめろ。頭に響く。

「まあまあ、落ち着け。ちゃんと目的があるんだから。」

「所長! 何かあったんですか!」

戦闘中であるにも関わらず、こちらの様子に気付く藤丸。

意外と余裕あるのか?

「いやいや! こつちの話だから大丈夫だ!」

「そうなん……」

「マスター危ない!」

藤丸の言葉をマシユがその前に割り込んで、途切れさせる。

本当はキャスターの攻撃を防ぐためだろうが、そんなマシユにナイスを送ろう。

「それで、続きなんだが……」

といった一連の流れが無かったかのように話を進めていく。

「俺が手加減するのはマシユのためだ。」

「驕りは無しにしても俺はセイバーと互角に戦える。勝てるかと言えば別だがな。だから俺がセイバーを抑えて、お前らが聖杯を取れば、この特異点は解決だ。けど、それだけじゃ駄目だ。」

「それで良いでしょ。貴方がサーヴァントと互角というのは気になるところではあるけれど。」

「ところがどっこい、そうはいかない。」

「この特異点が解決された後、藤丸はどうかは知らんが、話を聞く限りマシユはここに残るんだろ?」

「彼女の過去を知っているわけでもないが、藤丸のように無理矢理連れて来られた訳でもなさそうだし、元々彼女は合意の上でここにいる。ならば、そう考えるのが自然だ。」

「それを考えれば、セイバーとマシユをぶつけさせて、経験を積ませた方が戦力強化になる。それで勝てれば、さらに万々歳だ。」

「そんなに上手くいくのかしら?」

「俺の見立てではな。あいつはセイバーの聖剣を防ぎきる事ができる。いや、あの聖剣だからこそ防ぐ。それをあいつ自身に身をもって体感させれば、今後の自信にも繋がる。」

「だから、俺は必要以上の力は出さない。もちろん攻撃役はキャスターにやつてもらおう。」

「これからも特異点という物が生まれるかもしれない。なら、誰かに強くなってもらわなければならぬ。俺一人ではなく、信頼出来る相手に。」

「封印指定とか知ったこっちゃねえ。」

「……なるほど。けれど、二つ質問です。」

「おう、何だ?」

「一つ目、貴方の考えは能力を秘匿にしておくためだとも捉えられませんが?」

「おおう、これは痛い所を。」

「当然と言えば当然だが、そう解釈されてしまうな。」

「でも、そう捉えれば良いんじゃないか?」

「はっ。」

鳩が豆鉄砲食らった顔やめい。

「俺が秘密を明かす事よりも、マシユが強くなる方がお前らにとっても都合の良いことだろ？」

俺の力が不安要素だつて言うならそれでいい。俺の考えが不審であるならそれでいい。けど、今言つた事は間違いなく未来に繋がる物であるはずだ。だから、今はそれを信じてくれないか？」

俺の説得の後、オルガマリーは少し考え、そして結論を出す。

「分かった。」

でも二つ目の質問に答えてもらつても？」

「ああ、良いぜ。」

一体なに出でてくるのやらと思えば、

「何故彼女に、マシユに肩入れするような真似をしてるのかしら？」

俺自身が無意識でやっていた事への疑問だった。

「貴方と彼女はさつき初めて出会った。なのに、そんな世話を焼いて、お人好しなの？」

それは俺の友人だ。

まあ、当たり前ではあるな。

「困つてる奴は助けてやる主義でな。そんなもつて、彼女は悩んでいるように見えた。サーヴァントとしての力を使いこなせない事をな。だったら、色々と手を回したいんだよ。」

「そいつが悪人でも？」

「そりゃあ、人は選ぶさ。けど、これでも人を見る目は良い方だぜ。」

「……なるほど。なら、何するかは貴方の勝手だし良いわ。」

けれど、これだけは絶対よ。聖杯を取る事。最後にそれさえできれば何の文句も言わない。」

ほんとにか？ さつきまでヒステリックを散々出してたくせに。

「ところで、貴方。」

「おう、まだなんかあるのか？」

「よくその謎生物に懐かれてるわね。」

謎生物？ ……あ、もしかして

「こいつか？」

あぐらをかいている俺は脚の上に乗つかるフオウに、手を軽く乗せる。

「確か……フオウだったわね。マシユによく懐いていたのは覚えてるわ。何故貴方にも……私は噛まれたって言うのに。」

「さあ？ まあでもこいつに悪意を向けない限りは大丈夫だと思うぜ。」

俺の目で視ると、今はただの可愛らしい動物と変わらないが、人の欲望に触れた瞬間にこいつはとんでもない化け物になってしまう可能性を秘めている。

その証拠に内側にはとんでもない魔力が溜め込まれているけど、まだ伝えて置かないでおこう。こいつ自身は悪意があるわけでもなさそうだし、そもそもそれは予測程度だし。

にしても、こいつの魔力もどつかのやつに似てんだよなー。時代特有と言うか何と言うか。

まあ、まだわからなくていいか。

「よし、よし。お前は可愛いな。」

「フオウ、フオフオフオウ？」

「あー……これ言われるの嫌い？ 悪い、今度美味しいモン食わせてやるから許してくれ。」

「フオウ？ フオウフオフオ フオフオフオウ？」

「その目は疑ってんな？ ほんとだから、信じる。」

「フオウ！」

「そうか、楽しみにしてるよ。」

「……貴方、そいつの言ってることが分かるの？」

側から、いや彼女から見てみれば、不可解な会話であるからか、なんか微妙な目で質問される。

「いいや、何となくだ。」

「何となくって……」

「俺たちは動物保護もやっていてな。普段から動物と触れ合う機会が多くて、その経験から自然と気持ちを読み取れるようになったんだ。」

魔術が関係していない俺の数少ない特技でもある。

他にも戦争孤児の保護だったり、荒れた土地での食物の栽培だったり、水路を引いたり、今思い返せばかなり色んな事をしてきたと、しみじみ思う。

「そう、人間はまずいから動物を魔術の実験体に……」

「しない、断じてな。」

人間の悪い事はやめてくれ。

「っ……はあっ……はあっ……。」

「なんだ、こりやあ期待ハズレだったかもな。」

と、オルガマリーと話していれば、そろそろ藤丸たちの方の終わりが見えてきそうだ。

「すいません……これ以上は……もう……」

「そうかよ。」

キャスターは懐から何かを取り出す。ワラ人形っぽいのが、その用途はおそらく別だろう。それに魔力を込めだし、ルーン文字を書いていく。

間違いない。あれは宝具だ。

「なら、所詮お前はそこまでの奴だ。」

「キャスター！　いくらなんでもそこまで……！」

「オルガマリー。」

宝具を放とうとしているのが理解したのか彼女は止めに入ろうとするが、その前に俺が腕を掴む。

「放しなさいよ！　いくらなんでもあいつは無茶苦茶すぎよ!!」

「そうかもな。だが……っ！」

彼女を説得しようとして口を開いたが、ある事を感じ取ってしまう。

強大な何か、それが近づいてくる。

「だが？　その続きは？」

「……下がれ。」

「はあ？」

奴が来る。

あいつはとんでもない奴だ。

俺は身を以て体感した。

何度も苦しめられ、実際に死にかけて。

最強の英霊だとも言われる半神半人。

「焼きつくせ、焼き尽くす……！」

「みんな、ストップ！ ストップ！」

キャスターが真名を解放しようとした瞬間、ロマニが止めの通信を入れてくる。

「チツ、何だ軟弱男……そう言うことか。」

「そう言う事だよ！ レーダーに君たち以外のサーヴァント反応！  
もうすぐ……！」

もうすぐ、いいや、その次の瞬間には

彼らのすぐ横から黒塗りの巨漢が塀をぶち壊しなから、翔んでくる。

「敵襲……!!? マスター、下がってください！」

「マシユ！ お前は戦うな！ 藤丸抱えて下がれ！」

キャスターと全力で戦った後だ。あんな疲れた状態で相手になるはずがない。

彼女は俺の指示通り、藤丸を庇いながら母屋へと下がる。

「い、いいいいい一体なによ!？」

「下がれって言っただろ！ 俺が前に出る！」

いや、そうしなくても良いかもしれない。だが念のためだ。

「バーサーカー……森の奥で引きこもってた奴が何故ここに！」

キャスターが言うバーサーカー、それは俺の知るバーサーカーと同じ。つまりはあの何度も苦しめられたヘラクレスだった。

圧倒的な存在感と、並みの英霊が束になっても勝てないと思わせるほどの力を放つそれは、まさに伝説だ。

そいつは何かを探すように周囲を見回し、そして俺と目が合った瞬間、

「■■■■■■ー！！！」

殺意を剥き出した咆哮を上げ、俺の体を潰そうと、手に持つ大斧を振り下ろす……！

「っ……い！」

即座に魔術で腕を硬化させ、拳を剣の腹で殴り、軌道をそらす。その一撃には、鉛なんか目じやないほどの重さと、そして閃光すらも追い越すような速さが込められていた。何度も思うが、俺がいくら体を鍛えようと強化しようと、それをまともに食らえばたてではない。

けど、それだけじゃない。

——貴様か。

俺の脳内に響く。

「キヤスター……こいつの正体わかってんだろうな！」

巨人と対峙したまま、キヤスターとの意思疎通を図る。

「安心しな。同じモン二度喰らわねえのと、半端な攻撃は効かねえのと、十二回殺さねえといけねえ事ぐらい分かってらあ！」

「俺が足止めする！ その間デカイ奴一発頼む！ 言つとくが、威力がでかけりゃ、その分割れるからな！」

「■■■■■■ー!!」

まっず……！ またあの攻撃が来やがんのか！

「フォース チェンジ 性質、変化……！」

バーサーカーの薙ぎ払いとともに、体を創変させる詠唱を口にする。

それを避けるためにスピードに特化した……いや、マシユの為に彼女がすべき戦い方を見せるか。

「メイク・オブ・シールド 環境に依存しうる盾。」

彼女に似た戦術を取る為に、周りにある瓦礫や鉄骨やコンクリートなどを使い、盾を作り出す。たった今、即興で作った魔術で二メートルほどもある身丈以上の盾を。

それを使いバーサーカーの一撃を受け止める！

「うぐっ……!!」

「古崖さ……ん……吹っ飛ばない!？」

藤丸が驚くのも無理はない。

俺の体格よりも四倍ほどの大きさを持った大男からの攻撃を、逸ら

すわけでもなく躲すわけでもなく、一切動かずに正面から受け止めるという、物理法則なんてクソ食らえな状況が創り出されているのだから。

筋力を単純に上げてもそんなことは起きない。なら、どうしているか。足の部分だけ重力を強くしているのだ。

にしても、衝撃がデカすぎだ……！ 右腕だけで盾を持つてんに、左腕まで痺れやがる……！

しかし、それと同時にまた頭に響いてくる。

——貴様がマスターを！

……ああ、そういうことか。

こいつは俺の中にある彼女の存在に気づいたんだ。それを狂化か、聖杯の影響か、俺が殺したと勘違いしているのだろう。

ならば、引導を渡してやるしかない。

「来い、バーサーカー。お前は眠るべきだ。」

＝＝＝＝＝

「みんな、後退するんだ！ そのサーヴァントの強さは半端じゃ……！」

「待てよ。」

創太がバーサーカーを応戦している時、後ろでは撤退か、それともこのまま戦うかを決定し損ねていた。

「キャスター……何を考えているのよ！ 今はあいつが抑えているから良いかもしれないけど、あんなモン敵う相手じゃない！」

「だとして、あの野郎から逃げ切る手段はあんのか？」

「彼を囮にして逃げる。それしか方法は……！」

「だが、あいつには秘策があるらしいぜ。」

「そんなの無理……！」

「なら、尻尾巻いて逃げるんだな。俺あここに残る。」

きつぱりと、オルガマリーの言葉を否定する。

「それによ、今逃げちまったなら、あいつの考えが全部パーになっちまうぜ。」

「はっ。」



呆れ返るオルガマリーを尻目にし、マシユの横へと歩く。そして、彼女の頭に軽く手を乗せる。

「よく、見とけ。形は少しちげえだろうが、お前が目指すのはアレだからよ。」

「……分かりました。」

キャスターの意思を汲み取ったかのように、マシユは目の前の戦いに集中する。

創太の戦う姿。攻めるのではなく、守る戦い。勝つためではない、負けないための立ち回り。

小さき体にも関わらず、バーサーカーの重く、そして疾き連撃を盾で受け止めるその戦い方。動かざること山の如し、それを体現するかのように、彼は一步も引かない。

「……そろそろこつちも準備しとくか。」

伝えるべき事を伝えたキャスターは先程出し損ねた宝具、手に持つ木の枝で作られた人形に魔力を流す。

本来は神への供物として使われるそれは、腹の辺りにある檻へと贅を捧げ、火と共に天へと送る為のもの。

「焼きつくせ木々の巨人……」

人形は次第に大きくなり、本当に天へと届きそうな程まで成長していく。

「で、でかい!?!」

「これが……キャスターさんの宝具……!」

それを見た全員は圧倒的な姿に気圧されてしまう。と同時に安心もしていた。これならば、バーサーカーすらも倒せると。

木々の巨人の名、それは

「<sup>ウイッ</sup>焼き<sup>カー</sup>尽くす炎の檻!!」

真名解放と共に、『ウイッカーマン』は炎を纏い、バーサーカーへと突き進む。ゆつくりと、しかし確実に。巨人が更なる巨人に焼かれようとしていく。

「どぎな! 創太!」

後は任せると、これで仕留めると言わんばかりに、キャスターは射

線を開けるよう、指示する。しかし、

「古崖さん！ 聞こえなかったんですか！ 早く引いてください！」

彼は未だ動かない。バーサーカーからの攻撃を耐え続け、前進することも、後退することもない。

だが、それは敵もだった。そうする事が許されなかった。

「■■■■■■ー！！」

キャスターの宝具を避けようと、まずは彼を飛ばそうとするが、全く動かない。後退しようものならばその命を貫うと、生きかえろうが何度も殺すと、引きの一手を選べば押し潰されるという覇気が、彼から発せられていた。

けれども、彼の顔には敵意はない。

「……これで最後だ。」

代わりに、慈悲という感情が乗せられていた。

死を悼むように。敬意を払うように。

|| || || ||

こいつと打ち合う度に、記憶が流れ込んでくる。共感していく。重なり合っていく。

俺の中にある彼女はこいつと繋がっていたわけではない。契約した本人同士ですらない。

だけど、俺は無念を、後悔を味わう。

彼が経験した物を。

彼女と出会い、共にこの地へと踏み入れ、守りきれなかった事を。

そして、彼女を守ろうと執着し、狂化されても泥に吞まれようと、あの場所に居続けたことも。

「創太さん！ 早くそこを……！」

ああ、分かっているさ、マシユ。

けどな、今ここでこいつには引導を渡してやらなきゃならない！

「ウィツカーマン！」

供物を捧げる為に暴れる人形を招ぶ、贄はここだと。そして

「俺ごと焼け！」

盾を捨て、バーサーカーの懐に入っていく。相手はそれを迎撃しよ

うと大剣を振り回すが、体が小さく素早い俺に当たる事はない。

完全に懐へ入った時、

「だあああっ!!」

俺の拳はバーサーカーの心臓を貫く。筋力の特化したこの腕が真つ直ぐに突き出され、敵の動きは一瞬止まる。

しかし、すぐに蘇生され、また動きだす。俺を潰そうと。

だがもう遅い。俺の腕は体に貫通し、固定されている。そこに、木の巨人がすでに迫っている。

敵は逃げようとするが、俺の腕によつて全く動けない。押そうとしても引こうとしても。ならば、腕を斬ろうと大剣を振り下ろすが、

エボリュート  
「強化! 燃燒継続!」

俺は詠唱と共に巨人へ魔力を流し込み、火をさらに大きく光を強くさせ、巨人は俺ごとバーサーカーを檻へと閉じ込める。その胴体に付けられた、供物を天へと捧げる為のものへ。

そして、焼き続ける。バーサーカーの命を全て削りきるまで。山火事なんていう生易しいものではない。その身を骨を全て灰にするまで終わらない炎舞。

「古崖さーん!!」

その惨状を見た藤丸が泣きながら俺の名前を呼ぶ。

一体何故、俺がその場から動かなかったのか。理解してはいないだろう。けれども、俺が焼かれたという事実は変わらない。あれを受けたバーサーカーが命を全て使い切ったほどだ。それが規格外であっても普通の人間が受ければ死ぬのは確定だ。しかし、

「おいこら、何勘違いして泣いてんだ。」

「痛っ!?!」

未だに生きている俺は藤丸の後頭部をど突く。

「え? え? 何……え? どういう……亡霊……」

「亡霊ちやうわ。」

「またっ!?!」

二度目も頭を叩く。親父にはぶたれてない。

「いくつだ?」

未だ戦闘体制を解いていないキャスターはバーサーカーがいた場所を警戒する。

「十二個全てだ。」

「ほう、せいぜい四回だと思ってたぜ。あれを連続させることで耐性が着く前に削りきったのか。」

「まあな。なかなかのもんだつたらう？」

「ああ、他人の魔術モウをコントロールするなんて前代未聞だ。」

キャスターは警戒を解き、戦闘は終わったと判断する。

と思いきや、今度はオルガマリーが鬼の形相で睨みつけながら俺を指差し、迫ってくる。

「貴方、一体何をしていたのよ！ あんな奴と戦うなんて正気の沙汰じゃないわ！ 注意を貴方に集める為にわざと一対一を持ち込んだのかもしれないけど、最後のあれはどういうつもりよ！ あんな捨て身で最後まで残って勘違いされるような事をして……！」

「はいはい、一旦落ち着け。説明はちゃんとしてやるから。」

彼女の怒りをなだめ、完全とまではいかないものの落ち着きがある程度取り戻してもらったところで、経緯の説明をする。

とは言え、バーサーカーと戦った理由は省いても良いだろう。俺から伝えるものでもないし、おそらくはキャスターが既にマシユへと伝えていいるからだ。

「まず、俺がバーサーカーとギリギリまで撃ち合っていた理由だな。」

これはキャスターの宝具をより確実に当てる為だ。」

他にも意地やらなんやらがあるが、それは敢えて口に出さない。私情が過ぎるからな。

「後はキャスターのウィツカーマンを強化させるつてのもある。」

「その宝具を強化つていうの、具体的には……」

「言うわけねえだろ、だらしない栗きんとん。」

「栗きん……!?!」

こちとら公になれば封印指定ギリギリなんだよ。一代限りついでわけじゃないからそうはならないけど、それでも面倒な事になるんだよ。

「次にあの巨人からの脱出トリックは……転移魔術によるものだ。」

能力については秘密にしたが、こちらは少し考えながらも情報を開示する。全てを隠してしまえば、俺の力がどういものかと怪しまれてしまい必要以上に厄介な事になってしまうかもしれないからだ。

「ふーん、そう……はあ!？」

おう、この反応久しぶりに見た。

「貴方、それほとんど魔法よ!? 何、自分使えますけど? みたいな感じで言ってるのよ!」

それはちよつと勘違いじゃないか?

「そんな耳元で騒ぐな。……ちよつと待ってろ。」

巨人が燃え尽き、宝具によって起きた火が鎮火した頃見計らい、俺はバーサーカーが居た場所へと歩き始める。

「話は終わって……」

「まあ、待てや。あいつのケリをつけさせてやろうじゃねえか。」

ありがとうな、キャスター。

そう心で思いながらも、足を動かす。

「あ、あれは……」

マシユが指すあれ。それはバーサーカーの姿だ。体が完全にボロボロで未だ霊体を保っている事が不思議なほどだ。

それほど彼自身の靈魂が強いという事。

「ヘラクレス。」

その前に立った時、初めて彼の真名を呼ぶ。

「正直言っただ俺とお前に接点はない。だから、本来は何も言う事はない。」

そもそも、特異点こゝろは異世界よのようなもの。似て非なる場所で、俺の知る彼女と彼の知る彼女は別人だ。それでも、

「けど、敢えて言う。」

いつまでも過去に囚われてんじゃねえぞこの半神が。お前が守りきれなかったモン、俺が救ってやる。

だから、今はゆっくり休め。」

相手はただ魔力に還ることしかないはずなのに、休めと言うのもお

かしな話ではある。けれど、これが一番ではある。

この特異点を元に戻す。それが彼女を救う事にもなる。だから、後は任せろ。そういう意図を持って伝える。

そして、俺の言葉を聞いて光となったヘラクレスは少しだけ安らかな顔をしながら消えていった。

## 懐かしき者

バーサーカーとの戦闘後、作戦会議をしながら休息の時間を三十分ほど取り、目的の場所へ徒歩で向かう俺たち。

その途中で俺は藤丸に貿易商と裏での活動について話していた。もちろん、周りを警戒しながらだ。しかし、

「凄いですね、古崖さん！ 敏腕交渉人として世界中を飛び回っているだけではなく、その裏ではヒーローをやっているんですね！」

「お、おおう。その言い方はちよつとオーバー過ぎるけどな。」

子供のように目をキラキラ輝かせながら、藤丸は尊敬の眼差しを俺に向ける。

別に武勇伝を語ったつもりはないから、その反応はこちらとしてはなんだか恥ずかしい。

「だってそうじゃないですか！ 世界各国の貿易商と繋がりを持ち、条件の良い契約を次々と結び、挙げ句の果てには世界を救っているだなんて！」

「よっ！ 世界一！」

「尾びれ背びれをつけすぎ。あと最後の掛け声なに？」

おだてるように藤丸は言うが、本当はそんな大手の貿易商ではないし、バリバリのエリートエージェントでもない。中堅会社がある程度上手くいっているぐらいだ。

まあ、世界を救ったという部分に関してはあながち否定できない。

十年前の聖杯戦争。あれが別の形で終わっていれば、目の前の惨状のようになっていたのかもしれないのだから。

「なあー！ マシユだつてそう思うよなー！」

そんな俺の心情も知らずに、ハイテンションな彼は興奮したまま話題を振る。しかし、当の彼女は上の空といったようで、ぼーつとしたまま何も答えない。

「おーい、マシユー？」

「……はっ！ す、すみません先輩。少し考え事をしています。それで、何の話でしょうか？」

「だから、古崖さんが凄いつていう話！」

藤丸がさつき俺から聞いた話をそのままマシユに話し、興奮気味になっっているが、流石にマシユの落ち込んでいる気持ちを理解したのか、声のトーンが低くなっていく。

「あの……どう、しましたか?」

「いや、なんとというか……」

「マシユ、彼はね、やっと貴女の心情を理解したのよ。」

呆れるオルガマリーに対し、マシユは『はて?』という疑問しかない顔を返す。

「……貴女、気づいていないとでも思っているの?」

「さつきの戦いで宝具を出せなかった事を悔やんでいるんでしょ。」

「えっ……!」

「……はい、確かに所長の言う通りです。」

彼女は驚きながらも、自身の気持ちを言葉に並べる。

「宝具の使用が不可能である、それも私の最も憂いている事です。しかし、それだけではありません。先ほどのバーサーカーとの戦いでは私がいなくとも、キャスターさんと創太さんのお二人で勝利を収めました。」

「ならば、私がいる意味とは……戦えるようになった意味とは一体……」

最後は憂鬱から、もう口を動かすことさえ辛そうだった。

先の訓練でバーサーカーに邪魔されて、結局宝具を出せずに終わった。その事を悔やんでいるのか。

確かに、俺とキャスターの二人であれば大抵の敵は倒せるし、宝具を使えなければマシユの中にある英霊の真価を發揮できないと言う事になる。

それを気負ってしまうのも当然だ。

「そんなモン気にすんな!」

「うわっ!」

しかし、それを笑い飛ばしながら背中を叩くランサー……失礼、今はキャスターだった。



「宝具が使えなくとも、嬢ちゃんには盾がある。それだけで十分だ。」  
「ですが……」

キャスターは慰めようとするも、それでも彼女は自信がなさげだった。なら、俺からも声を掛けてやろう。

「なあ、マシユ。そんなに執着してるといざ戦うって言うときに、力を出しきれない。だから、今は余計な事は考えるな。無いもんねだりしたって勝てはしない。」

それに、俺が戦って勝てるという確証もない。だから、お前は勝つ事を考えて戦え。いいな？」

「は、はいー」

良い返事だ。まだ迷いはあるかもしれないが、今は前を向いてもらおう。その力が覚醒する時まで。

しかし、俺は見逃さなかった。藤丸がじつと手の甲を、サーヴァントの力を十二分に引き出すことのできる令呪を見続けていた事を。

――

歩き続けて二十分程度、目の前には長い階段があり、奥では柳洞寺であった物が鎮座している。

ここが目的の場所の一步手前。聖杯は更に奥にあるはずだ。

「それでキャスター、残っているのは確かセイバーとアーチャーだったな？」

いよいよ決戦の地というところで、俺は敵の情報を再確認する。

「ああ、他のやつは全員倒してる。あとはその二騎だけだ。」

セイバーはさつきも言った通り、ブリテン島の騎士王。で、もう一人なんだが……」

アーチャー、そいつは俺からしても因縁がある相手だ。あっちからしてみれば無いだろうが、それはどうでも良いだろう。

「まあ、なんだ。悪いが真名は知らん。だが、気をつけろよ。あいつはアーチャー弓兵のくせに剣も使ってきやがる。接近戦でも油断すんなよ。」

「分かってる。あいつの強さは俺が一番良く理解してんだ。」

「ほう、あの野郎と訳ありか？」

「まあな。」

訳ありというか、複雑というか。けども、今は私情を持ち込むようなことはしない。あいつとは全力で戦うだけだ。

「貴方達！ 喋ってないでちゃんと先導しなさい！」

「分かった、分かった。そんな怒んなよ。」

しびれを切らしたオルガマリーは道案内を急かす。

時間を無駄にできないというのは分かるが、もうちよいリラックスできないもんかね。

「んじゃ、行くか。」

俺が先頭を切り、その後にはマシユ、藤丸、オルガマリー、最後尾には全体を見守るかのようにはキヤスターが付いてくる。

階段を登り、寺のさらに奥の林を抜けて、少し開けた場所に出る。

そこから少し進み、大聖杯へと続く洞窟の入り口に到着する。

「こつから先は特に注意しろ。道が真っ直ぐだから、門番が何してくるか……マシユ！」

「は、はい！」

キヤスターの話の途中で突如洞窟の奥から放たれた矢に、マシユは即座に反応し盾で受け止める。

どうやら、その門番がとつくに迎撃態勢へ入ったようだ。

「まだ来るぞ！ マシユはそのまま先頭を突っ切れ！ みんなはその後に続け！」

「了解です！」

俺の指示通り、彼女は盾を構えながら奥へと進み、他もその後を追うように進む。

「いいか、視認できる距離まで近づいたら作戦通りいくぞ。」

「ああ。」

「はい。」

「頼むわよ。こつちの事は気にしなくていいから。」

「分かってる。」

全員の気持ち達が準備万端な事を確認できたと同時に、開けた場所になる。

もちろんそこは終着点ではなく、大聖杯はまだ奥。しかし、その中

央には黒いボディアーマーを身に纏った褐色白髪アーチャーの弓兵が弓を携えながら、佇んでいた。

「アレがアーチャー……。」

「手数ของ多きはおそらくトップクラスだ。正面からしか攻撃が来ないと思うなよ。」

特にあいつが愛用する双剣には注意したいところだ。

「こそこそと隠れていた奴が目立ってきたと思えば、仲間を連れて来ていたとはな。そこまで聖杯が欲しいか？」

「はっ。そんなモンは要らねえよ。」

こんな下らねえゲームをさつきと終わらせる為に来ただけだ。」

出会って早々二人がかち合う。

俺が経験した聖杯戦争では二人が会うところを見た事はないが、あまり仲が良いとは思えないな。

「おい、アーチャー。」

しかし、このまま戦うにしろ俺としては少し問い掛けたい事がある。だから、二人の間に割り込む。

「貴様は？」

俺を知らない。それだけで心に針が刺さるような痛みを感じる。

たしかに背丈は大分変わっただろうが、顔はほとんど変わっていない。実際に久しぶりに会った奴も、俺の顔を見れば大体の奴が思い出してくれる。

けれど、世界線が違うのであれば仕方のないことか。

「誰でも良いじゃねえか。」

それよりもお前、正義の味方を目指しているくせに、人類の滅亡させるつもりか？」

正義の味方という単語を聞いた瞬間、そいつは僅かに眉を上げる。

「お前がここでどうなったか知らない。けれど、お前の根本は変わらないはずだ。」

「貴様は私の事を知っているようだが、私は貴様の事は知らん。だから、何を言われようとも何とも思わん。」

俺の勝手な感情を鼻で笑うアーチャー。

ああ、そうだろうよ。『あの時』もお前はそうだったな。

「だったら、また思い出させてやるさ。」

杖を相手に向け、魔力を練る。

今から、戦闘が始まる。その意思がここにいる全員へと伝わり、戦闘態勢へと入らせる。

「アーチャー、もう一度聞けど。これがお前のやるべき事なのか？」

「できるならば、アレを今にも壊したいさ。だが、体を言う事は聞かなくてな。貴様を殺してしまっても、責任は取れんぞ？」

皮肉は健在のくせに、本心ではないってか。

だからと言って倒さない訳にもいかない。あいつ自身の目を覚ますためにも。

「やれるモンならやってみやがれ！ 行くぞ、みんな！」

「はい！」

「おう！」

戦闘開始、それと同時にマシユは盾を使い、アーチャーに突進していく。

「ふっ！」

対して、敵は何本か矢を放つが盾はそれを弾く。

「やはり正面からは無理か。ならば……！」

今のままでは無理だと判断したアーチャーは、別の手段を選んだのか一組の双剣を投擲する。白と黒の中華剣、その名を干将・莫耶と呼ばれる担い手なき剣を。

もちろんそれらはマシユの盾に弾かれるのだが、問題はそこではない。その性質は互いを引き合うと言うもの。しかも、弾かれた双剣はマシユを挟むように飛ばされている。

さらには、あいつの手には新たに投影された干将・莫耶がある。それを左右に投げ、また双剣を投影する。

それら全てが引き合い、全方位からの同時を行うそれはこう呼ばれる。

「鶴翼三連！」

マシユの正面だけではなく、横や後ろからも双剣が飛んでくるその

技は、まさに回避不可能。

だが、一人の場合だったらの話だ。

フォース  
チェンジ  
「性質、変化！」

地面に魔力を流し、アーチャーの双剣を邪魔するように、地面から壁を生やすように作る。そして思惑通りに、飛翔する双剣はそれに阻まれ、マシユには届かなくなる。

これで、彼女には思う存分アーチャーに集中できる！

「やあああつー！」

「つ……はああつー！」

マシユが行う盾の攻撃、それは普通ならば双剣では防ぎきれない。しかし彼女が未熟なのか、相手が上手であるのか、結果として罅迫り合いに持ち込まれてしまう。

しかし、それで良い。

「どきな、マシユー！」

「はいー！」

それはキャストアの攻撃の合図。マシユはその合図を聞いた瞬間に射線を開けるために、一気に横へとダッシュする。

アシサズ  
「A！」

マシユが避けたと確認する前に、キャストアは合図とほぼ同時に火球を放つ。相手に余裕を与えないためだ。

しかし、それでもアーチャーはキャストアの攻撃を躲す。たった一回だけでは、当てさせてもらえないか。

ならば、次だ。

「だああつー！」

俺は、火球が当たらないと判断したと同時に走り出し、アーチャーとの距離を一瞬で詰め、大きく振りかぶった右手を突き出す！

トレス  
オン  
「投影、開始！」

それを防ごうと、アーチャーが投影するのは長剣。しかもただの長剣ではない。絶対に折れないという逸話を持つあの剣。

アーチャーはその剣の刃を俺の拳に向ける。

それらはぶつかり合い、金属音にも似た甲高い音を鳴らす。

「絶世の名剣デュランダル……だったか？ それを扱うくせに干将・莫耶も使うなんて、ただの英霊じゃねえな。霊長の守護者様？」

「貴様、どこで私を知った！」

「冬木で、だ。お前のことなんてずっと昔から知ってる。」

「何を……！」

このまま鏢迫り合いを続けても、無駄だと判断した俺は即座に後退し、続けてキャスターが魔術による攻撃をする。それでも、アーチャーは避け、弓を構えようとするが、

「させません！」

次の瞬間には既にマシユが距離を詰めて攻撃をする。しかし、その攻撃も防がれてしまう。だが、アーチャーの反応は少し遅れていた。

そろそろ、相手も気づいただろう。俺たちの作戦に。

代わる代わる攻撃をしていき、相手に余裕を与えず、隙を大きくしていく。それが第一の作戦だ。

けど、それだけではまだ足りない。

「どした、アーチャー！ 自慢の皮肉はどこいった！」

「自慢の槍が無ければ、戦えない貴様が何を言う！」

マシユの攻撃の後に続き、キャスター、俺という順番で攻める。しかし、相手もただで攻撃を受けるわけではない。

俺は攻撃をした後、マシユに交代するために一旦退くのだが、いかんせん彼女は戦闘経験が足りない。だからか、僅かな猶予を与えてしまふ。

「貫ったー！」

「しまっ……！」

弓矢を投影したアーチャーは、緋い矢を弓に携え、洋弓の構えを行う。

狙いは目の前のマシユ。

フルンデイング  
赤原猟犬！

右手から矢を放すと同時に、マシユへと猟犬が襲う。

「っだあー！」

盾を使った突進でなんとかなるものの、問題はその後。矢の力性質か

ら、狙った獲物に執着する。つまり、弾いてもまた別の方向から……っ！

違う！ あいつの狙いはマシユじゃない！ あいつが獲物として定めたのは……！！

「藤丸！」

「う、うわああ！」

マシユへ放たれた猟犬は、彼女には興味はなく、マスターである藤丸に向かっていきやがった……！！

「マスター！」

「人の心配をしている場合か！」

「っ……！！」

更には、アーチャーの反撃がくる！

どっちかだけに意識を割いてはならないのか！

「させない！ 障壁展開！」

けれども、事前に準備をしていたオルガマリーは光の壁を自身とともに藤丸の周りを囲うように展開する。

それにより、猟犬は弾かれ、明後日の方向へと飛んでいく。

「しよ、所長！」

「何ボサツとしてるの！ マスターが狙われるって前もって言ったわよね！」

っ……！！ まだ来る！」

弾かれようとも幾度と獲物へと向かう猟犬は衰えを知らず、オルガマリーの障壁を突き破ろうと、何度も向きを変えて藤丸を襲う。その度に障壁を削っていく

このままではジリ貧になる。そう考え、杖を手を持つ。

「装填……リロード……シヨット発射！」

純粹な魔力の弾、それを杖先から放つ。

特殊な意味はない。単純に物体を破壊するだけの弾を猟犬に向けて放ち、破壊する。

「た、助かったわ。」

「礼はいい！ それよりも藤丸をちゃんと守ってやれ！」

作戦としてオルガマリーには藤丸を任せていたから良かったものの、やはりあいつに隙を見せてはならない。

代わる代わるで攻撃を行い、それぞれの負担を軽減するという作戦をしたものの、それは崩れてしまった。ならば、どうするか

「マシユ、キヤスター！ こいつに時間をかけちまえば、またさつきみたいになる！」

一気に畳み掛けるぞ！」

「はいー！」

「おうよー！」

今まではマシユの経験不足から、盾役を任せつきりにしてしまおうとボロが出てしまおうと推測していたけど、もうすでにそれは出てしまった。なら、これ以上ボロが出ないように早く片付けるしかない。

しかし、俺自身はあくまでも本気は出してはならない。マシユが成長するように、俺は一步引いて……

「……マシユ、あいつに出来るだけへばりつけ。何があってもな。さつきみたいな事になつても俺がフォローする。」

キヤスター、出来るだけ多く火球を撃て。射線にマシユがいても、俺が何とかする。」

「何とかって……どうする気だ？」

「どうにかする。信じてくれ。」

「……あいよ。気にせず撃ちやあ良いんだな。」

俺を信用したのか、キヤスターはアーチャーへと杖を向け、魔術で火球を作り出す。

ならば、とつとと戦闘再開だ。

「行けるな、マシユ？」

「はい。」

「よし、なら行けー！」

「了解ですー！」

合図と同時に、マシユは先と同じように盾を構えながら突進していく。前方からの攻撃であれば、何であろうと防ぐ。

「いくら同じ手を使ったところで……っ！」



同じ手、敵がそう思った瞬間に、戦闘の始めとは違う部分が出てくる。それがマシユの左右から飛び出してくる二つの火球だ。誰のかは言うまでもあるまい。

敵の左右から挟み込む火球を避けるには、当然後ろに逃げるしかない、アーチャーもそれを行う。上に跳べばいい。前方にはマシユ。消去法で行けば手段は一つしかない。

しかし、だ。マシユの攻撃はまだ残っている。

「やああっ！」

「グッ！」

盾での攻撃は非常に重く、アーチャーをほんの少し後退させる。

それでもマシユの攻撃は敵に届かず、拮抗した状態になる。そして、ここに更なる追撃が入る。

「っ……っ！」

敵が驚く理由、それは再び放たれた二つの火球にある。先ほどと同じようにアーチャーを挟み込むそれは、敵を襲う。

対して、アーチャーはマシユとの鏖迫り合いを止めて、後ろに跳ぶ。同時に、一対の双剣を左右に投げる。火球にぶつけて相殺するためだろう。しかし、

「ぐあっ!?!」

背後からの火球に不意を突かれてしまう。

その体は一瞬よろめき、体勢を立て直そうとするが、

「はああっ！」

隙を狙おうとマシユが狙い、

「っ……っはっ！」

今度こそ攻撃がまともに当たる。

「やるな、創太！」

ニカッと笑うキャスターに対し、

「ああ、だがまだ油断できない。」

俺は真剣な表情を全く崩さない。

アーチャーを背後から襲った火球、それはキャスターが魔術で生み出したものだが、そう仕向けたのは俺だ。

敵の干将・莫耶と同じような軌道を描くように直接操れば、裏をかけると予想すれば、まさにその通りになった。

「追撃、行きますー！」

しかし、まだ相手は斃れてはいない。

それを分かっているマシユは、アーチャーを追い詰めるかのように攻撃を繋げていく。

だが、

ブローケン・ファンタズム  
「壊れた幻想ー！」

「しまっ……ー！」

相手は先程攻撃を食らった時、一本の剣を投影し、罫としてその場に置いていたらしい……！

マシユが投影された剣を背後にした瞬間、それに灯る魔力を爆発させ、瞬間的に火力を増大させていく！

ここで何もしなければ彼女がヤバイ！

「はあっ!!」

咄嗟の判断をした俺は地面を蹴り、体を最速のスピードまで加速させ、マシユへと駆けつける。

「創太さん!」

「あんま抵抗するなよ！」

そして、彼女をこの場から離す為に、今日三度目のアレを使う。

テレポルト  
「瞬間転移！」

「えっ……?」

俺がマシユへ触れた瞬間に、彼女は藤丸の元へと戻る。しかし、俺自身は爆発の範囲内。

これでいい。これでいいんだ。

「え? なんでマシユが……いやそれよりも！」

古が……!」

藤丸が言い切る、その前にアーチャーが仕掛けた罫が発動する。

耳と目を潰すかのような轟音と光、そして俺を焼こうと、この身を引きちぎらんとする熱気と衝撃が俺を包む。

体を強化していなければ、死んでいただろう。

「ふっ……！」

「なっ!!」

爆発によって起こった砂煙、その中から俺は飛び出す。体には多少のかすり傷がありながらも戦闘を続けるには未だ問題ない状態だ。

「うおおおっ!!」

飛び出した勢いをそのままに、アーチャーへと右の拳を突き出す。

それから身を守ろうと敵は最も多く使う干将・莫耶を投影し、交差させ、俺の拳を止める……

事はなかった。

「がっ……！」

一対の双剣を打ち破った拳は突き進み、アーチャーの胴体を捉え、吹っ飛ばす。

「ぐっ……体は剣で出来ている——！」

「っ！させねえ!!」

吹っ飛ばされた敵は体勢を立て直すと同時に、ある詠唱を始める。

俺には分かる。それはこいつの宝具であり、固有結界と呼ばれる禁術を展開するものなのだ。

steel is my body, and fire is my blood.  
「血潮は鉄で、心は硝子……！」

「キヤスター！」

「あいよ！」

アーチャーの詠唱とともに、俺はキヤスターを呼びかけ、あるものを作る。それは火球。しかし、今までとは違うところがある。それは大きすぎた。

今から作るのは、三メートル大の火球。密度を高め、最大限の魔力を詰め込む。

キヤスターの杖から火球が放たれ、俺の手の平に収縮していく。

I have created over a thousand blades.  
「幾たびの戦場を越えて不敗。」

アーチャーの詠唱が進むと同時に地面が大地が焼かれていき、世界が置き換わろうとしていく。

しかし、その前に俺たちの攻撃準備が終わった。

「よし、行け！ 創太！」

「ああ！」

巨大な火球、それを俺は腕を大きく振りかぶり、投げる。

「つ……ただの一度も敗走はなく、

ただの一度も理解されない！」

相手はすんなり当たってくれるはずもなく、目の前に七枚の花弁を展開する。

アイアスの盾と呼ばれるそれは、最後の一枚に関してだけは飛び道具に対して絶対防御の性質を持ち、俺たちの火球にも防ぐ。しかし、完全ではないのか、花弁は徐々に破壊される。

「彼<sup>Have withstood</sup>の者は常に独り、剣<sup>pain to create</sup>の丘で勝利<sup>many weapons</sup>に酔う……！」

それでも、こちらの攻撃は宝具ほどの威力はなく、花弁を三枚破壊しただけで減衰されていく……はずだった。

「そらよー！」

火球が弱まるその前に、キャスターの追撃が行われる。

彼が持つ杖に新たな火を灯し、アーチャーの盾に叩きつけ、再度炎を燃え上がらせる！

これならば、その炎は遠距離からではなく、近距離からの直接攻撃。

アーチャーの盾が持つ絶対防御の効果はなくなる！

「Yet, those hands will never hold anything. . . .」

敵は必死に耐えるが、アイアスの盾は一枚、また一枚と破られていく。しかし、キャスターの攻撃にも勢いが削がれていく。

互いに相殺されていき、ついには炎も盾も全てが消え去ってしまった。

「So as I pray,……！」

「させ切る気はねえ！」

詠唱が終わろうとする。その固有結界の名が呼ばれる。

その前にこの戦いを終わらせようと、キャスターはそのまま杖を両手に振り下ろす。

しかし、今まで何度も投影された干将・莫耶を、アーチャーは今一

度手に取り、攻撃を防ぐ。  
「unlimited blade work……！」

発動される。この世界が変わる。

火の荒野に、歯車の空に、剣の丘に。

そして、一転して状況が変わってしまう。

あの結界の中では、俺も打破する事が困難だ。しかも、守るべき者があるのであれば尚更だ。

それを唱えきられてしまえば、一貫の終わり。

そう。一貫の終わり、だからこそ、

「二歩、間に合わなかったな。」

結界の展開を止める為に、俺はアーチャーの後ろに回り込んでいた。

拳を構え、アーチャーの背中を狙う。これで詠唱が完了するまでには間に合う！

「はあああっ！」

右腕を音も、光すらも、何もかもを置いていってしまうようなスピードで突き出す。

どんなに硬い装甲であろうと、頑丈な盾であろうとも、貫く。宝具を使われようと、この腕は敵に当たるまで止まる事はない。

俺が持つ絶対の自信。奢りでも、もちろん卑屈ですらない。正当な自己評価。

それが、アーチャーの体を

「がはっ……！」

突き破る！

「……見事だ。」

負けを認めた。

その瞬間に、世界の変化がなくなり元に戻る。

アーチャーの体には力が入っておらず、糸が切れた人形のように崩れていく。

ゆっくり、ゆっくりと俺は右腕を引き抜き、彼を寝かせる。

「お前が何処の誰だかは知らんが、その力ならば彼女を……」

今にも消えかかりそうな体でありながらも、最期の最後に遺言を残すように、口を動かす。

しかし、

「アーチャー、齒あ食いしばれ。」

俺はそれを無視し、再度拳を構え、

「何をする気……っ！」

頬を殴った。

「……ああ、そう言えばこんな事もあったな。」

「やっと思い出したか。ったく、今回は事情があるとは言え、正直はらわたが煮えくり返りそうだったぜ。」

「すまないな。」

……ならば、何も言うこともないか。しかし、一言だけ。

頑張れよ、創太。」

懐かしい顔を最後に残して、アーチャーは光となる。

「ああ、世界を救ってみせるぞ。」

やらなければならぬ事はまだ多くある。

自分のためにも、世界の為にも、過去の為にも、未来の為にも。ここで、思い出に浸る気はさらさらない。

けど、だけれども。

俺は一粒の涙を流す。

## 解決

俺はこの時代に来てしまった時、全く動揺していなかったわけではなかった。

「ねえ。」

見間違いかも思わないとも思ったが、あれだけ慣れ親しんだ場所を間違えるはずはない。

「……ねえ。」

未だに吐き気だつてする。例え、この世界に俺がいなかったとしても。

「人の話聞いてる?」

そして、アーチャーと再会した時、初めて俺の感情が外に漏れ出した。

トラウマを克服したとは言わない。けれど、自分がこんなにも過去に囚われ、引きずられるほど成長していかないとは……

「古崖創太! 人の話を聞きなさい!」

オルガマリーの大声、それにより俺はやっと外へと意識を向ける。

「——悪い。考え事しててな。」

で、無視つて何のことだ?」

「貴方、本当に聞こえてなかったの?」

睨むような目で見られても、俺は考え事をしており、何を喋っていたのかは知らない。

それが事実だ。

「ああ、本当だ。」

「……そう。なら、カルデアに戻る時に身体検査は受けなさい。様子がおかしいようだし、後で体調を崩してこちらに責任が来るのは面倒ですから。」

「そうさせてもらう。」

最初はトゲトゲしてるとは思ってたが、意外に気遣いができる所長じゃないか。

今の状況を話しておく、アーチャーと戦った後である現在、俺た

ちは最後の休憩を取っていた。この特異点における決着の為に。

因みに言い出したのは、マシユでも藤丸でもなく、この俺だ。

前持った準備ができていないまま、人理焼却という事件が突発的に起こり、さらにはそのまま大魔術を連発する羽目に。正直、魔力の底がつきそうだ。

今は、ローブに仕込んだ魔術礼装によって回復しているが、全快とはいかないだろう。

この状態で、あいつにどう打ち勝つか……

「で、何か用か、オルガマリー？」

の前に、先程呼びかけていた彼女の用を聞くことにする。

「貴方、顔色悪いわよ。立香ほどではないにしても、栄養補給でもしときなさい。」

ほらこれ。」

そうやって手渡されたのは、蜂蜜が入った紅茶だった。

それは藤丸達にも回されており、疲労回復の効果がある。そもそも一番疲れている藤丸の為に用意されたものだが、それでも俺もそうであるので、気を使ってはくれているのだろう。

「ありがとう。」

礼を言いながらも、その紅茶を飲み干す。

「現状で一番頼れるのは貴方です。いざという時に動けなくなってしまうえば、困るのは私ですから。」

あくまでも距離を取るような丁寧な言葉で理由を語るオルガマリー。しかし、それは保身の為というよりかは、俺を心配しているかのようなのだ。

「所長が他人を認めるなんてなあ。これは雪解けの時期が……。」

「う、うっさいわね！ ロマニー！」

ほら、その証拠にドクターの言葉に動揺してるし。

「……そうだ。」

藤丸、ちよつと来てくれ。」

「あ、はい。」

その様子を見ている内に、突発的にある事を思い出す。すぐさま、



それを伝える為に藤丸を呼び出す。

名前を呼ばれた彼は立ち上がり、俺といっしょに他の奴らと少し離れた場所へと移動するが、

「待った。マシユ、お前はここで待機だ。」

共について来ようとする彼女を止める。

「いえ、しかし……」

「個人的な話なんだろうよ。奇襲が来ても、創太なら何とかする。だから、嬢ちゃんはここに座つとけ。」

マシユは少し考え、納得した顔で了承する。

それを見た俺たちは再び歩き始め、誰にも話が聞こえない場所に移動する。

|| || || ||

休息を終えた四人と一匹は、洞窟の奥へと進む。

光が入らず、正に一寸先は闇という状況で頼れるのは、カンテラ代わりとなっているキャスターの火球だけだ。

しかし、それも最奥部に近づけば終わり、禍々しい光が彼らを照らす。

「これが……聖杯……？」

ぼつりと、藤丸は口からこぼす。

これがあの聖遺物なのか。聖人が残したもののなのか。そうとは信じられないシロモノがそこに存在している。

しかし、一行は到着した。この聖杯という名の特異点<sup>旅</sup>の終着点に。

それは洞窟の天井まで伸び、見るもの全てを破壊尽くさんとしてしようとしている。まるで、この世の全ての悪が詰まったかのようなのだ。

「あれに願望機としての役割は期待するな。どんな願いでも殺すという解釈<sup>ア</sup>しかないシロモノだ。」

「この世<sup>マシユ</sup>全ての悪。噂には聞いた事あるけど、これが極東の島国にあるなんて……。」

誰もが圧巻する。畏れを体現した聖杯の姿に。

しかし、今はまだ、それに見惚れている場合ではない。その前に立つ人物。

黒のドレスに黒の甲冑。そして、それに相反するかのように血色をなくした白い肌と白い髪。手には反転していながらもあの聖剣があった。

「アーサー王。キャスターと創太さんに聞いてはいたけど、まさか本当に女性だったなんて。」

史実では男性であったはずのアーサーは性別を偽り、王として君臨していた。

この事実を知らなければ、今は落ち着いたように状況説明しているロマニが、耳をつんぎくような大声を上げていただろう。

「——面白いサーヴァントがいるようだな。」

「なぬ！ テメエ、喋れたのか！」

今までだんまりを決め込んでやがったな！」

アーサー王が言葉を発するということに驚くキャスター。おそろくは、今まで何も喋らなかったのだろう。

「ああ。何を語っても見られている。故に案山子に徹していた。

……だが、その宝具は面白い。」

その宝具、アーサー王の視線の先、それはマッシュが持つ盾の事を指し示している。しかし、何を意味するのかは、その場にいるアルトリア以外は誰も理解できなかった。

「セイバ……いや、アーサー王！」

しかし、そうであったとしても、創太は確かめたいことがあった。その為に、彼女に呼びかける。

「お前に二つ問う。」

衛宮士郎というマスターはいたか？」

創太の口から出てきた名前。それにアーサー王は密かに反応する。しかし、そこから彼女の真意は読み取れない。

だが、彼はあくまでも答えを聞くだけに徹する。

「……居たな、そのような名のマスターは。」

少し考えた間の後、彼女は答える。

「じゃあ次だ。古崖創太、またはジアナ・ドラナリク。どちらかを聞いた事は？」

「無い。」

今度は即答する。

この答えが何を意味するのか。そもそも、何故彼はこのような質問をしたのか。

「……分かった。それだけ聞ければ充分だ。」

「ならば、試しておこう。貴様らがこの旅を始めるに相応しい資格を持つのかを！」

しかし、戦いは始まる。

真意も、真実も確認する前に。

「頼む、マシユ！」

「了解しました。マシユ・キリエライト、出撃します！」

マシユが盾を構え、一歩前が出る。

その瞬間に

「っ……………」

アーサー王は目前まで迫る。

「はあっ！」

「くっ……………」

聖剣が振り下ろされ、それを盾で止めるマシユ。

だが、あまりにもその一撃は重く、彼女は一步、後退する。

だけでは終わらず、二歩三歩と押し込まれてしまいそうになる。し

かし、

<sup>アインサズ</sup>  
「A！」

キャスターが援護し、セイバーを退かせる。

「しっかりしろ！ 気を抜くとあっという間に持つて行かれんぞ！」

「は、はい！」

その言葉で、今一度マシユは再確認する。

ここで覚悟が足りない者は即座に脱落してしまうと。

だから、今度こそ彼女はその心に刻み込む。一步も引いてはならないと。

「創太さん！ 次こそ行きます！」

「全力で行け。サポートを信じて、な。」

「はいー」

次の瞬間、マシユはまた一步踏み出す。

それと同時に、セイバーも翔ぶ体制を始める。

互いがぶつかり合う。その状況が作り出される。誰もが予感した時、二人がいた場所のちようど真ん中で鏢迫り合いが行われる。

金属が鳴らす独特の甲高い音。

二人の得物が生み出す激しい火花。

先程とは違い、二人は全く退く事なく、マシユは守り、セイバーは攻める。

互いのやる事は違えども、拮抗しているのは確かだ。

「土よ、体の一部となれ。」

そして、それを狙うのが、後衛の役割。

創太の詠唱は、一対の巨大な土の腕を作り出し、セイバーを挟むように召喚される。

そこから何が起こるかは明白。

「つ……いー」

「潰せー」

土の腕はその手の平でセイバーを挟み、潰そうとする。

それを知っていたマシユはすでに後方へ離脱しており、残ったのはセイバーのみ。しかし、彼女も後ろへ跳ぶことで、それは回避される。だが、

「掛かったな。」

左右にさつきまでは無かった土の壁が創られていた。それは創太が作った物。

逃げ場をなくすように壁は高く、そしてそれにより作られた一つの道はキヤスターとセイバーを真っ直ぐに結ぶ。

「食らうとききなー」

キヤスターが杖を振るい、多数の火球を飛ばす。

左右には壁、真正面からの攻撃。これでは彼女は上に跳ぶしか避ける方法はない。しかし、それは相手に隙を見せるという事。

例え、空中で魔力放出で無理矢理に方向転換をできたとしても、さ

らなる隙見せることになる。ならば、取る行動は一つ。

「ふっ！」

火球を全て斬り裂く。つまりは前面突破だ。

その行動は正しく、キャスターの攻撃を傷一つ負わずに対処した。ただし、次に連なる攻撃には悪手になる。

「やあっ！」

セイバーが聖剣を振るう。その直後の隙を突き、マシユが火球の後ろから突進攻撃を行う。

そして、二度目の金属音が鳴る。

「っ……い！」

完全に隙を突いた。

そう思っていたマシユにとって、セイバーの行動は驚きであった。隙を無視して、聖剣を無理矢理切り返した。それだけではあるが、英霊という相手に格違いを改めて確認させられる。

それにより、二度目の鏝迫り合いが行われ、またもや、どちらも一歩も引かぬ状態となる。

「打ち上げる……い！」

そして、またもや創太の援護が入る。

今度はセイバーの足元から柱を生やし、彼女を空中へと打ち上げる。これにより、相手は完全な無防備状態となる。

「今度こそ、食らっつけ！」

またキャスターは複数の火球を飛ばす。しかし、今度は確実に当てられるはず。

「はああっ！」

はずだった。

セイバーの活とともに、魔力を周りに放出させ、盾となり、火を防ぐ。

「ちっ……い！ 無茶苦茶な野郎だ！」

愚痴をこぼすキャスターだったが、セイバーの動きにはまだ続きがある。

『卑王鉄槌』ヴォーテイガー 極光は反転する。光を呑め……い！」

空中で、しかも体が逆さにも関わらず、体を捻り、聖剣を斬り上げる体制を作る。

「っ！ 全員下がれ！ マシユの後ろに隠れろ！」

宝具を放つ構え。そうだとわかった瞬間に、皆創太の指示に従う。セイバーと対峙する唯一はマシユのみ。彼女は盾を構え、騎士王の一撃を受ける為の準備を行う。

これから始まるのは、単純な力比べ。小細工は無く、どちら一方が攻め切るか、守りきるかの二択。

「マシユ、行けるか！」

「はい！」

聖剣に纏う魔力は巨大化し、その場全てを黒く染め、破壊し尽くすかのような力を持つ。

それに比べて、マシユは力強い声を上げるものの、対抗するかのような力は見当たらない。

どちらが勝つか。その答えはどう見ても明らかだ。しかし、ここではマシユに頼るしかすべはない。

そして、騎士王の持つ黒き魔力が極大となった時、

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣ー！！」

聖剣は振り上げられる。

マシユ達からみれば、振り下ろされたような動きであり、今まさに、力の関係を示すかのようなだった。

「ショック対衝撃体制完了……来ま——っ！」

盾が、聖剣から放たれた黒き光を受け止める。

それ同時にマシユは、一步引いてしまう。そしてまた一步。段々と後退していく様は押し負けている証拠。

このままでは、後ろの皆に被害が及んでしまう。

「私は……やっぱり……この程度の……」

敵の宝具を受け止める。そんな大層な役割は自身には不相应だった。やはり、自分はただの弱い人間でしかない。

そう考えていた彼女は諦めかけていた。

「……。」

しかし、その後ろで何かを考える者が一人。  
藤丸立香、彼女のマスターは右手の甲に刻印された令呪を見つめる。

これを使えば、マシユは今以上の力を手に入れ、敵の宝具を防ぎきれないのでないか。ならば、迷う余地はない……。

だが、彼はここである人物からの言葉を思い出す。

戦闘前に行われた二人だけの会話の最中に言われたそれは、藤丸にとって驚きであった。

『令呪を使うな。』

その言葉に対して、何故だ、どうしてだと質問攻めをしていった立香に、その者はこう答えた。

『確かにそれを使えば、マシユは確実に騎士王の聖剣を防ぐだろうけど、その後はどうだ？』

自身の力で勝てもしなかったのに、後の戦いで勝てるのだろうか。令呪が無ければ、戦えもしないのだろうか。彼女は悩むだろうな。

例えそう思わなかったとしても、令呪に頼った自信は脆い。あっけなく崩れてしまう。令呪があれば、なんていうのは自滅するだけだ。

だから、令呪は使うな。

そして、信じる。

彼女ならば、きつとやってのける。』

その時、立香は澁々了解した。しかし、今の状況はどうだ？

マシユは聖剣の力を抑えきれずに、後ろへ退くばかり。ここからどうやって守りきるというのだろうか。

「……マシユ。」

再び、手の甲に目をやる。

そこには未だ使ったことのない三画の令呪があった。

この令呪は特別らしく、一日であれば一画は回復する。ならば、今使っても問題ないのでは？

それに今を乗り切らないと、先の事も何もないので？

「創太さん……僕は……」

令呪の使用を禁止した人物。その本人の名を口にしながら葛藤す

る。

マシユを信じるか。

令呪を信じるか。

「マシユ。」

腕を突き出し、敵の攻撃を受け止めているマシユに向ける。

「令呪を……」

これでいい。これでいいんだ。

そう自分に言い聞かせる。この選択が最良なのかは分からない。

しかし、胸に答えを聞いてみれば、これが出てきたのだ。

「令呪を……持って……」

マシユ。」

突き出した手を彼女の肩に乗せる。その甲には赤く描かれた令呪はない。

「せ、先輩……?」

防御に精一杯のマシユは苦しくとも、肩に乗せられた彼の左手に気づく。

「マシユ。令呪を使わなくても信じてる。

君は僕たちを護りきってみせるんだって!」

「っ……!ーはい!ー」

マスターからの絶大な信頼。

彼女にとつて、それは大きな後押しだった。

これ程までに頼られてしまえば、もうやりきるしかない。

「……私の中に眠る英霊よ。

名も知らなくていい。

宝具を知らなくていい。

けれど、力を。

ここにいる人たちを護りきれる力を、私に!」



強く、彼女は強く願望する。謙虚に、けれども強欲に。

護れる力を、護れる力だけを望む。

そして、それは呼応する。

「はああああつー！」

盾に、そしてマシユの中に長年眠っていた力が、表へと剥き出しになる。

ただの武器であったそれは誰であろうと、何が来ようとも、術者の意思によつて、無敵の盾となる宝具へと成り代わる。

彼女の前には魔法陣のような物が展開され、聖剣の黒き光を一つもこぼすことなく、完全に受け止めてみせる。

もうそこから、マシユは一步も引くことはない。

「つあ”あ”あ”あ”あ”あ!!」

叫び。

悲痛でも、嘆きでもない。

全身全霊を振り絞るための奮起。

こんな未熟な自分に信じてると言ってくれた人がいる。その彼のためならば、魔神が相手だろうと、伝説が相手であろうとも護る。

それが彼女のすべきことなのだから。

「つ……はあつ……はあつ……」

そして、ついにあの強大な光を、セイバーの宝具を防ぎきってみせた。

息は絶え絶え、次来ても、受け止められるかどうか。けれども、マシユはやってみせた。そのボロボロの体をなんとか立たせながら。

「今だ、キャスターー！」

「あいよー！」

聖剣からの光が打ち止めとなった時、創太とキャスターが、すでに地面へと着地していたセイバーへと攻撃を仕掛ける。

「とっておきをくれてやらあー！」

事前に用意していた木の枝で作られた人形。それを使い、キャスターは宝具を発動する。

「灼<sup>ウイッ</sup>き<sup>カー</sup>尽くす炎の檻<sup>マ</sup>！」

人形は一瞬にして巨人となり、炎を纏いながらセイバーに襲いかかる。

しかし、その動きは遅く、セイバーにとって回避は可能だ。それだけならば。

「土よ、燃え上がれ。その身を溶<sup>毒</sup>岩と化し、敵を蝕め！」

創太の詠唱が、巨人の周りの地面を溶かし、溶岩へと変える。

それがセイバーの足を絡めとり、さらには焼き尽くし、感覚を奪う。もうこれで、逃げる術はない。

「これで詰みだ！」

勝敗は決した。そう言わんばかりに最後の一押しをする。キヤスターの掛け声とともに、炎の巨人は溶岩に捕らわれた騎士王に覆い被さる。

溶岩の上で、炎に焼かれる。轟々と焼きつくされ、ただ燃え盛る。悲鳴はないが、それでも彼女が生き残っていることはない。そう確信できるほど、その光景は壮大であった。

「……終わった。」

今まで張っていた緊張が解け、その反動で立香の体は崩れ、地面に倒れこむ。

「ちよつと、大丈夫<sup>!?</sup>？」

「いや……大丈夫ですよ。ははっ。」

なんか力が抜けちゃったみたいです。」

「しつかりしなさい！ まだやる事は……」

聖杯の回収という一番大事な仕事が残っている。

それをオルガマリーが言い切る前に、異変は起こる。

キヤスターの宝具によつて焼き尽くされた場所に、一つの影が映し出される。焼けカスの下敷きから出てきたそれは、何かを両手で、大きく構えていた。

圧倒的なまでの存在感に、全員の視線が集まる。

膨大な魔力、先と同じようである。

荒れ狂う嵐というよりかは、悪を討ち亡ぼす聖なる雷のような光。

「まさか……！　まだ生きて……！」

その主は、斃したと思っていた騎士王であった。

「藤ま……！」

立香が狙われている。

そう判断した創太は彼を守ろうと駆け出すが、一步踏み出すだけで止まる。

創太の視線の先、セイバーの口が動いており、その意味する事が彼を止めた。

「マスター！」

しかし、その代わりにマシユが間に割って入る。

彼女には先のような力は残されていない。けれども、これが自身の役割であるから。

護るという事が、唯一の誇れる力であるから。

たとえ相手が強大であろうと、自身が弱くとも、勝算が無くとも、彼女は自分を信じてくれた者を守る。

「行くぞ……護り手となりし者よ。我が真正銘の全力をここに！」

二人が対峙する。それにより、青き騎士王は真名の解放を行う。

「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流——！」

セイバーは魔力を高密度に纏め、マシユは盾を構える。

力には先と同じ歴然の差がある。しかも、片方は本当に力を出し切ってしまった状態。

そのはずだった。

「マシユ、頼む！」

君ならさつきみたいにできるはずだ！

勝つためじゃない！　負けないための力があるから！」

「先輩……！」

私は貴方の期待に応えます！

貴方は私を信じた人だから！

ここで終わらせはしません！」

二人の強い想い。

それが再び盾に呼応する。

「約束エクスされた……」

双方の準備は終わり、激突する寸前まで来る。

振り下ろされようとする聖剣は倒すためではない。この先にある長い旅路の試練。これを耐えなければ、スタートラインにすら立てない。

そして、ついに、

「勝利の剣カッパ……!!!」

まばゆき光の束が、彼らへと襲う。

気を抜かずとも、下手すれば即座に死にかねない威力を持った剣。星が生み出した人類最強の幻想。

「っ!!」

対して、いつどここの聖遺物か分からない盾。

それは聖剣を真正面から受け止める。しかし、十全には力を出しきれず、徐々に押される。

「耐えて……」

だからなんだと言うのだ。

「マッシュー!」

護るべき者は信じ、この心はまだ諦めてはいない。

負けを認めてすらいなのに、敗北するとは決まっていない。

「みせるー!」

この盾が壊れる事はない。

彼女が折れない限り、敵の猛攻は断ち切られる。

「っああああああああ!!!」

また、叫ぶ。

振り絞れる力などない。

しかし、負ける気もさらさら無い。

宝具が出せなくとも、その身はまだ動く。

だから、だから!

「うああああああ!!!」

少女は光を防ぎきる――。

「……見事だ。」

騎士王は敗けを認める。

打ち倒されたからでは無い。防ぎ切られたからだ。傷はあれど、そのどれもが決着の要因ではない。

勝敗が確定したという状況は誰もが理解し、戦闘態勢を解いていた。

「私も知らず、手を抜こうかと思案していた。

しかし、それでは意味がない。」

「それ、どういう意味？」

セイバーの言葉に何かが引つかかる。

その疑問を解くためにオルガマリーが訊ねる。

「……その質問には答えられない。しかし、これだけは言っておこう。グランドオーダー――聖杯を巡る戦いはこれからであろう、と。」

謎ばかりしかない言葉。それを言い残したセイバーは光となり消えていく。

「オイ！ それは一体どういう……！」

誰もいなくなった虚空に叫ぶキャスターであったが、その身もセイバーと同じように光となろうとしていく。

「おおう!? ここまで強制帰還かよ！」

「キャスターさん！」

「チツ、仕方ねえ。」

立香、後は頼んだ！ 次がありやあ、ランサーとして喚んでくれ！」  
彼女の後を追うような形でキャスターは魔力に霧散し、消える。

「別れを惜しむ時間も無し、か。」

けど、これで終わりだろうな。」

「本当に……本当ですか？」

辛そうな藤丸は早くこの状態が終わって欲しいと、切実な願いを込めながら、訊く。

「ああ、本当に終わりだ。敵性反応無し、皆んな良くやってくれたよ！

所長もさぞ喜んで……ってあれ？ 所長は？」

「そこでブツブツ言ってるぞ。」

創太の指差した先、そこではなにやら考え込んでいるオルガマリーの姿がある。

「……グラントオーダー冠位指定。何故あのサーヴァントがその呼称を……」

「所長？」

「……え？ ああ、ゴホン。」

良くやってくれました、マシユ、立香、そして創太さん。後はあのセイバーが消えていった跡にある水晶体を手に入れるだけでしよう。

おそらく、あれが聖杯のようですし。」

最終目的はもう目の前、後は回収するだけ。

しかし、胸騒ぎがする者が一人。これだけでは終わらない。まだ何かあると、頭の中で考えを巡らせる者がいた。

＝＝＝＝＝

この時代での最強の敵、セイバーとの戦いは終わった。しかし、疑問に思うことがある。

戦闘中、最後の一撃を放つ前に彼女が俺に伝えようとした言葉。はつきりとは分からなかったが、おそらく、『信じろ』と。マシユに対して信じ、藤丸を守りきると踏んだのだろう。

だが、それ以上に重要なのは、彼女が最後に遺した言葉、グラントオーダー。しかも、それはオルガマリーも知っていたようだ。

それがここから始まるという事は他にも特異点があるのか？ という事は、この特異点を解決しても外は……

「いや、想定外だよ。君たちがここまで来るとはね。」

計画の許容外にして、私の寛容さの許容外だ。」

……何か、人を見下したかのような、嫌な奴の声が聞こえる。

「四十八人目のマスター適正者。全く見込みのない子供だからといって、善意で見逃してあげた私の失態だよ。」

「レフ教授!？」

ああ、思い出したぞ。あの緑シルクハットか。

「レフ……!? 彼がそこにいるのか!」

「ああ、いるぜ。いかにも私が黒幕です、つつう飛びっきりの雰囲気醸し出しながらな。」

お前ら、下がってる。あいつは……」

「ああ、レフ——! 生きていたのね、レフ!」

「所長! 待ってください!」

俺とマシユの忠告を聞かずに飛び出すのは、彼に依存しきっていたオルガマリーだった。

「良かった、貴方がいてくれなかったら私……!」

「やあ、オルガ。元気そうで何よりだ。」

対面する二人、この光景だけ見れば、感動の再会と言ったところだろう。しかし、あいつの目はただゴミを見るかのように、オルガマリーを消す気だ。

「ええ、ええ、そうなのレフ! 管制室は爆発するし、この街は廃墟そのものだし、カルデアには帰れないし!

予想外の事でどうにかなりそうだった! けど貴方がいてくれれば……!」

「ああ、そうだね。」

その一言で、そいつは隠す気もなかった邪気をさらに吐き散らす。藤丸達はそれに押され、舌すらも動かせなくなる。

「本当に予想外の事ばかりで頭に来る。」

その最も予想外なのが、君の存在だ。何しろ、君の足下に爆弾を設置したのに、生きているだなんて。」

「——え?」

レ、レフ? ねえ、レフ、一体どういう……。」

今まで、唯一信頼していた人物よ急変貌に、彼女の膝は震え、目の焦点が合わなくなり、脳が凍ったかのような顔をする。

「いや、生きているとは違うかな。君は死んでいる。肉体はとっくにね。」

トリスメギストスはどうもご丁寧に、残留思念になった君をここに

転移させてしまったようだ。

肉体を無くしたことで、あれほど欲しがっていたレイシフト適正を手に入れた。」

それを嘲笑うかのように話を続けるレフ。

「だから、カルデアにも戻れない。戻った瞬間にその意識が消滅してしまうのだから。」

「え……消滅って、私が？ そんな……」

「そうだ。しかし、それではあまりにも哀れだ。生涯をカルデアに捧げた君のために、せめて今のカルデアを見せてあげよう。」

そういうと、そいつはワームホールのようなものを作り出し、そこから何かを映す。

赤い太陽。それが映し出された光景。俺もここに来る直前に見たものだった。

「な……なによ、あれ。カルデアスが真っ赤になってる……？」

「さあ、アニメスファイアの末裔よ！ あれがお前たちの愚行の末路だ！

人類の生存を示す青色は一片もない。あるのは燃え盛る赤色のみ。

良かったねえ、マリィ？ 今回もまた、君のいたならなさで悲劇が呼び起こされたわけだ！」

「ふ、ふざけないですよ！ こんな私の失敗じゃ……！ 私の責任じゃ……！」

私は死んでなんか……！」

自身のせいではない。何も悪くないと、レフに言われたこと全てを必死に否定するが、その体は宙に浮き、ワームホールの先、赤く染まったカルデアスに吸い込まれようとしていく。

「っ……体が……！」

「言っただろう。そこは今、カルデアに繋がっていると。」

君の宝物に触れてくるといい。」

まさか！

「何を言って……！」

宝物って……カルデアスの事……？



ねえ、止めてよ。だって、高密度の情報体で、次元が異なる領域で……！」

「ああ、ブラックホールと何も変わらない。

遠慮なく生きてまま地獄を楽しみたまえ。」

オルガマリーの体が徐々に速くなり、ワームホールへと近づく。

「いや………いや、いやいやいや！」

私こんなところで死にたくない！」

悲痛な叫び。

「だって、まだ認められてない！」

誰も私を認めてない………！」

悲哀な叫び。

「どうして、こんな事ばかり——！」

絶望の叫び。

「誰も私を評価してくれなかった！」

皆んな私を嫌っていた！」

孤独な叫び。

「生まれから、ずっと一度も——！」

……誰にも認められてないのに。」

彼女が遺す最後の言葉、それはただ切実な、人であれば当たり前願いだっただ。

「所長!!」

「ダメです！先輩が行けば、所長と同じように………！」

助きたい。けれども、その力はない。ただ見ているだけ。

歯を食いしばり、血を流そうとも、出来ることはない。

けど、俺はもう、誰も死なせたくはないって決めた。

「オルガマリー!!」

彼女が誰かに縋るように伸ばしたその手を、俺は掴む。

「創太!？」

「創太さん!!」

「古崖さん!？」

いつの間にかオルガマリーまで走っていた俺に皆んな驚いているようだ。

手を掴んだ俺は、吸い込まれそうなオルガマリーを引き止め続け、足を踏ん張り、この小さな体格にあるまじき力をみせる。

「絶対に離すなよ!」

「ほう。これは最も予想外であった内の一人か。」

緑シルクハットが不快な表情で睨んでくるが、俺は知らん。

「お前とは会った時から怪しいとは思ってた。けど、ここまでクソだとはな。」

「貴様も随分と勝手な事をしたな。カルデアの外にしながら人理焼却を免れ、さらにはここに乗り込んでくるとは。」

現代の魔術師にしては、稀ではあるな。」

「そうかよ。」

「……っだああああ!!」

話を聞き終わつたと同時に、体全身に最大限の力を入れ、オルガマリーを引っ張り、それと同時に藤丸たちの元まで跳ぶ。

「よっ……とー!」

オルガマリー平気か?」

「痛っ……!」

「……え、ええ。なんとか。」

尻餅をついたようだが、怪我はなさそうだ。

これでオルガマリーは救い出せた。しかし、問題はまだある。

だが、それを解決する前に地面が揺れ出す。

「おっと、ここの特異点も限界か。」

私も次の仕事があるのでね。君たちの末路を眺められないのは惜しい。

では、さらばだ、ロマニ、マシユ、オルガ、四十八人目のマスター、そしてイレギュラーな魔術師よ。」

勝ち誇ったかのようにレフは言い残し、そして消える。おそらくは転移か何かだろう。

「地下空洞が崩れます……！」

いえ、それ以前に空間が安定していません！

ドクター！ 至急レイシフトを！」

「分かった！」

……けど、所長は。」

「もういいわ……。」

もう助からない。その意図を汲み取ったのか、オルガマリーは全てを諦める。

「私はもう助からない。彼に救われたけど、それも一時の物。

帰った瞬間に死ぬなんて、もうどうにもならない。だから……」

だからここで死ぬと？

「……ふっざけんじゃねえ。」

「古崖さん……？」

右手はオルガマリーの肩を掴み、左手は聖杯であろう物を持つ。

「願え！」

突如の叫び。それは誰も理解できず、驚くしかない。

「目の前にあるもんはなんだ！」

「それは……聖杯……！」

「これは願望機！ 願えば叶う聖遺物だ！ だから、お前が願えば！」

「だから何よ！」

今度はオルガマリーが叫ぶ。

「私が生き返ったところで、何があるって言うのよ！ 何も無い！

誰も認めてもらえない！ 嫌われるだけの存在！ なのに……なのに願ったところで！」

「少なくとも俺は認めてるぞ。」

「え……？」

出会って間もない人からの意外な言葉。それに彼女は再び驚く。

「お前は絶望的な状況でも、死者を出さないように迅速な指示をした。藤丸達をここまで導いた。他人の状態を見極めていた！」

俺ができていなかった事を、お前はやってのけた！

だから、俺は認めてる！」

嘘なんかない。

偽りでもない。

俺が、俺自身が本当に感じたありのままを伝える。

オルガマリー・アムスフィアは、優れた人間だと。

「これを聞いて、まだ死にたいって思うか！」

さあ、どうなんだ！」

「わた、わたしは……」

即決を迫られ、しどろもどろに喋る彼女であったが、しかし、最後は

「私は……生きたい！」

「レイシフト霊子転移！」

## 幕間・少しばかりの休息 次への準備

ある一室、そこでは音が鳴り響く。断続的で、無機質、そして小さな音。

たったそれだけが聞こえてくる。何も聞こえないよりはマシだが、どうにもそれに意識を向けてしまう。そしてそのせいで、余計に待つという時間が長く感じてしまう。

その時計の針という音により、時間を意識してしまい、暇という感情が生まれる。ただ椅子に座るだけの作業はどうも落ち着かない。

しかし、それは十分ほど続くだけで終わった。何故なら、俺の待つ人物、目の前にあるドアの向こう側から一人の人が現れたからだ。

「終わったぞ。」

「ああ、ありがとう。」

机や椅子、ベッド、そしていくつかの資料のファイルが置かれてある診察室。そこで待っていた俺は、部屋に入ってきた人物に感謝をする。

ウィリアムズ・ザケランダム、それが彼の名だ。愛称はウィルらしいけど、俺が使うのは早すぎる。

ダンディで低い声が特徴的で、黒い肌を持ち合わせる強面の彼は、顔に似合わず医療機関の一人らしく、主に機械や魔術機器のメンテナンスが仕事だったらしい。しかし、初レイシフト時に起きた事件の爆発により、従業員の大半は重症、よって患者の直接治療も仕事になったそうだ。

「それでウィリアムズ、結果は？」

俺がここで言っているのは、身体検査の結果だ。先ほどまであらゆる検査を受けており、診察室で待っていたのもこのためである。

彼は右手に持ったカルテを見ながら淡々と報告する。

「身体バイタル、精神バイタル、魔力バイタル、全て安全値を満たしている。戦闘を行っても、問題はないだろう。」

「そうか。」

やけに良い声してんな、ウイリアムズ。……じゃなくて。

この結果に対しては驚くも、安堵の溜息をつくこともない。予想していた通りだ。これはただ念の為に受けただけなのだから。

「だが……」

「……だが？」

「精神の方がな。安全値ではある事には変わらん。しかし、他よりも低めと出ている。」

しかし、ウイリアムズが続けた言葉で、俺は心臓が跳ね上がる。

「今は良いが、何かのきっかけで不安定になる可能性がある。」

「わかった、気をつけるよ。」

話は終わった。そう勝手に判断させてもらい、椅子から立ち上がり、部屋をでようとする……

「待て。」

が、止められてしまった。

「こうなったのは原因があるはずだ。お前が動揺してしまった何かがある。」

「……言わなきゃならないか？」

正直あまり言いたくはない。だから、話を切り上げて出て行こうとしたんだが……。

「個人的には気になる。だが、今の俺は医者だ。無闇に傷口を広げる真似は避けたい。」

それに、お前の専属ではないしな。他の誰か、例えばドクターロマに話したいのであれば、そいつに聞いてもらえ。」

無理強いをする気は無いのか。

俺としては話しても良いが、何故そこでロマニの名前が出てくるんだ？ あいつは何故か気にくわないんだが。

「まあ、その内話すよ。」

「ならば、さっさと出て行くなり、ここでゆっくりするなり、好きにしろ。俺の要件は終わった。」

「おう。んじや、お言葉に甘えて。」

手を軽く上げ、別れの挨拶をし、部屋へと出る。

「さて、どこへ言ったもんか。」

自動ドアを抜けて、左右に伸びた真っ白い廊下を見回しながら、俺は次なる目的地を考える。

しつつかし、このカルデアっていうのはどこもかしこも無機質で、生活感がないな。どこを歩いても似たような雰囲気だし、自分のいる場所が分からなくなりそうだな。

……と言つても、そもそも俺はこの全体を知らないから、今下手に歩き回れば、迷子になってしまう。さて、どうしたものか。戻ってウイリアムズに聞くか？

「創太さん。」

と頭を抱えて悩んでいたところ、助け船が来てくれた。

「オルガマリィ。」

銀髪の少女、そしてカルデアのトップである彼女は複雑な表情で俺を見てくる。

「お前の方が早く検査が終わったんだな。どうした、何か用があるんだろ？」

「ええ……まあ、それはそう、ですが。」

言葉に詰まっているのか、なかなか本題に入ろうとはしない。

これはどうやら、俺の方から助け船を出さなきゃならないようだ。

「そういうえば、藤丸はどうなった？」

何故藤丸の事を聞いたか。それは彼の意識がないからだ。

セイバーと戦い、レフが人理焼却に加担したということが分かった、ということまでが特異点での出来事だ。しかしその後、帰還した時に、慣れない状況下に置かれた反動なのか、彼はコフィンの中で意識を失っていた。

それからすぐさま検査を受ける事になり、俺とマシユ、オルガマリィもそれを受ける事に。そして、さっきのようになった。

「私もまだ報告は受けていないわ。」

「そうか……。まあ、死ぬことはないだろう。」

憶測ではあるが、意識が無いというのは今までにない限界以上の疲

労が、脳に襲いかかった結果だろう。

死んでいたという様子では無かったし、安静にさせればいつかは目が醒めるだろう。

「……だったら、お前は？」

しかし、問題はオルガマリー自身にもある。

彼女は本来この場所に、カルデアに帰って来られない存在だった。あの冬木で、彼女は霊体だけの存在となり、特異点でしか生きられない体となってしまった。

だが、特異点が修正される直前、彼女は聖杯に、魂だけとなっても現世に生きられるようにと願い、そして叶えてもらった。

だからと言って何も問題がないとは限らない。オルガマリーも先ほどまで検査を受けていたようだし、結果は出ているはずだ。

「何か不調だったりは？」

「無かった。体が魔力できていていう事以外は何も。」

「つまり、それって……」

「第三魔法、魂の物質化が私の体で行われた事になっているわ。」

やはり、か。俺もある事情でそうなってはいるが、その話は別の時にしよう。

「まさかとは思っていたけど、貴方のおかげで私はレフ・ライノールに殺される事を避けられ、更には現代に戻って来れました。

だから……その……ありがと。」

彼女は照れながら顔を背け、恥ずかしそうにする。最後の方は小さな声で、けども、はつきりと感謝の言葉を述べる。

「それはちよつと語弊があるな。」

しかし、俺もはそれを誤魔化正そうとする。

確かに俺は緑シルクハットからオルガマリーを助けた。けれど、

「お前が生き返ったのは俺のおかげじゃない。お前が願ったからだ。生きたいと、純粹で尊い願いを、お前は口にした。だから、お前はここにいる。俺に感謝するのはお門違いだ。」

「……それでも、貴方のお陰です。こんな私を認めてくれから、私は生きていてもいいのだと思えた。だから、その願いを口にすることがで



きた。」

先ほどとは違い、真剣で尊敬の眼差しで見つめてくる。

これは逆に……なんというか、俺が恥ずかしくなってきたそう。否定しても、しつこく訂正してきそうだし、別の話に切り替えよう。しかし、何を話すべきか……

「所長、創太さん。お一人も検査が済んだようですね。」

と思えば、廊下の奥から来たマシユが声をかけてくる。

これでどうにか話を逸らすことができそうだ。

「ええ。その様子だと、貴女も済んだようね。」

「はい。しかし、肝心の先輩は……」

とマシユが藤丸を心配するような口振りの途中で館内放送が鳴る。

そういえばだが、彼が後で集合のアナウンスをすると聞いていたな。であれば、もしかすると。

「えー……マイクテスト、マイクテスト。」

所長、創太さん、マシユ。至急管制室まで来てください。

繰り返します。所長、創太さん……」

一度目の集合アナウンスを聞いた後、俺たち三人はすでにそこから意識を互いに向け合い、それぞれ目を合わせる。

「どうやら、外の原因が分かったようね。」

「ああ。藤丸がどうなったのかも、多分分かるだろうな。」

「なら、早く行きましょう！」

どうにもマシユは先輩の事が心配なのか、早足で管制室に向かう。

「随分とせっかちなな。」

じゃあ、マシユに置いていかれないように、俺たちも行こう。」

「そうね、行きましょう。」

彼女に続く形で俺たちも目的の場所へと歩く。

しかしながら、俺は何度も言っている通りチビだ。そして、必然的に歩幅が小さくなる。だから、マシユのスピードに合わせてしようとすると……

「……予想はしてたけど、そうなるのね。」

「うるせえ。小走りになるのは仕方ねえんだよ。」

こうでもしないと追いつけないというのは、少し敗北感がある。けど、こっちの方が利点はあるっちゃあるので、背が欲しいとは思わない。

途中では、カルデアのスタッフ達が慌ただしくしている横を通り過ぎる。おそらくは、爆発における被害の処理をしているのだろう。しかし、人数自体は少なく、ごった返しになっているわけではなかった。それでも、彼らの労力はとんでもない事になっているのだろう。

そうこうしている内に、俺たちは目的の場所である管制室に到着する。自動ドアを再び抜けると、目の前に

「三人ともお疲れ様です。検査は無事に終わったようですね。」

何ともまあ、ふっわふわした医者らしくない医者がいた。

「ええ。一度死んだ後だっというのに、どこにも異常がないっていうのは驚きよ。」

「その部分に関しては、本当に彼に感謝するしかありませんね。」

「はいはい。その話はいいいから。」

褒めるのは後にして、そろそろあいつがどうなったのかを知りたい。

「ロマニ。あいつは、藤丸はどうなってる。」

「こいつは藤丸の検査を担当した。ならば、すでに結果はでいるだろう。」

「彼なら大丈夫です。明日にでもなれば、きっと目が醒めるでしょう。」

それを聞いたマシユは安堵のため息をつく。

「しかし、本題はここからです。」

ゆるふわな雰囲気から真剣な表情に切り替える。おそらくは特異点、そして人理焼却のことだろう。

「まず外の様子だけど、創太さんの言う通り、人一人いない状況になっています。残った人類はカルデア内のみ。」

絶望的な状況、それにマシユは絶句する。

ロマニのその言い方に間違いがあるが、今は指摘しないでおこう。

「おそらく、原因は特異点でしょう?」

冬木以外にも特異点が発生し、それが人理焼却の要因となっている。

でないと、特異点を解決しているにも関わらず、外に人がいないと言ふ事に理由が見つからない。」

「はい、その通りです。」

カルデアスにより観測した所、特異点が七つ見つかりました。それで全てです。」

ほう、なるほど。逆に言えば、それを解決すれば良いのだろう。

確実にゆつくりと……などとはいかないのだろう。

「期間はいつまでなんだ？」

「そこまで分かっているだなんて、貴方は……」

「ドクター、それは一体どういう事ですか？」

驚く表情を見せるロマニ。しかし、マシユの言葉に遮られる。

「……マシユ、ここカルデアはカルデアスの磁場によって守られている。けど、それはあくまでも二〇一六年まで。二〇一七年以降になると、ここも焼却されてしまうと、カルデアスでそう観測されたんだ。」  
「と言う事は、今が二〇一六年の三月……ここが焼却されるまで一年もないのか。」

これを短いと捉えるべきか、余裕があると捉えるべきか。

今回の冬木特異点では一日で解決できたが、これからどうなるかは分からない。だから、本来ならば早めに解決しなければならぬだろう。

「これからどうなるかは分からない。レフやその仲間が邪魔しないとも限らない。」

だから、今判明している特異点だけでも解決しなくてはならない。それが僕の考えです。」

「そうね、今すぐではなくとも、三日後ぐらいには……」

「いいや、十日だ。」

しかし、ここはあえて待ってもらおう。

「俺はここへ来て一日も経ってない。カルデア内の把握やら、戦闘の準備やらをさせてもらう。」

工房とかも確保したいしな。」

前に使っていた工房は世界ごと焼かれただろうから、ここで最低限の工房は用意したい。自身だけでも多くの魔術は使えるが、能力の關係で短時間限定になる。

「それなら、一日でもできるんじゃないんですか？」

準備というのもそこまで掛かるものじゃ……」

「他にも俺以外の準備をする必要がある。例えば、その彼女とかな。」

俺に指差された人物、マシユは何故自分なのかと驚く。

「え……私、ですか？」

「ああ、お前はデミ・サーヴァントとなってから日が浅すぎる。これからの特異点で、経験不足が仇となる可能性がある。ならせめて、出来る限り模擬戦をして、力の穴を埋めるべきだ。」

俺以外の三人は一理あると言った表情で、黙々と話を聞く。

「それに、藤丸の事もあるしな。」

「どうしてそこで彼の名前が出てくるのかしら。」

まさか、今後も彼を特異点に行かせるなんて事を……」

「それをするんだ。」

想定外の言葉であったのか、オルガマリーは目を見開き、同時にまくし立てるような、怒りをあらわにする。

「貴方！ 一体どういう事よ！ 彼が戦力になると思っているの！」

あいつはただマスター適正があるだけの一般人よ！ それを……」

かなり棘はあるが、言葉の節々に彼を思っていることがうかがえる。

「オルガマリー。」

しかし、彼女のそれすらも押さえ込み、黙らせ、威圧させ、それ以上追求できないような声を放つ。

「……ある一人の話をしよう。」

先ほどの迫力とは打って変わり、次は柔らかく語りかけるように話す。

何度も知り合いの話を引き合いに出して悪いと思っではいるが、適

切な物がこれしか無い。いや、この話があったからこそ、俺は藤丸を待つという選択をしようとしているのだ。

「そいつはどうしようもないお人好しで、いつも誰かを幸せにしたい、救いたいと願っていた。それがそいつの全てで、夢だった。

夢を叶えるためにそいつは奮闘し、失敗し、それでも切望していた。

けど、一人じゃなかった。仲間もいて助け合ったりした。……結果的に、ではあるが。

そいつは仲間を信用し、そして仲間からも信頼されていた。けれども、そいつから仲間へと頼ったことはない。

いつも先走って、自分の身を省みず、どれだけ傷ついても止まることはない。ついにはその仲間からも見捨てられ、夢を叶えることはなかった。」

これは俺が直接知った話ではなく、その知り合いを知っている友人から聞いた話だ。

一人で駆け抜け、一人で夢半ばで途絶えた、正義の味方を目指した奴の話。

「……だから、仲間は多くいる、とっ！」

「ああ。けど、分かっているとは思うが、これは俺の考えだ。無視してもらっても構わない。それに、藤丸と一緒に来るかなんてのは、あいつの選択を聞かないと分からない。」

先の特異点では藤丸を魔術の世界から遠ざけようとはしていたが、外の世界が滅んでしまったのであれば話は別だ。四の五の言ったられないし、途中参加になってしまえば中途半端で危険だ。やるのであれば、最初からついてきてほしい。

「あくまでもこれは俺の意見だ。

準備をある程度してから行くか、それともそんな暇はないと判断して出来る限り早く行くか。

最終的に決めるのはトップの権限であり、そして責任だ。」

判断はオルガマリーに任せる。そう伝え、俺の話が終わらせる。

話を聞き終わった彼女は考えるような素振りを見せ、その後口を開く。

「……私の考えを言います。」

彼女は上に立つ者として、威厳を保つ言い方をしようとする。しかし、元々そんなのではないので、意地を張っているようにしか見えない。「ドクターの意見は少々早計であり、確実性を欠いています。しかし、創太さんの提示した十日という期間は長すぎます。」

よって、次の特異点への霊子転移レイシフトは一週間後とします。

メンバーは暫定的に創太とマシユ。藤丸立香は本人からの要望があれば聞き入れましょう。

何か質問は？」

まあ、妥当な判断ではあるだろう。

むしろ、俺とロマニの意見を聞いて、それをまとめてくれた。賢明な上司だ。

「期間に関しては問題ない。けど、俺の部屋と工房はどこになるんだ？」

部屋は俺以外が全員決められているそうだが、俺のがまだ決まっていない。

せめて寝る場所ぐらいは欲しい。

「今回の事件で空き部屋は山ほどできたから、好きな場所を選ぶといわ。工房は……」

「フッフッ。どうやら、私の出番のようだね。」

この気配は、まさかっ——！

「はじめまして、古崖創太くん。」

私はレオナルド、ここの技術部のトップだ。」

部屋に突然入ってきた女性。それに全員の視線が集まる。

美女。まさにその言葉の通りの人物。しかし、どこかで見たことがあるような顔だった。……ついでに声も。

「……はじめまして。」

さっきの言い方だと工房をなんとかしてくれるみたい言い方だったが……」

「——サーヴァント。」

貴方はサーヴァントですか！」

急に驚き出すマシユ。俺もその事には気づいていたものの、先に言われてしまった。

「そう、正解だ。」

カルデア技術局特別名誉顧問、レオナルドとは仮の名前。私こそルネサンスの誉れ高い万能の発明家、レオナルド・ダ・ヴィンチその人さ！」

……頭が痛くなってきそうだ。特にその声でそのセリフを言っていることが。

「気軽にダ・ヴィンチちゃんと呼ぶように。」

「……それでレオナルド。俺の工房作りについては？」

「ぶーぶー、ノリが悪いなく。こういうのはちゃんと合わせてくれないきゃいけないんだぜ？」

レオナルドは分かりやすいように頬を膨らませ、怒っているように見せるが、色々と突っ込んでいくと話が終わらないので話題を広げないようにさせてもらう。

何故モナ・リザそっくりなのか、とか。何故ここにいるのか、とか。唯一女性である事については別にどうでもいい。

「ダ・ヴィンチ、さっさと要件を話さない。」

「所長もノリが悪いなあ。」

不満を言った後、彼女は咳払いを一つして話を続ける。

「さて、工房作りの話だが、私がおの手伝いをしよう。なんなら道具の一つや二つ、貸してあげてもいいんだぜ？」

「それはありがたいが、見返りとかはないのか？」

無償という言葉は一番怖い。それが無いことを望む。

「もちろん要るさ。」

先ほどの特異点での一部始終は見させてもらってね、君の魔術は実に面白い。それをすこーし、いいや、大いに教えてもらいたい。」

また俺の魔術かよ。昔はコルクスの王女にも狙われたついでに、今度は芸術家ですか。

教えたところで他人がホイホイ使えるわけでも無いんだよなあ。

……いやでもまさかな。

「分かった。情報を提供するだけでいいんだな。満足するかどうかは分からないが、工房作りの合間にでも話すよ。」

「オーケイ。楽しみにしているよ。」

これでひとまず、工房の確保はできそうだ。

「話は以上ですね。他には?」

「……はい。」

静かに手をあげる人物、マシユに皆の視線が集まる。

「あの、次の特異点はどこになるのでしょうか?」

次なる特異点、つまりは戦場か。どこに行くかによって、敵も違うし、状況も違う。それによって準備するものも変わってくるだろう。

「君たちからの意見も聞くけど、最有力候補としてはもう決まっているんだ。場所はフランスのオルレアン……」

——おい、まさかだろ。

その名を聞いた瞬間、冷や汗が全身から出てくる。

いいや、まだそうと決まったわけではない。しかし、もしそうとなれば……俺は……

「年代は西暦一四三二年……」

——何故、何故なんだ。

その年代は、アイツが生きていた時じゃないか。俺にはまだ会う顔を持ち合わせていないのに。

「ジャンヌ・ダルクが活躍した百年戦争に生まれた特異点だ。」

ああ、ついにその名前が出てしまったのか。

それは最も俺が信頼し、尊敬し、

そして、最も愛した人の真名<sup>名前</sup>だ。



## 特訓開始

とある場所、そこで俺たち二人は戦う。周りは草が生えており、邪魔になるものは何もない真っ平らな平原。

言っておくが、命を取り合うなんていう物騒な戦闘ではなく、あくまでも互いの力を高め合うための戦闘だ。

俺の相手であるマシユは盾を使い、俺自身は素手で攻防を行う。そのはずなのに、響くは金属がぶつかり合うような音だった。

「どうしたマシユ！ お前が守ることに特化してるからって、防戦一方じゃ不利になるだけだぞ！」

「っ……い！」

素手の唯一の利点、手数のみで攻め、そして圧倒的なまでにマシユを追い込む。さらには体格の小ささを生かして、彼女が持つ身丈以上の盾の影に隠れ、動きを見せないようにして横から上からと連打を浴びせる。

一方で、マシユは防御以外の行動は全くしない。ただ受け身になり、主導権を握られているだけ。攻撃を直接受けているわけではないが、それでも言葉を発する余裕すらもない。

それが戦闘開始から十分後の状況だ。

「そーっ！」

隙をついた。

そう言わんばかりの右の拳が、マシユから見て左上から下される。

しかし、彼女の目は動揺のそれではなく、逆に絶好の機会が来たように目だった。

「はあっ！」

盾を前面に押し出すバッシング、それが彼女の反撃だった。本来であれば、零距离で行うそれはほぼ回避不可能で防御するかしない。

そう、そのはずなのに、

「ふっ！」

「っ……い！」

一瞬の内に、俺はマシユの懐に入っていた。

今度はマシユから見て右下、先ほどとは反対から左の拳が構えられる。

「甘いな。」

その一言だけを残して拳を一直線に突き出し、回転を加え貫通力を高める。

これを食らえば、いくら頑丈なデミ・サーヴァントであるマシユでも確実に死ぬ。決着はついたようなものだ。彼女は負け、俺が勝った。誰から見ても、結果は明らか。だから、

「……参り……ました。」

拳を寸止めされた直後に、マシユは敗北を認める。

「……」

「どうだった、マシユ？」

「はあ……はあ……とても……有意義で……自分の……未熟さが……」

「ああ、悪い悪い。呼吸を整えてから喋ってくれ。」

「は……はひい……」

地面に倒れ込み、肩で何度も息を激しくするマシユ。厳しい訓練の結果、精神も体力も限界であることを露わにしている。

「ほら、タオルと水だ。その体に英霊を宿しているとはいえ、体自体は人間なんだから、汗拭いて水分補給しとけ。」

彼女の横に事前に用意してあった水筒と白のタオルを置いておく。

「わ……わかり……」

「無理して答えるな。しばらくはそのままでもいいから。」

喋ったら余計に息が乱れるので、今は回復に専念してほしい。

「い、いえ。だいぶ落ち着いてきました……から。」

「ほんとか？」

「は、はい。」

そんなことはないだろうと疑いながらも、彼女の体を視てみると、あれだけ激しい息をしていたはずが、だいぶ整っている。

「ですが、本当に強いんですね。特異点においても、魔術、身体能力共に洗練されていて、サーヴァントに匹敵する程です。」

「……まだまだだよ、俺は。」

確かに俺はサーヴァントを倒したことはある。けど、どれもこれも状況が良かったからだ。今もう一度倒せ、なんて言われて勝てるかどうかは分からない。

「と、そうだ。戦い終わったら訊きたいことがあるんだった。」

マシユがあまりにも疲れていたから訊きそびれていたが、唐突にあることを思い出す。

「マシユ、今の戦闘で気づいたことは？」

「え、ええつと、そうですね。創太さんは小さい体格であろうと関わらず、逆にそれを生かし……。」

「違う、そうじゃない。」

いや、観点は合っているのかもしれないが、もう少し視点をズラした方が良い。

「俺の事じゃなくて、もう少し自分のことを見てみるんだ。」

「自分……ですか？」

少し助言を出してやると彼女は考え込み、そして何かに気づいたのか、今度は一つ一つを丁寧に答える。

「——まず、一つ。相手に翻弄されて、ペースを取られてしまった事。」

「そうだな。守ってばかりで、攻撃できていなかった。」

正解した事にゆつくりと頷き、相手に自信を持たせる。

彼女の持つ力は、最前線に立ち、味方を敵の攻撃から守る事に適している。だから、防御ばかりなのは仕方ない事ではあるが、それでも一対一<sup>サツ</sup>で勝負をしなければならぬ場合もある。

それを考えれば、攻撃する手段も持たなければならぬ。

「次に武器を十全に扱えず、更にはそれを利用され、相手に視界外へ逃げられてしまった事。」

「良いぞ。しっかりと理解できてる。」

彼女が持つ盾は前に構える事で正面からの攻撃を防ぐと共に、視界をほとんど塞いでしまう。つまりは、相手が何をするかを目視で判断できなくなる。しかも、俺のような小つちやい奴は盾の影に隠れて全く見えなくなる。

その特性を理解できていなかったマシユは、まんまと翻弄されてしまったわけだ。敵にも、盾にも。

「……」

反省点を二つ言い終えたところで、マシユの口は止まる。考え込んでいるようだが、どうやら打ち止めのようなのだ。

「どうした、それで全部か？」

一応は聞いてみるものの、彼女はそれに対して、

「……はい。それが考えられる全てです。」

と返す。

しかしながら、残念な事に反省点には三つ目がある。

細かく言えばキリがないのは言わずもがな。だから、大きく分ければその三つなのだ。

「じゃあ、俺から。読みが単純だ。」

最後のやり取り、あそこは特に顕著だった。」

「え……！ あれが、ですか？」

本人からしてみれば、アレが一番読み合いをしていたのだろうが、俺はそう思わない。

「わざと自分の隙を作って誘い込み、そこから反撃する。考えとしては悪くないけど、あまりにもわざとらしくかった。」

「ですが！ あの時、貴方はそれに引っかけり、反射神経で対処したのでは……」

なるほど、彼女はそう見えていたのか。しかし、実際は違う。

「アレは乗ってやっただけだ。何かしらやってくるだろうと思って、拳を出した方向とは真反対の盾のフチに足を掛けてたんだ。気づかなかったか？」

「そうだったんですか!?!」

本当に気づいていなかったのか。

「マシユが何をしてくるにしても、そうしとけば、その足で体を引いて、回避も反撃もできると思ってな。そして、案の定さっきのようになったってわけだ。」

「なるほど……体格が小さいからと言って、戦闘に不利になる事はな

い。勉強になりました。」  
うむ。熱心でよろしい。

この調子ならば、次の特異点ではシャドウではない、本物のサーヴァント相手でも互角に戦えるだろう。

「だいぶ落ち着いたな？　なら、さっきの反省点を生かしてもう一回やるぞ。午後からは用事があるから、今の内にやるだけやるぞ。」

「はいー」

マシユのスタミナが回復した所で、また模擬戦を再開する。先と同じように、手加減はせず、隙があれば突く。

時間が許す限り、反省点を見つけ、改善し、また戦う。

それが特異点から帰ってきた翌日である今日の午前の予定、彼女の稽古に時間をつかう事だ。

この後の予定としては昨日作った工房の調整を行うので、彼女に付き合っただけはいられない。まあ、一日中特訓をしても効率が悪いだろう。

そして、

「はあ……はあ……」

「よし。こんぐらいかな。」

何度目かは忘れたが、そろそろ正午ぐらいになるだろうと時間を見て、今日の稽古を終わらせる。

「今日のところはここまでだ。悪いな、午前だけになっちまって。」

「い、いえ……創太さんのお陰で、自身の欠点も見えてきましたので。午後からはそれを改善すべく努力します。」

「そう言ってくれて、良かったよ。」

さて、ここからマシユと一緒に食堂でも行くかな。飯食って……いやその前に昼食を作らないといけないかな。朝に行った時は誰もいなかったし。

と、この後の事を考えていると

「二人ともおつかれ〜」

「フオフオウ。フオフオフオウ。」

部屋のドアらしきところから、昨日工房作りを手伝ってくれたレオ

ナルド・ダ・ヴィンチが現れる。

らしき、というののはここは一見草原なのだが、実はシミュレーション訓練室であり、景色は全てホログラムだったりする。だが、実際に触れられたりするので、ホログラムとは微妙に違う気が……。

それよりもだ。一体彼女は何故ここに来たか、それを尋ねなければ。

「一体何の用だ？ 魔術のことなら昨日話したと思うけど。」

「いやねえ、それもあるんだけど、ロマンから伝言があつてね。」

ロマンから、か。そいつからならば、あの事で間違いないだろう。

「四十八人目のマスター、藤丸君だっけ？ 彼が目覚めたらしい……」

「本当ですか！ ダ・ヴィンチちゃん！」

彼の名前が出た途端、急激に食いつくマシユ。

一緒に過ごした時間は短いはずだが、どうやらよほど先輩を好いているらしい。

「マシユ、一旦落ち着いて。深呼吸をするんだ。」

「……あ、すみません。つい興奮してしまいました。深呼吸ですね。」

ひっ、ひっ、ふー。ひっ、ひっ、ふー。」

おい、ベタなボケをかますな。

妊婦の真似はせんでよろしい。

「よし、だいぶ落ち着いたようだね。」  
どこがだ。

「本当は創太に用があっただけなんだけど、途中でロマンに会って、ついでに藤丸君が起きた事を伝えて欲しいと言われたんだ。」

途中の漫才の流れは置いとくとして。

藤丸が起きた、というのは朗報だ。運が悪ければ、そのまま昏睡状態になり得た可能性もあったので、一先ずは良しとしよう。

「なら、さっそくお見舞いだな。マシユ、一緒に行くか？」

「はい！ すぐにでも！」

おうおう、やる気十分だな。

「レオナルド、お前は？」

「んー、私は遠慮しておこうかな。見知った顔の方が落ち着くだろう

し、自己紹介はまた別の機会にしておこう。」

となると、行くのは俺とマシユだけか。そうと決まれば、早速藤丸がいる病室へと向かう。

「フオウ。フオウ。」

「お、なんだ。お前も行くのか?」

すっかり忘れかけていたが、この場にフオウもいたっけか。

大体こいつはマシユと一緒にのようで、訓練時も側から観戦をしていた。

「では、私が。」

そう言ってマシユは武装を解いて、フオウを抱きかかえる。

これでメンバーは決定か。

「なら行くか。マシユ、案内を頼む。」

「はい。」

部屋を出て、未だに慣れないカルデアの構造に迷いかけ、マシユの案内に頼りながらも歩く。

そして、五分後。彼がいる部屋まで辿り着く。

正確にはその一つ前の部屋、なのだが。

「ドクター、入りますよ。」

「どうぞ。」

部屋の主に許可を取ったマシユはドアの横にあるタッチパネルに触れ、ドアを開けて中に入る。

そこは昨日入った診察室と同じような作りになっており、ベッドが一つ、机とそこに散乱した資料、あとは奥にドアが一つあるくらいか。「君たちか。」

俺たちの顔を確認したロマニは、手に持った紙を机に置き、体をこちらに向ける。

「先輩の意識が戻ったと聞いて……」

「ああ。ダ・ヴィンチちゃんから話は聞いたみたいだね。」

確かに藤丸君の意識が戻った。記憶もしっかりあるし、バイタルも安定している。だから、面会の許可も出そう。

けど、あまり刺激を与えないように。混乱してストレスを感じてし

まったら、また倒れる可能性もあるからね。」

あくまでもそれは俺に言っているようではなく、マシユをなだめるかのような言い草だ。

彼女がソワソワとして、落ち着きがないからだろう。

「分かりました。」

「分かった。けど、あいつに外の事は……？」

「まだです。先ほども言いましたが、また倒れる可能性もあるので……」

特異点の話はしていないのか。

どうする？ 正直に言ってしまうえば、今日中に話がしたかったが、混乱を招いてしまうおそれもある。なら、また明日にでも……

「どうしましたか？」

「……いや、なんでも。」

難しい顔をしてしまったのだろうか、心配されてしまった。

どちらにしても、まずは藤丸に会う事は大事だ。

「じゃあドクター、中に入らせてもらおうぞ。」

「はい。時間は決まっていないので、ご自由に。」

ロマニの横を通り奥のドアを開け、藤丸がいる部屋へと入る。

そこは先の部屋と構造は似ているが、置いてあるものはベッドと棚ぐらいしかなかった。

「あ、マシユ、古崖さん。それにフォウも。」

「フォフォウ。」

そしてベッドの上に座っている少年、藤丸がこちらに気づく。

初めて会った時に来ていた白い服ではなく、患者が着るような服を着ていた。

「先ば……！」

「はい、ストップだ。」

「フォウ。」

先走りそうになったマシユの口を押さえ、制止させる。

「会えて嬉しいのは分かるが、刺激を与えるなってロマニも言うてだろう。」



彼女が落ち着いたと同時に、手を離す。

「す、すみません。つい……」

「……まあ、いいか。」

改めて、藤丸。元気か？」

マシユの気持ちも分からなくもないので、あまり叱らないでおう。

それよりも、目の前に座っている彼だ。

「はい。少し体がダルいくらいで、後はなんとも。」

「ふーん、そうか。」

「とにかく、無事で何よりです。」

藤丸の答えを聴きながらも、俺たち二人はベッドの近くにある椅子に座る。

昨日倒れたという事から少し精神面を心配していたが、変わりはないように少しホツとした。

「古崖さん達は？」

「俺は大丈夫だ。もちろんマシユもな。」

「それは良かったです。」

……やっぱり、僕はああいうのは向かないんでしょうね。アレの後に、倒れるぐらいですから。」

顔を俯きながら、昨日の醜態を皮肉る藤丸。

——少し不安定だな。

確かにあの状況から劣等感を感じるのは当然ではある。慣れないことを向き不向きと考え、精神の脆さだと勘違いしてしまう。

しかし、それは今後の戦いでは不安要素となり得る。ならば、俺の考えている、藤丸を特異点へと連れて行こう、というのは悪手ではないのだろうか。

「何か考え事ですか、創太さん？」

「いいや、なんでも。」

変な間を置いたせいとか、マシユに心配をされてしまう。

ううむ。どうやら、また考え事をしてしまったようだ。頭の中であーだこーだ考えるのは良いとしても、それにのめり込んでしまう

のは俺の悪い癖だ。

「そうだ。そういえば、聴きたいことがあるんですけど。」

突然、藤丸が何かを思い出す。

聴きたい事、それは一体何なのだろうか。

……アレしかないだろうな。

「外の世界、カルデアの外はどうなりました？」

不安になりながらも、それでも期待を多少込めながら訊いてくるそれは、俺たちにとっては答えづらい質問であった。

彼としては、元に戻っているだろうと半ば確信しているのだろうが、現実はそのようではない。

「それは……」

マシユも答えづらいようで、目を逸らし、はっきりとは言わずに終わる。

「ど、どうかした？ 何か変なことでも……」

まずいな。これでは藤丸がすぐに気づいてしまう。

直接言った方が良いのか。それとも、このまま黙っていた方が……。

「藤丸。」

いや、やはり言おう。

ドクターには止められたが、これは言うべきことなんだ。

「落ち着いて、よく聞いてくれ。」

こんな前置きをするが、ただの気休め程度でしかない。

発狂するか、失神するか。それは彼の精神力次第だ。

「まずお前の質問に答える。」

外の様子は変わっていない。」

「それって……」

「ああ、お前の思っている通り。人理は焼却されたままだ。」

それを聞いた瞬間に、藤丸の顔は絶望のソレへと変える。

以前にも似たような話をして似たような事にはなったが、それに比べれば幾ばくかマシだろうか。

「じゃあ、今までやってきた事は……」

「無駄じゃない。」

先程は肯定をしたような言い方であったが、今度ははっきりと否定する。

「いいか。昨日の他にも、特異点があったんだ。おそらくは人理焼却に関わっている。つまり、それを直せば」

「直せば、元に戻ると。」

「ああ、今度こそな。」

安堵の溜息をつく、と思いきや藤丸は顔を俯く。何か諦めたかのような表情で。

「……どうせ、僕なんかが行っても意味ないですよね。」

——こうなってしまったか。

彼は、俺の予期する反応をせずに、最初から放棄するという選択をしてしまった。

「いえ、そんな事はありません！」

しかし、マシユはそんな先輩を元気づけようと、必死に説得する。

「先輩がいなければ、私は……ここにいませんでした。」

あの爆発の後、貴方が来たから、手を握ってくれたから、私を信じて、あのセイバーの攻撃を防ぎきれると信頼してくれたから、私は生き残ることができました。」

深く、深く、感謝の意を込めながら、彼の存在を見いだす。

彼だから、彼だったからこそ、今ここにいる。ただそれを伝える。

「それは……その時の話だよ。」

これからもそれが続くとは限らない。」

それでも、藤丸に自信を持たせられない。

ならばどうするか。彼自身から言わせるしかあるまい。

「なあ、藤丸。確かにお前が役に立つとは限らない。」

「やっぱり。古崖さんもそう思……」

「けどな、お前がこの先どうするかは別だ。」

次の特異点に行くまでは六日ある。それまでの間、特異点で役に立てるまでに成長するか。それとも、やはり無駄だと言ってこの場に留まるか。

どちらを選んでも構わない。けど、やるなら俺は付き合う。」  
突き刺すかのように真っ直ぐな視線を向けながら、本気という姿勢をもって語る。

できるか、じゃない。やるかどうか、だ。能力不足というのであれば、これからでも補っていける。ただ、やる気だけは本人次第なのだ。「それにな、」

けど、それとは別に俺はこう付け足す。

「世界を救うチャンスなんて滅多に無いぜ。」

笑う。無垢で、そして純粹に。子供のような笑顔を見せる。

正義の味方になるというのは、俺の願いだ。

そのチャンスがここにある。ならば、自然と喜びと嬉しさが出てしまうのは仕方ないんだ。例え、極限に絶望的な状況であっても。

「……さて、俺の話は終わりだ。」

そう言つて椅子から立ち上がり、部屋を出ようとする。

「あの、どこへ……!」

「飯食いに行く。言いたい事は言ったしな。この後どうするかは藤丸次第だ。」

マシユはどうするんだ?」

「私は……その、しばらくは先輩のそばにいます。」

そうか。なら、一緒に飯つてのはなくなるか。少し残念だが、藤丸の事が心配みたいだし、仕方ないな。

「そんじゃあ、一人で行つてくるよ。」

藤丸、別に今答えを出さなくてもいい。じっくり考える……」

「いえ、その必要はないです。」  
俺の言葉を遮る藤丸。その瞳には先程とは違う何か灯されている。

覚悟を決めた者。それに近い雰囲気があった。

「行きます。次の特異点、僕も一緒に行かせてください!」

だから、僕に戦う方法を教えてくれませんか!」

大きな声で、それでいて真っ直ぐに、堂々と、彼は強くなって見せると言った。

これだけ言えれば、所長も文句はないだろう。

「よし、分かった。」

「なら、今から……」

「けど明日からだ。」

その言葉に、彼は肩透かしを食らったかのような顔をする。

「まだ昨日の疲れが取れてないはずだ。慣れない事だったしな。」

だから、今日はゆつくりと休め。色々と教えてやるのは明日からだ。な?」

彼からすれば、昂ぶった衝動をどこにもぶつけられずに不満だろうが、我慢してほしい。

「……分かりました。けど、明日は本気でお願いします。」

「ああ、元からそのつもりだ。」

——覚悟しとけよ?」

「はい!」

いい返事だ。これは明日が楽しみだ。

「じゃあな。また明日。」

「また明日、ですね。」

なら、その為にも色々と準備は進めときますかね。

## 魔術という力

「ふう、食った食った。」

藤丸の見舞いを終えて食堂での食事を済ませた俺は、ゆつくりとカ  
ルデアの廊下を歩く。行き先は昨日作った俺の工房だ。

昨日作ったはいいいものの、基礎部分だけなので、これから自分好  
みにアレンジをしなくてはならないのだ。

食堂には誰もいなかったもので、材料を勝手に使わせてもらい自分  
で作った。久しぶりにチャーハンを作ったけど、なかなか上手くでき  
いたと思う。

途中でムニエルとかいう人が入ってきたので、その人にも分けてあ  
げた、というのはただの余談だ。結構喜んでもらえたし、満足満足。  
そんなこんなで、工房へと戻ってきた。

昨日はレオナルドと一緒にこの工房を作ったのだが、まあなんとも  
変哲も無いことでしょう。木の机に、木の椅子、おまけに照明器具は  
天井に元々ついてあった蛍光灯と来た。

ただ唯一の怪しげな物体は、机の上に置かれてある謎めいた機械だ  
けだ。

「……何でここにいるんだ、レオナルド？」

いや、唯一ではなかった。他にもう一人、部屋の隅々を観察する芸  
術家がいた。

昨日話してみてわかったが、いや、その体を女体になっている時点で、  
話さなくても分かるが、彼女……彼？ は変態だ。

「お、ようやく来たね。何もなくて退屈してたんだよ。」

「退屈なら、自分の工房に帰ってくれ。」

「あれれ〜？ 昨日の約束覚えていないのかい？」

昨日？ 確かレオナルドに工房作りに手伝ってもらって、それから  
……

「君の魔術の事だよ。昨日は途中までしか説明してもらってないから  
ね。」

「そうだった。悪い悪い。」

マシユの特訓やら、急な藤丸の見舞いやらで忘れてしまった。

本当は俺の魔術を公にするのはしたくないのだが、というかしたら後々に大事になるのだが、今回は世界を救う仲間という事で例外だ。もちろん、藤丸やマシユ、オルガマリー達にも打ち明けるつもりだ。

「で、どこまで話したっけ？」

「変換魔術と属性が力だっっていうところぐらいかな。」

「そこまでか。」

それが俺の力の全容ではあつたりするのだが……

「けど、それだけじゃあ、特異点での活躍に説明がつかない。」

と、相手方としては納得がいかないみたいだ。

「私の見立てじゃあ、特異点で見せた力を発揮するのに、君が持つ身体能力も魔力も低すぎる。」

「なら、復習だ。」

「ここは一つ一つ丁寧に説明しよう。」

「まず、変換魔術についてだ。」

これはある物体の性質を別の性質に変えるという魔術……ついでいうのは言わなくても分かるよな。」

「もちろんだとも。魔術基礎の一つ、変換魔術。」

置換魔術のように全てを置き換える訳じゃないから、その分効率が良い魔術だ。」

「そういう事。一応後々の理解をしやすくするために、例を出しとくと……そうだ。ここに、人形がある。」

何かないかと部屋を見渡すと、机の上に手頃そうな人形があつたのでそれを手に取る。

人形といっても藁とか、木とかでできたものではなく、布に綿が積まれた呪い系ではない人形だ。

「この人形は柔かく、そこそこ引つ張つても千切れない強度がある。」  
そう言いながら人形の腕を折り曲げてみたり、引つ張つてみたりする。これが本物の人間ならば拷問となつていただろう。

「それを俺の魔術で、柔軟性と強度を変換させると……性質<sup>フォーンス</sup>、変化<sup>チェンジ</sup>。」

俺がずつと慣れ親しんだ詠唱、それとともに人形は変質していく。

魔力を使い、元の性質から別の性質へと変換する。

見た目こそ違いは無けれど、これは別のものへと変わった。

「よし、これでいいかな。」

そう言つて、人形の腕の先を掴み地面と平行にさせる。すると、なんとあんなにふにやふにやだったのに、肩から先はピンツと真つ直ぐに伸びているではありませんか。

「こうやって、硬度のあるものに変化する。」

「けどそれ、魔術で性質を付与しているだけにも見えるけど?」

「それが、ちよつと違うんだな。試しにこうやると……」

硬化した人形の腕で机の角を二度ほど叩く。そうすると、腕は叩いた場所で真つ二つに割れ、更には床に落ち、その衝撃で粉々に砕け散つてしまう。

ただ硬度を高めただけなら、こうはいかない。

その様子を見たレオナルドは『ほう』と言ひ、興味深そうな目で観察する。

「この人形、最初は『強度』があつた。けれども、俺はそれを硬度に変え、柔軟さを無くした。これにより人形の腕は『硬く脆い性質』に変わってしまったんだ。」

あくまでも俺が使う魔術は付け加えるのではなく、元々ある物を別の物に変えるのだと、念を押す。

これによつて、俺ができることの解釈に差異が生まれてしまつては困る。

「なるほどね。その部分に関しては、まあ基本的ではあるし、元から知識があるから良しとしよう。けど、本題はその次だ。」

属性が『力』なんていうのは聞いた事ないけど?」

「そうだろうな。なんせ、あのコルキスの王女ですら知らなかつたみたいだし。」

「それは十年前の聖杯戦争のことかな?」

「ああ。実験材料にされそうだったよ。」

あの時はあつという間に体に乗つ取られるという屈辱があつたが、今なら勝てる自信すらある。魔術師としての勝負は別問題だけど。



「話を戻すと、力ってというのは単純に、筋力や体力のことだ。というか、力に関連するものなら、だいたい扱える。」

さつきも言った筋力や体力なんかの身体能力に関する力、重力や磁力と言った自然現象に関する力、さらには存在力と言った概念的なものもな。」

これだけならば反則臭い<sup>チート</sup>が、色々欠点を持っているのが世の常だ。

「へえ、なら相手の力を跳ね返すつてのは……」

「あ、それは無理。」

早速、レオナルドが欠点を言ってくれた。が、説明するのは後だ。

「ちえー、それができたらかつこいいんだけどなー。」

「まあまあ、何故無理なのかは後々にして、まずは何ができるかを説明するから。」

拗ねる彼女をなだめながらも、話を進めていく。

にしても、跳ね返せてカッコいいというのは、少し子供っぽい気がする。

「さて、俺の能力のことで勘違いされやすい事をあらかじめ言っておくが、この能力は万能じゃないんだ。」

「そうなのかい？ 万能な私から見ても、君の力は私に及ばないにしても、人としては十分万能だとは思うよ。」

及ばないって、ちよつと自負しすぎじゃないのかこの芸術家。自分で言うのもあれなんだが、本来なら時計塔とかの大御所が喉から手が出るほどの能力なんだぞ。

……まあ、黙ってしよう。別に自慢したいわけでもないし。

「実質的にはそうなんだろう。だが、俺の能力は特化させる事に向いてるんだ。」

「——ほう、聞かせてもらえるかな？」

この顔……おそらく彼女は、大方の予想がついているようだ。しかし、あえて自身の口からは語らずにいる。つまりは俺からの確証が欲しいらしい。

なら、聞かせてやろうじゃないか。

「まず、さつきも言った通り、俺の属性は『力』だ。基本的に魔術はそれを対象として発動する。そして、その魔術は変換魔術だ。」

次にその『力』何に変換するか。もちろん、『別の力』だ。」  
「勿体ぶつてないで、早く結論を言いなよ。」

おっと、こりやあちよつと格好つけすぎたようだ。お陰でレオナルドが不満そうに急かす。

「失礼失礼。」

まあ、何が言いたいかというと、俺は魔力とスタミナやら耐久力やらをそのまま筋力や敏捷力に変えて、身体能力を極限まで向上させ、限定的に英霊に匹敵する力を手に入れてるってわけだ。

ただし、一般人に殴られただけで致命傷になりかねない脆い体になつてしまふんだけだな。」

致命的な欠点を生み出す代わりに、それを上回るほどの強みを作る。それが俺の能力であり、そして戦い方だ。

「やはりそうか。あれだけの力を生身で行使するのはおかしいとは思ったけど、それなりの対価を払っているわけだ。」

魔術における基礎の基礎、それが君のタネということか。」

「まあな。けど、だからと言って他の奴が真似できるわけでもない。能力を上げようとしても、変換する魔力以外に魔術を使う分にも魔力が必要だし、そもそも効率が悪い。普通の魔術師なら魔力を二使つて、筋力を一あげるだけになる。」

属性が『力』だからこそ、効率良く魔力を運用できるんだ。」

「なら、アレはどうなるんだい?。」

アレ……どのアレだ? 俺、他に何したっけ?

「その顔、覚えてないっていう顔だね。」

「いや、悪い。本当に心当たりがない。何かしら関係性のある単語を出してもらえれば思い出すかもしれない。」

「レイシフト霊子転移。君自身も口にしていたはずだよ。」

レイシフト……ああ、思い出した。」

「ああ、特異点に移動したあの魔術か。」

「魔法と言つても、ほぼ過言ではないとは思うけど。君はものの数秒

でそれを真似て、個人で行使してみせた。

アレは人間一人が気軽に使えるような物じゃない。どれだけ魔術師として優秀だとしても、ね。

仮に君がそうだとしても、どうやって霊子転移レイシフトの事を知ったんだい？　この情報は外に漏らさないようになってる筈だ。それも説明してくれるかな？」

うーむ、正直ここまで根掘り葉掘り聞いてくるとは予想外だ。まさか、俺の魔術を真似てみようという魂胆でもあるのか？

ここは遠回りにでも聞いてみようか。

「それはこれから共に戦っていく仲間だから、ってことか？　それとも、単なる興味か？」

「もちろん両方だよ。」

本当に興味でも聞いているとは——彼女は俺からの情報で一体何をするつもりだろうか。

しかし、魔法……ねえ。

俺としては、術式さえ分かっしまえば無理やり使えるから、魔術と変わりないのだが。

にしても、彼女は少し勘違いしている。どうやら、俺は事前にこのカルデアの情報を、ひいてはカルデアの持つ技術を盗み見たように思っているようだが、実際には違う。それも含めて色々と説明しよう。

「そんなじゃあ根本的な疑問、何故ソレを知っていたか、からだな。

まずはつきり言っておくと、俺は霊子転移レイシフトなんていうトンデモ魔術、昨日ここに来るまでは知りもしなかった。」

あんな時間旅行がこの時代に開発されてるなんて、夢にも思わなかった。

「だから、知ったのは昨日だ。

次にどうやって知ったかと言うと、俺は術式を読み取ったんだ。あの管制室で組み上げられた術式から、な。

どうやって読み取ったかといえば、また『力』の属性が関わっている。」

またか、と思われそうだが、俺は終始それに頼っており、だからこそ色んなことができるのだ。

「さっきも言ったが、『力』には魔力も属していて、俺が最も得意としている。だから、魔術であろうと、魔力の残滓であろうと、見た瞬間にそこから術式を読み取ることができるとだ。」

とまあ、何故知っていたかという質問に答えるならば、こんなところか。

次は何故使えるか、だな。霊子転移レイシフトという大魔術が個人で使えた理由を、古崖の魔術師が使う魔術の本質を、ここで説明しよう。

「それでどうやってその術式を使ったか、なんだが、これもまた『力』の属性が関わっている。

簡単に言えば、行使する魔術に合わせて魔力の属性を変えているんだ。火の魔術を使うなら火の属性に。水の魔術なら水の属性に。という具合にな。

そうやって霊子転移レイシフトに合わせた属性に魔力を変えて、魔術を行使したってわけだ。」

「……うん、筋は通ってる。嘘を言っているようにも見えないし、それなら——」

納得した。そう言いかけてレオナルドは急に黙り、そして数秒後、真剣な表情で俺の両肩を掴んでくる。

「お、おいどうしたんだ？」

突然の行動に困惑するしかない俺。一体何が彼女の気に触れたのだろうか。

「君、まさかとは思うけど、それって理論上で言えば全ての魔術を使えるってことでは？」

彼女が重い声で言った事は、まさに凶星だ。

「ああ。魔力が底をつかない限り、どんな魔術であろうと使える。けど、術式を知らなきゃ意味ない。」

「そうだとっても凄じじゃないかー！」

先の重い声から一転、彼女の声は飛び跳ねそうなくらい明るくなる。今までの経験から、これはどうやら技術者としての血を騒がせて

しまったようだ。

彼女のこの行動に似たようなモノを何度も見てきた。そして、決まってもいつも面倒になりやがる。

「こうなると、色々と研究が捗りそうだ！」

「待て待て。そんな期待するような目で見るな。俺だつて限界はあるし、そんなに凄い力を持つてたら、今頃俺は抑止力に殺されてるぞ。」

抑止力<sup>アレ</sup>は魔術師が根源にたどり着いた時にも作用するらしいし。

「いやいや、そこまでは求めていないさ。ただちよつとギリギリを攻めてみるだけだよ。」

「一歩超えたら死ぬかもしれないというチキンレースですね。分かります。」

手札が増えるのは良いことではあるが、死んだら元も子もないので、丁重に断らせていただきたい。

しかし、今回はそれとは別にある物を彼女に作つて欲しい。

「レオナルド、お前の考えていることは後で前向きに検討しておく。

けど、今はある礼装を作つて欲しいんだ。あいつ用に。」

「つまり、やつてくれるんだね？」

こいつ諦めねえつもりでいやがる……！！

「それは一旦置いとけ。」

とにかく、礼装作りをやってくれ。具体的に言うと……」

—————

レオナルドとの礼装作りやら、晩飯やら、シャワーやらで時間はあつという間に過ぎ、今はもう夜中。本来ならば、明日に備えて寝るべき時間だ。

けど、俺はレオナルドに頼んである部屋へと足を踏み入れていた。

「悪いな、礼装作りを頼んでおいて、道案内も頼まれてくれて。」

「構わないさ。むしろ、期待以上の情報を渡してくれたんだから、これくらいはなんともないよ。」

「ああ、ありがとう。」

軽くお礼を言いながらも、俺はある機械の横を通る。それはまるで管制室にあるコフィンのように、一人が入れるような機械だ。

……いや、実際に入っている。致命傷を受けながらも、冷凍保存によって生きながらえている人たちが。

ここ、医療区画の一角に存在するこの部屋は、元々病室であったのが、以前の事故からコールドスリープ状態となった人を置く場所となっていた。

「ここは……Aチームの場所か。」

その中でも一際大事に扱われているのだと感じさせる場所がある。他とは違う機械と、そして他と明らかに離して置かれていた。

「そう。本来ならば、君の指導を受ける予定だった人達だ。」

「おいおい、適当なことを言わないでくれよ。」

オルガマリーから聞いた。Aチームは一年前か結成されていて、少なくとも仲が悪くはなかったってな。能力としても十分で、俺が口出しする必要はない。」

指揮官という立場を与えられるとは聞いたが、おそらく、実際に指揮するのはBチーム以下だったのだろう。今はマシユと藤丸の二人に絞られつつある。

「さて、俺の目的はこつちじゃなくて……」

ここへ来た理由、それはある人物に会うためだ。そいつはマスターとしてここに呼ばれたわけではないらしく、職員としてスカウトされた。

「……だな。」

あるコフィンの前。そこで足を止める。

「中は見えないし、魔力の波長が弱いけどあいつと全く同じ。」

……お前なんだな、遠坂」

遠坂凜。聖杯戦争からの仲間で、故郷での友人の一人。

彼女とは魔術師として多くを学び合い、そして親しくなった。それが今は意識を失い、この中で眠っている。

「そういえば、君は彼女と知り合いだったんだね。あの聖杯戦争を生き残った仲間、だったかな？」

「ああ。あいつには助けられたりもしたな。」

蘇る十年前の記憶。

未熟なりにも仲間とともに戦い、希望光を掴んだあの思い出。

それだけで目頭が熱くなり、感情が抑えきれなくなりそうになる。

「悪い。一人にさせてくれ。」

加えて、目の前の彼女の状態は悲惨だ。

こんな……こんなの、人に見せられるわけがない。

「……分かった。入り口に立ってるから、帰るときは声をかけてくれたまえ。」

「いや……少し時間がかかりそうだ。お前は好きにしたらいい。

大丈夫だ。帰り道は覚えた。」

目からこぼれ落ちそうなのを必至に抑えながら、『そうかい。』と言った彼女が出て行くのを待つ。

ドアが開き、そして閉まった音を確認した頃に、ついに頬に熱いものが流れ出す。

ああ……今だけは良いだろう。泣いたって……だって、こんなにも悔しくての……そして悲しいのだから。

死んでは……死んではいけない……けど、こうなってしまった。

「すまない……遠坂……！」

無意識に謝ってしまう。俺が事前にカルデアに入っていれば、事件の犯人を捕まえられればと後悔する。そんな物は無意味だと分かっているはずなのに。

けど、必ず救い出す。そう心に誓いながら、涙はとめどなく出てくる。

## 遠い遠い夢

ぼやけた意識の中、俺はある城の中にいた。

いや、そこに存在しているわけではない。どちらかといえば、一方的に見えるだけだろう。そこにいる人達は俺の事を完全に無視して、しかも体をすり抜けて行くのだから。

その城は中世に作られたようで、部屋の脇にずらりと甲冑が並んでいる。しかも、今いる部屋はどうやら謁見の間らしく、奥にどでかい豪勢な椅子が圧倒的な存在感を出している。

そこにいるのは二人の人間のようで、一人は本を持ちながら目が飛びでている男性。顔が異形すぎて、年齢まで読み取れない。

会ったことはない。それなのに、俺はそいつを知っている。覚えている。百年戦争にて、ジャンヌ・ダルクと戦った戦士、ジル・ド・レエ。のちに狂気の殺人者となった男。

そしてもう一人、ある少女もいた。

前回の特異点で最後に戦ったセイバーのように、色素を失ったかのような白い髪と肌を持ち合わせ、金色の眼は慈悲ではなく、憤怒に燃えているかのようだ。

修道女とも戦士とも捉えられる服は黒に染め上げられ、自身は悪なのだと象徴しているかのようだ。しかも、彼女が持っているのは旗。

ジル・ド・レエという少女が旗を持っている。これはもう、ジャンヌ・ダルク以外にはいないだろう。

そうでなくとも、確信はある。だって……だってその顔は……

「ジル、あの男は？」

黒いジャンヌがジルに何か質問する。あの男というのは誰のことかは分からないが、おそらくその男はただではすまなさそうだと感じられるほど、彼女の声は憎悪で満ちていた。最悪の場合、死に直結するかもしれない。

「はい、うちらいつ。」

ジルは別の部屋から縄で縛られた男を連れてくる。どうやら気を失っているようで頭が項垂れている。



「死んでいないわよね？」

「もちろんですとも。ですが、どうするかお考えで？」

「――。」

その時、彼女は一瞬の沈黙を作る。悩んでいるのか、それともどうするかなど考えるまでもないのか。

復讐するのか、慈悲を与えるのか。復讐するのであれば、殺すか、痛みを与え続けるか。

いずれにしろ彼女は俺の知るあいつではないかもしれない。だから『こうして欲しくない』と願うのは無意味なのだろう。おそらくは……

「おや、私めのアイデアは必要ですかな。」

「いいえ、不要よ。どうするか、なんてのはその時に決めるだけよ。」

――ほら、さっさと起きなさい。」

男の目を覚まさせる為なのか、ジャンヌは男の頬を思いっきり叩く。

響く快音と同時に、男は意識を取り戻す。

「いつ……！」

誰だ！ この私を叩く不敬な奴めは……ヒイツ!？」

目を開けた途端にふてぶてしい態度をとった彼は、ジャンヌの顔を見た瞬間に、恐怖で顔を青ざめる。

「ああ、ピエールよ。ピエール・コーションよ。会いとうございまして。」

彼女はわざとらしく、大根役者にも引けを取らない棒読みっぷりで、呆れたような声をだす。

「――バカな。」

バカな、バカな、バカな、バカな、バカな！

お、お、お、お前はジャンヌ・ダルク！ あり得ない！ ここにいるはずが……！ 三日前に……あの時地獄に……！」

「残念ながら、貴方の言う地獄とやらには行き損ねたわ。地獄のような体験をしたことはあっても、ね。」

その一瞬、ジャンヌはピエールと呼ばれる者に目は向けてはいた

が、見ているのは全く別の物だった。遠い遠い夢、それを見ているか  
のようだ。

「あり得ない、あり得ない！」

「……そうだ、これは夢だ！ 悪夢以外の何者でも……！」

「おやおや、現実逃避をし始めましたぞ。これはいけない。気付けが  
必要ですね。」

ジルはそう言いながら男の後ろに立ち、後頭部を殴る。

「ぎゃああつー！」

ひいつ、ひいいい……！」

脳を恐怖に支配されたのか、彼はすでに言葉とならない声を上げる  
しかなくなっている。

ただ、怖い。死にたくない、死にたくない、願うばかり。

「……虐殺なんて趣味、本当はないのだけれど。」

誰にも聞こえない小さな声、しかし、俺だけはその言葉を聞き取れ  
た。彼女は確かにそう言ったのだ。

殺す気は無い。すでにジャンヌ・ダルクはピエールという男はどう  
でもいいのだろうか。

「さあ、貴方が異端だと弾劾したジャンヌ・ダルクがここにいるので  
よ。十字架を握り、天に祈りを捧げなくても良いのですか？」

あの時のように、雄々しく吼えて見せてください。邪悪な者に災い  
あれと、邪悪なジャンヌ・ダルクに死あれと！」

「……なんだ、この違和感？」

その言葉は彼女のものではない。けれども、それに込められた意味  
は覚えがある。そう、神を信仰するあの……

「た——」

震え怯えながらも彼は僅かに口を動かす。

「た？」

しかし、それは勇気を振り絞った物ではなく、

「たす……けて……」

助けて、助けて！ お願いしますお願いします！ 何でもしますか  
ら！」

臆病が表立っただけだ。

「——ふふっ。あつはっはっ！」

見た、ジル？ あの神官様が！ 私を虫のような目で見ていたあの男が！ 今は足元で命乞いをしているなんて！」

見下すように、冷酷に、彼女は高笑いを演じる。

その瞳の奥には愉快の文字などない。

ただ、自分はこうである。だから、悪の化身となる。本質は変わらないと、自身を偽っているようだ。

「ああ、結局貴方は神などではなく自身を重んじた。悪を罰するのはなく、我が身を乞うた。

そんな紙のような信仰だからこそ、私を殺しきれなかったのでしょうね。」

残酷な笑みを浮かべながら、ジャンヌ・ダルクは男の手を自身の手と重ねる。

その行動だけ見れば慈悲を与えるかのようだが、彼女はそんな甘ったれるような事はしない。情けという言葉はここには存在しないのだから。

「ひっ！ ひいひいひい！」

「怯えないでください。そんな貴方にでも神は救いの手を差し伸べるでしょう。生きとし生けるもの、全てに生きる価値がある。例えその在り方がどれだけ歪であろうと、神は見捨てはしません。」

——それは、それだけが彼女が口にした唯一の本音。

嘘、偽りなど一切ない。心の底からの信仰であった。

「ですが、」

しかし場は一転し、残酷な物になる。

「ぎいやああああ!!」

彼女に掴まれた男の手から、黒き炎が燃え上がる。

腕から肩に広がる事はないが、その炎は腕を灰にすることなく燃え続ける。焼け跡はできても、体の中まで入っていかず、肌だけを延々と焼く。

あの炎は焼き尽くす炎ではない。痛みを与え続けるだけの物だ。

「私個人は別よ。」

神がどうあろうと、知ったことではないわ。」

先ほどまで丁寧な物言いであったはずの彼女は、突如として荒い言葉を使う。

「さあ、自ら異端者と認められた者よ。貴方には私に与えたように、火刑を与えましょう。」

その身を邪悪な炎で焼かれ、永遠の地獄を見るがいい！」

「や、嫌だ！ 助けて！ たすけ……！」

ぎゃああああ!!」

消えない炎にのたうちまわり、虫のように蠢き、意識を失おうにも痛みが強すぎて、失神すらできない。

死よりも恐ろしい生が、彼を襲う。地獄に落ちぬ地獄。これが終わるには、彼女の気が変わるしかないのだろう。

「いやあああああっ!!」

「……いつまでも、うるさいわね。」

ジル、こいつは下がらせて。地下牢にでも入れときなさい。」

「承知しました。」

他の聖職者はどうするつもりで？」

「いちいち相手するのも面倒ね。彼らの好きにさせればいいでしょう。」

「では、私はこれで。」

目玉男は炎に悶え続けるピエールを連れ、部屋を立ち去る。

そして、ジャンヌ・ダルク一人となる。

「……ああ、主よ。」

誰もいなくなった部屋で、彼女は神に語りかける。先ほどの冷酷な顔から一転し、彷徨う子羊が救いを求めるかのような顔をする。

その人が聞いているのかも分からない。けれども、祈るように膝をつく。

「私はこの身を邪悪な感情に任せ、そして悪へと落ちました。」

人を憎しみ、殺す事に何の躊躇もなくなり、悪を良しとする者へと変わり果てました。」

それでも、その事自体には何の後悔もないと、これが自分なのだ、とも続けて言っているようだ。

「しかし、それでも貴方は私が言ったように、こんな私にでも手を差し伸べるのでしょうか。だからこそ、貴方は多くの人々から信仰を受けるようになった。」

あ、まずい。薄い意識がさらに薄くなってきた。

夢から覚める合図だ。

「ですが、私はそれに手を添える事はできません。

してはならないのです。」

クソ、もう少しで彼女が何者かが分かりそうだったのに！ どんどん、この場から離れていく……！

「せめて彼と会うまで、あわよくば……」

そこで、意識は完全に無くなる。

—————

「……何だったんだ、今のは？」

重たい瞼を開け、白い天井を見上げる。カルデアの一室、そこで俺は夢を見ていた。

こんなのは久しぶりだ。夢を見るのが、ではなくて、こう……夢がリアルであった事が、だ。

昔にも何回か、現実味のある夢を見たことがあり、今回もその類だ。そして、決まって現実起きた事ばっかだ。一体何の因果で……

「——いや、あるのか。」

ジャンヌ・ダルク、ジル・ド・レエ。これから行くフランスに関係ある者たち。因果も何もないのかもしれない。おそらくは、いや確実に、別の意味でも。

「さて……今は七時か。」

最初の特異点から二日後の朝、それが今だ。

色々と予定が詰まっているので、先の夢が何だったかはとりあえず置いてこう。さっさと飯食って、藤丸のどこに向かわなければならな

いのだから。

時間は限られている。一分一秒だつてだつて無駄にはできない。あいつはやるって言ってくれた。だから、今はその気持ちに応えてやろう。

「よしー。行くかー」

ベッドから飛び跳ねて愛用であるボロボロの黒ローブを羽織り、部屋の隅に立てかけてある木の杖を持ち部屋を後にする。

向かうは昨日も行った病室。カルデアの構造は頭にそろそろ入ってきたので、案内など無くとも辿り着けるだろう。そう考えてる合間にも、ほら。

「迷わず一発か。」

十分ほどで病室のトビラの前に立つ。

なら、今度はノックを三回して……

「いるかーロマニーー?」

藤丸の担当医でもある彼の名を呼ぶ。一応これが礼儀だし、嫌悪感を持つ相手であろうと、それは大事にしなくてはならない。

「どうぞ。」

俺の呼びかけに対して、すぐさま反応してきた彼の許可を聞き、トビラを開け、部屋へと入る。

「よう、ロマニー。」

「おはようございます、創太さん。」

軽く挨拶を済ますだけ済まし、さつさと本題に入ろう。こいつといると、なーんかイライラすんだよな。

「藤丸は?」

「起きてますよ。先ほどマッシュも来て、今は彼と話しています。」なるほど。特に何もなさそうなら良かった。

と思つたら、次にドクターは真剣な顔を睨みつける。

「……藤丸くんからは聞きました。今日から訓練をつける、と。」  
「何か問題が?」

確かにちよつと報告するのは遅れたが、それでも問題はないだろう。さつきドクターはあまり問題があるように言っていないし。

「いえ、その事については特に。ただ……」

「俺自身に問題があるのか？」

その言葉にロマニは大きく目を見開き、驚く。凶星か。

触れてはこなかったが、彼が俺に向けるモノは何か大きな敵意があった。彼が黙っているならいるで、別に構わないとは思っていたが、ここに来てそれを口にするのであれば、俺も少し反論しよう。

「ロマニ、お前が俺を疑ってんのは分かる。いきなり外から侵入したと思えば、あれこれに口を出す。最初は正論を言うが、後々にカルデアを乗っ取るうとする敵対者かもしれないと。」

けど、無意味だとは思うが、言っておく。俺は味方だ。少なくとも藤丸達のな。

別に疑ってくれても構わない。むしろ、それぐらいの奴がいたほうがチームとしては安心する。」

今すぐ疑心を払えとは言わない。嫌悪を持つとも言わない。これはただ俺が言いたかっただけの事だ。

「疑ってすみません。けど、どうしても僕は疑心暗鬼になってしまうんです。」

「気にすんなって。こんな状況だ。誰が犯人かも分からないのに、そうそう信用できない気持ちもある。」

……まあ、俺もそうなんだけどな。」  
「えっ？」

またもや彼は驚きの顔を見せる。しかし、さっきとは違い呆気に取られたという様子だ。

「正直に言おう。俺はロマニという存在を嫌っている。」

いや、お前自身は嫌っているわけじゃない。今までの性格からして、むしろ仲良くはなれそうだと思う。

けど……なんかこう、な。」  
嫌悪している。そう言った後なのに、困ったような顔で笑ってみせる。

俺としても何言ってるのかよく分からない。言葉で表現しようとしても、上手くできない。

「だから、辛いなら頼りにしてくれたって良いんだぜ？ お前、日に日に目の隈が濃くなってるからな。」

「……ああ、いつかね。」

ロマニの好感度が上がった！ とは言えないな。ま、それでも言いたい事言えて俺はスッキリだ。未だにロマニを嫌悪する俺の気持ちは分からんが、彼とは良い関係を築きたいものだ。

あわよくば、その負担を肩代わりしてやろう。

「さて、随分横道に逸れたけど、藤丸との面会は？」

「良いですよ。バイタルも安定してますし、ほどほどであれば訓練をしても構いません。」

「……ああ。ほどほどにするよ。」

ほどほど。そうなたら良いな。

と、若干の不安要素を残しつつ、ロマニの許可も得たところで、奥の部屋まで入る。

「よう。二人とも元気か？」

「あ、古崖さん！」

「創太さん、おはようございます。」

ベッドに座っている藤丸と、その横の椅子に座るマシユ。その両方からの歓迎を受け、彼らの元まで歩く。

「その様子だと、昨日と変わりなく元気みたいだな。」

「はい。ドクターに訓練の事を話したら、渋々ながらもオツケーを貰いました。」

それは本人からも直接聞いたな。

「それで、訓練って何するんですか！」

ウキウキとした表情で、興味津々ながらもその目は真剣であり、世界を救うという事に覚悟を決めたかのようなうだ。

「まあまあ、それは適切な場所についてからな。」

それよりもここで渡されたカルデア制服を着るんだ。そんな寝巻きみたいな服装じゃあ、動きにくいだけだろ。」

「カルデア……制服？」

何のことやら、と不思議そうな顔をする藤丸。



おいこら。アレ、お前が戦う為に必要な物だつて言うのに。今からの訓練にも使うんだから、忘れたなーみたいな顔をするな。

「ほら、あの白い服に黒のズボンですよ。上半身につけたベルトが特徴的な……」

「ああー あれか！

荷物も無しに連れてこられてきたから、着替えとかどうしようかなと思つてると、職員の人に手渡されたんだ。」

なるほど。藤丸はマジの手ぶらでここに来たのか。今となつては家に物も取りに帰られないつてのが、さらに彼の不運さを感じさせられる。

「で、どこにあるんですか？」

「俺は知らない。」

「衣類品でしたら、ドクターがその棚の中に収納していると。」

「なら、それに着替えてさっさと行くぞ。俺は部屋の前に待つてるからな。」

マシユ、行くぞ。着替えに他の奴が、それも異性がいたらやりづらい所じゃないからな。」

「はい。」

それでは、先輩お待ちしております。」

—————

藤丸が着替え終わり、場所を移して現在は俺の工房に三人がいる。

チビな俺は教卓の上に立ち、藤丸は学校でよく見かける鉄パイプと木でできた椅子に座り、同じように作られた机に手を乗せている。

マシユはその横でパイプ椅子に座っている。

まるで、授業が行われるかのような雰囲気だ。いや、実際にやるんですけど。

「さて、藤丸くん。」

学校の先生みたく、体を踏ん反り返り、いかにもな声で呼びかけてみる。

おいこら、藤丸吹き出すな。

「まず最初に、今から何をするのか当ててみる。」

「何をつて……特訓ですよね?」

「いやだから、その内容を聞いてるんです。先生は。」

そんな初歩の初歩の答えは求めてません。

すると藤丸は腕を組み、真剣に考え出す。答えを捻り出そうとし、あれこれ悩み二、三分。その果てに、

「魔術……ですか?」

「そうだ。プラス一点。」

やっとのこさ出た正解の一部だった。

ちなみに俺がつけた点数だが、百になると一人前になる。今思いついたデタラメだけどね。

だから、藤丸くんが嬉しそうにガッツポーズをしても、この一点に意味なんかない。

「じゃあ、次の質問だ。魔術を習得、及び鍛錬することで、実戦にどう役立つのか。」

これは最も重要な質問だ。彼が担う役割、それをちゃんと理解しているのかを確認する意味がある。

「ええーと……相手を倒すため?」

「お前は敵のサーヴァントと直接戦うっていうのか。相当な勇者だな。マイナス一点。」

またもや謎の点数がつけられる。

それに対して、藤丸くんは強烈にがっかりし、机に突っ伏してしま

う。

「ううー……、間違えちゃったよー……マシユ。」

本当に泣いているのか、それとも冗談なのかまったく分からないが、マシユはその反応にあたふたしている。

「え、ええつとですね。そ、創太さん! あとは頼みます!」

おい、この片目カクシ、丸投げしよった。

仕方がない。というか、間違えても教えてやるつもりだったし、正解を言っておこう。

「良いか、藤丸。まずお前の役割は前線に立つ者へのサポートだ。基本的にマシユの援護だろう。」

まかり曲がってもお前が最前線には立つな。

今、地球上で戦えるのはここにいる三人だけだ。特に、お前はサーヴァントを従えるマスターだ。これから戦力を増やすという意味では、お前が最重要となる。

マスターがいなければ英霊を従えられないし、召喚すらもできない。

だから、後ろでしっかりとサポートするんだ。」

「はいー！」

うん。何度聞いても藤丸の返事は気持ちいいものだ。純粹であるからこそ、真つ直ぐになれる。真つ直ぐだからこそ、突き通せる信念がある。

だから、さっきまでメソメソしてたのは黙ってやろう、

「あの、少し疑問があります。」

ひっそりと、申し訳なさそうに謙虚な手を上げるマシユ。

一体どこに疑問があるというのか。

「おう、何だ？ 言ってみろ。」

「はい。前に言っていたと思うのですが、創太さんは冬木の聖杯戦争に参加していたんですよね？ なら、貴方もマスターとしてサーヴァントを召喚していたのでは？」

確かに似たようなことは言っていたな。特異点が地元で、しかも俺が戦った聖杯戦争の場所だって。しかし、

「いいや、してない。そもそも俺は参加していたんじゃない、横槍を入れていただけだ。」

本当はただの部外者だった。ただ、ある理由で邪魔をしていただけなの。

「では、その理由……」

「さて藤丸ー！」

マシユの言葉を遮り、強引に話を戻す。

これ以上根掘り葉掘り聞かれると進まないし……それに、な。聞か

れたくないことだってあるんだよ。

「魔術を教えるとは言ったが、実際にやるのは魔術礼装の起動だ。」

「魔術……礼装？」

「お前が今まさに着ている服がそれだ。」

「そうだったんですか!?!」

うむ、驚きだとは思う。

しかし、ここは世界を救うと謳っているカルデア。マスターにはそれなりの支給がされているようだ。というのをレオナルドから聞いた。

「本来ならば、魔術がどういうものでどう使えるのか、というのを教えたいが、あいにくそんな時間はない。この短い期間で英霊の戦闘において役立つ物を身につけなければならぬからな。」

冬木では黒サーヴァントであったが、これから先に真つ当なサーヴァント以上の力を持つ者とも戦うかもしれない。ならば、まずは何でもいから力をつけていくのが先決だ。

彼が魔術師として生きていく、という選択をするのであれば話は別だが。

「じゃあ、早速その礼装を使っていく。今日一日で、あわよくば午前中にも使いこなして、そのまま模擬戦まで持っていくぞ!」

「了解つす! がんばるつす!」

……藤丸くん。たまに変な喋り方するのはやめようね。

## 記憶と心情

「よーし、午前はここまでだ。」

「ありあしたー!」

魔術の訓練が終わり、部活の終わりにやる挨拶をする藤丸。

ふざけてるのかと言いたいが、汗だくの上に手が焼け焦げたような痕ができている。魔術が失敗した時にできたものだ。これを見れば、咎める気もなくなる。よく頑張ったしな。

「先輩、これを。」

「あ、ありがと……マシユ。」

いつの間に用意していたのか、マシユは袋に入った氷を藤丸に渡す。焼け焦げた手を冷やすためだ。

「いつ……!」

よほど無理をしたのだろう。氷に触れた瞬間にすぐさま手を離すほど、痛みが強烈みたいだ。

まあ、これに関しては俺にも非がある。

「悪い藤丸。ちよっとやり過ぎだかもしれない。時間がないからと言って、強引なやり方になっちゃった。」

この午前中の間に礼装に仕込んである三つ全てを扱えるようにする訓練。それを藤丸にやってもらったわけだが、藤丸は魔術に関して素人だ。魔術回路も開いていない奴が礼装の補助があるとはいえ、魔術一つを扱えるようになるのは相当大変だ。

「いやいや。俺もそれに乗っただからですから、お互い様ですよ。」

うーむ。言われてみればそうかもしれないが……いや、やっぱり俺が礼装に仕込んである魔術全部使いこなそう、とか言ったのが悪い。

「ほら手、貸してみろ。」

「? ……はい。」

俺が言うと、疑問を浮かべながらも素直に手を出してくれる。

藤丸よ、ちよっとお前が犬みたいに見える。人懐っこかったり、興味津々な目で見てきたりしてくるから。

その手を俺は両方の手を添えて、魔力を込める。

「フォーンス性質、チェンジ変化……痛みを癒しへ。」

小さく、しかし強く、柔らかな光が彼の手を包む。魔術による光、それにより焼け跡はじわり、じわりと元の肌色へと戻っていく。使った魔術は簡単な回復魔術だ。

「うおおー……これが本物の魔術か！」

「お前がさつき使った魔術も本物だよ。」

「だけど、やっぱり違うじゃないですか。僕のは礼装を使った偽物だし。」

「偽物じゃないし、もしそうだとしても役に立つのは間違いないから、そういう意味では本物と大差ない。」

ほら、終わった。」

他愛のない話を片手間に、回復が完了する。その証拠に藤丸の手は傷一つない綺麗な物へと戻っていた。

「ありがとうございます。それで次は何を？」

「飯だ。そろそろ腹減ってきたんじゃないか？」

「そういえば……」

と、話の途中で誰かの腹の虫が鳴る。

すると藤丸は疑うように、俺とマシユの腹を交互に見る。

「古崖さん。貴方ですか？」

「俺は違う。お前の腹が鳴ったんじゃないか？」

互いが互いに腹の探り合い（上手いこと言ったつもり）をするが、おそらく藤丸は違う。ならば、残った一人、彼女の方へと目を向けると……

「／／／／／」

うわ、照れてる照れてる。恥ずかしすぎて、顔を俯いていやがる。そんなでもって、すげえかわげフンゲフン。

「そ、そろそろお腹空いたし、古崖さんの言う通り、昼食にしましょうか！」

そんな彼女を気遣ってか、彼はさつきと話を移そうとする。

藤丸は優しいなあ。ウチの身内だったら、今頃とつくに弄り倒されてること確定してんだよね。今回は藤丸に乗ってあげよう。

「そうだな。食堂でも行って何か食べようか。ほら、マシユも一緒に。」

「は、はい……！」

彼女を誘ってみるものの、未だ赤い顔は戻らないままみたいだ。よっぽど恥ずかしかったのだろうか。

まあ、歩く途中で自然と直っていくだろう。そう思い、俺たちは工房を後にして食堂へと向かう。

さて、今日は何を作ろうかね。

—————

「お待たせ。今日の昼飯はシャケの塩焼きと味噌汁、ひじき煮、それからもちろん白飯もな。白菜の漬物も一緒にどうぞ。」

食堂に着いてから三十分後、藤丸とマシユの目の前に日本の家庭で食卓に並ぶ料理が出される。

藤丸のためを思って今回は和風にしてみた。マシユは……どこの国の人かは分らんが、口に合うとは思う。

ちなみに漬物は自分で作った。短時間でそんなことできるのかと言われると、料理にも魔術（錬金術）は応用できるんだぜ。

「古崖さんって料理もできたんですね！」

「多少はな。けど、俺の師匠には遠く及ばない。」

彼には多くの事を学んだ。今はもういないけれど、いい奴だったよ。

「これが……和食というものですか。」

マシユの視線は料理へと釘付けとなっている。

「マシユは初めて見るのか？」

「直接という意味では。この料理に限らず、多くは映像を見るだけでしたので。」

彼女がここから一步も出たことはないとは聞いたが、これじゃあまるで箱入り娘か何かだな。しかし、彼女の親は一体……まあ、今は腹ごしらえの時間だ。

「ほら、冷めない内に食べ。」

「はい！ じゃあ、いただきます！」

「わ、私も。いただきます。」

藤丸は元気良く、マシユは静かに手を合わせて食前の挨拶をし、箸を持ち昼食を取り始める。

元々日本人である藤丸はともかく、マシユは弄ばれるかのように箸を不器用に動かす。掴もうとしても掴もうとしても、空振ってしまふ。

「もしかしてマシユ、箸を使うのも初めてなのか？」

「は……はい。お恥ずかしながら。」

普通はそうだろう。アジア圏以外の人が箸を使うのなんて滅多にない。例え、日本文化が他の国で浸透していても、このカルデアにまで文化圏が及ぶ事はないだろう。

ここがどこにあるかは知らないが、おそらくは孤島なのだろう。ここが陸続きであったとしても、だ。

「ほら。ここをこう持って……」

「っ！ せ、先輩、顔がちか……！」

おお、青い青い。俺も昔は青春……しきる前に色々終わっちゃまったよな。

「ここにいたのね。」

俺の後ろに……！ ゲフンゲフン。

コツ、コツとハイヒールの音を立てながら、食堂に入ってくる人物、それはこのこの最高責任者、オルガマリー所長であった。

「よう、オルガマリー。」

「こんにちは、所長。」

「こんちわつす、所長！」

こいつ、ガチで部活みたいな雰囲気を持ち出してきやがった。

「貴方、ふざけているの？」

「いや、ふざけてないっす！」

そこまでしておけよ、藤丸。

だって、彼女のこめかみがピクピクと動き出してるんだから。あんまり怒らせたら面倒なだけだぞ。仕方ない、少しフォローを入れるか。「こいつなりのスキンシップだよ。だから、そんな眉間にシワをよせ



るなよ。老けるぞ?」

「はあー……。」

分かってるわよ。イライラしても仕方ないわね。」

深いため息の後、呆れるように怒りを鎮める彼女。少し前ならば、ギャンギャンと犬のように吠えていたのだが、少しばかり成長したのか?」

まあ、それよりもだ。

「来るんだったら、言っておいてくれよ。もう一人分作ってやったのに。」

「気持ちだけ受け取っておきます。多忙な仕事から空いた時間を使いに来たのは食事のためではないので。」

どうやらそうみたいだな。

彼女の目の下にはうっすらとクマができている。この二日間大変な思いをしているみたいだ。

しかし、彼女は俺の作った料理をじっと見つめる。

「……これ、貴方が作ったの?」

「ああ。もしかして食材を勝手に作ったらまずかったか?」

「いいえ。むしろ、そちらに関しては考慮していなかったのでありがたいと思ってみました。」

なら、良かった。後になって怒られるかもしれないと考えてたし

と思っていたら、彼女はまた歩き出し、テーブルを挟んで藤丸の前に立つ。

「藤丸立香。」

「ひゃ、ひゃい!」

オルガマリーの威圧に気圧されたのか、何故か藤丸の声が裏返る。

真剣な雰囲気になりそうだったのになあ。ゆるゆるしてんなあ。

「貴方は今後、特異点の前線で戦うという選択をしたそうですね。」

と思いきや、一転して部屋は緊張が張り詰められる。

「しかし、その選択はとてつもなく重い意味を持ちます。貴方はこの先、失敗してはならない状況に幾度となく出会うでしょう。そしてそのどれもが人理修復の失敗に直結します。」

その言葉一つ一つに責任という文字が刻まれている。

一つ間違えれば、もう取り戻せないほどの責任が。

「それが万全な状態で迎えるとも限りません。疲労に疲労を重ねた状態で、さらには連続する可能性もあります。これはそれほどまでに過酷な任務なのです。」

それでも貴方は、全人類の希望をその肩に乗せ、この任務を遂行する覚悟がありますか？」

真剣に問いかける。覚悟という二文字にあらゆる物を込めて。

辛い、苦しい、やめたい。

そんな甘ったるいことは言ってられない。どんな状況であっても前に進まなければならない。立ち止まってしまふなんて論外だ。

人類の歴史を勝ち取らなければならない。

ただの普通の人間には重圧すぎて、逃げたくなるだろう。そして、藤丸はその普通の人間だ。ただの一般的な家庭に生まれたただの一般人。だから、覚悟なんて持ってない筈だ。

「……僕は……」

けれど、

「覚悟はもう、してあります。」

彼は世界を救う準備をしていた。

「僕には所長の言う辛い状況なんていうのは想像できません。けど、ここへ来る時、世界を救うなんて聞いて正直ちよっと期待していました。僕なんか世界を救えるんだって。」

今は少し違うけど、でも根本は変わりません。世界を救う事ができるんだったら、僕は戦います！」

真つ直ぐと、そして口に笑みを浮かべながら、彼ははっきりと言葉にしてみせる。

これが自身の答えだと。すでにその気でここにきたのだと。

「……いいわ。貴方がそこまで言うなら、私に止める権利はないわ。」  
やや呆れながら、それでも彼女は納得する。

おそらくは彼を試したんだろう。人理修復というものがどれだけ過酷であるかは分からない。しかし、そうであつても前に進む志を

持っているかを見極めていた。いわゆる精神面における試験だろう。

そして、藤丸は見事合格した。

「所長……！　ありがとうございますー！」

彼もそれを薄々勘付いていたのか、許可がもらえたことに感謝の意を表し、即座に立ち上がり、体を九十度に曲げる。

これが日本人のOJIGIだ。

「べ、別に感謝する事でもないわよ。これは単なる確認みたいな物だったし。」

にしては内容が重いというか、長いというか……

「それに、本題は別にあるわ。」

創太さん、少しこちらへ。」

「え、俺？」

「いいから早く。」

そういうと彼女は食堂の外へと出ようとする。

「えー、強引すぎませんか？　返事してないんですけど。」

……あ、二人は先に食べといて。」

「はい。」

「わかりました！　その間にマシユに箸の持ち方を教えときます！」

昼食を食べたいのをグツと我慢して、二人を残し食堂を出る。

しかし、俺に話があるみたいだけど、何かあったっけな？　うーむ。

悩んでも思い出せない。食材を勝手に使った以外に何かあったかと言われれば……まあ、直接聞けば良いか。

「創太さん。貴方に二、三聞きたい事があります。」

部屋の外に出るや否や、彼女は早速話を始める。

わざわざ廊下に来て出たという事は、中の二人には聞かせたくない話なのだろう。

「何だ？　なんでも聞いてくれて良いぜ。」

「まず一つ。次の特異点、貴方はそこへ向かう覚悟がありますか？」

「っ……！　な、何の事だ？」

か、覚悟も何も。俺はそんなもんとつくに……

「二日前、ドクターが次の特異点を詳細に話した時、貴方の顔は動揺を  
してしまいました。となると、何らかの理由がある筈です。」

日本人である貴方がフランスの百年戦争に関わっているとは考え  
にくいですが。」

「それ、は……」

ああ、くそ。こんな時に限って嘘がつけなくなりやがる。何でも良  
いからデタラメを言えたら良いのだが、答えを模索し、間を作る事で  
余計に怪しまれる。

「言えないのであれば結構。しかし、精神が安定しない状態で戦線へ  
と送り出す事はできません。」

「……」

無理だ。あの事を言ってしまったえば、それこそ前線に出せないと  
言われてしまう。しかし、このまま押し黙っても、特異点には行かせても  
られない。

どうする、どうすれば……？

「……言えませんか。なら、質問を変えましょう。」

どうあっても口にしないと判断したのか、彼女は別の切り口を試  
す。

「十年前、冬木の聖杯戦争ではある一人の人物が消息不明となってい  
ます。未だ遺体は発見されておらず、その人物は貴方の協力者であつ  
たとか。」

何故、何故そいつの話が出てくるんだ。

核心に迫られる。けど、別にバレても構わない。構わない筈……な  
のに。

「そして更に十年前、第四次でも彼女の姿が確認されています。」

それも、旗を掲げた姿も確認された、とか。」

「え!? 待って待って! それは俺聞いてない!」

おいマジかよ! じゃあ、そんな時から正体バラしてないか!?

「……どうやら、貴方もこの情報は初耳だったみたいね。」

「初耳も何も、そんな事になってるのによく平穩に暮らせたなど、呆れ  
たというかなんというか。」

「そうでしょう。貴方の叔父がその情報を漏れ出さないようにしていたのですから。私も彼から聞いて驚きました。」

「……え？ 彼？ それってつまり、」

「叔父から聞いたのか、その話？」

「ええ。極秘にしてくれと言っていた割にはあつさり喋りましたけど。」

あの人ー！ ペラペラしゃがって!!!

そんな心の叫びが口に出そうだが、ここで言っても仕方ないのでグツと我慢しよう。

そして事が終われば、問い詰めるとしよう。

「その彼女、ジアナ・ドラナリクは典型的なフランス人の顔をしています。」

これらの事から推測すれば、貴方とジアナ・ドラナリク、そしてフランスが関連している事は確かです。顔の特徴だけでは判断できませんでしたが、戦場で旗を掲げているとなればかの聖女と関わりがある筈です。

おそらくは子孫か何かだとは思いますが……？」

彼女の推理、それはほぼ正解だ。正直、心臓が飛び跳ねそうならいバクバク鳴っている。

だからと言つて喋っていいのか？ これは俺の問題だ。他人を巻き込むことでもない。それにおそらく本人ではないのに……彼女の間違いに漬け込むか？

「それは……」

悩んだ末、俺は思うがままの言葉を口にする。

「……まず最初に言っておく。俺はジアナ・ドラナリクを愛していた。十一年間共に暮らしていたうちにな。」

俺の心情、これを前提におく事で重要視させる。

「次にそのジアナ・ドラナリクだが、それは偽名だ。例え俺がその名で彼女を呼び続けたとしてもな。」

しかし、フランスの特異点に行つたところで俺はその名を呼ぶ事はないだろう。なぜなら彼女の名は……

「彼女の真名、それは……」

ジャンヌ・ダルク、聖女と呼ばれたその人だ。」

これが俺の出した答えだ。

その答えにオルガマリーは驚き、目を見開く。しかし、嘘だと疑っている様子はなく、逆に信じているようだ。

「……そう。それが貴方の心を揺れ動かす原因ね。」  
納得したように彼女は頷く。

「貴方が愛した人である彼女と、今度は記憶がないまま再開するかもしれない。こんな複雑な状況であれば、戸惑うのも無理はないでしょう。」

彼女はこう言っているものの、実際には違う。

特異点にいるジャンヌ・ダルクは、実際には似ているだけの別人だ。元はどうあれ、俺と共に暮らした未来とそれを経験する前の過去は違う。

けど、彼女からすれば俺は私情を挟んでしまうかもしれないと思案するのである。だから、彼女は決断するだろう、俺を戦線から外すと。

「良いでしょう。私の疑問は晴れました。」

貴方がフランスへ行き、どう感じるかは知りません。しかし、貴方が戦えないと判断した場合は特異点から撤退してもらいますので、肝に銘じるように。」

……は？

ちよいと待て。今、頭の実解が追いついてない。予想外の回答であったからか、思考回路がフリーズしてただけだ。

「今なんて？」

アカン。俺の処理能力が著しく低下しているせいで、聞き返す事で

しか、答えを得られなくなってる。

「今言った通りです。いくら貴方が戦闘メンバーの統率をしているからといって、腑抜ければ容赦はしないと……」

「って事は、フランスへ行つて良いんだな？」

「……はい。むしろその方が良いでしょう。フランスへ向かわない方が、あとで苦悩する可能性が高いでしょうから、行つて踏ん切りをつけた方が貴方の為です。」

……今、俺は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしてんだろうな。

驚きを隠す気すらないほど、啞然とする。

「なんですか、その顔は？」

「い、いや。留守番になるかな、と思つてたから。」

「貴方がいなければ、マスターである立香とマシユだけになります。せめて頼りになる人を側においておきたいだけです。」

本当にそうか？

風の噂で聞いたが、英霊を藤丸に召喚するっていう話からその英霊に頼ればいいし、そもそも俺自身が頼りなくなる可能性もあるっていうのに。

……まさか、俺の事気遣ってんじやないか？ 踏ん切りつけるとか、正にそういう意味じやないか。

まあ、何にせよ礼は言っておこう。

「ありがとう、オルガマリー。」

「……先ほども似たような事を言ったような気がしますけど、礼を言われるような事ではありません。」

ピイツと顔を逸らす彼女だったが、顔を赤く染めているので、どうやら照れているだけのようだ。

「では、貴方は立香の教育に戻ってください。私にも次の特異点までにこなさなければならぬ作業が山ほど残っていますので。」

「そうする。本当ならそっちを一緒に手伝つてやりたいんだけどな。」「必要ありません。貴方がいなくとも、こちらはなんとかやっています。」

にしては、色々大変そうだけど。さつきも忙しいって言ってたし。

しかし、今回はその言葉に甘えさせてもらおう。

後方支援をしつかりと受け取るには前線がちゃんとしてないとな。

「はいはい。それじゃあ、戻らせてもらおうかな。あんまり無理すんな……とは言ってられないか。」

せめて、倒れないようにしてくれよ。」

「貴方に心配されるまでもありません。」

強がりと言うが、その声自体には疲労が見え隠れしている。さつき  
の藤丸に見せた威勢は何処へやら。

けども、今は彼女達を信じよう。俺だってあれもこれもやってられない。与えられた役割を果たすまでだ。

—————

それから三日間、藤丸とマシユにはそれぞれの戦い方を身につけさせる為、たった一つの特訓を行った。

それは模擬戦だ。

戦い、反省し、次の模擬戦に活かす。それを延々と繰り返す。彼らにとつては少しキツかったかもしれないが、なんとかついてきてくれた。

そしてその三日後の朝。今日はある事を行う予定だ。その為にカルデアにいる全員が管制室へと集まっている。

「英霊か……生で見るのは初めてだな。」

「マシユ嬢もデミ・サーヴァントになったけど、やっぱりそれとは違よな。」

「楽しみではあるけど、誰が呼ばれるのかはちよつと不安ね。」

カルデアの職員がザワザワと話しているようだが、もうすぐ静かになるだろう。時間通りであれば、な。

「な、なんか、きき、緊張しますね……」

いつもは陽気なはずの藤丸。しかし、今回ばかりは緊張からか、声  
がどもってしまっている。

「落ち着いてください、先輩。先輩でなくとも誰でも緊張してしま



ますから。」

「それ、よくわかんない。」

謎のフォローをするマシユに呆れたような声で返す彼であったが、少しばかり気持ちが悪くられたような気がする。

さて、そろそろ現状を伝えておこう。

この場では今、英霊召喚が行われようとしていた。それを今日に予定したのは実は俺だ。そもそも、英霊を召喚するというのは最初から決まっていたのだが、一体いつするのかを決めかねていた。

そこで俺は七日という猶予を考えた時、どうしても今日でないと色々都合が悪いとオルガマリーに直接申し出たところ、あっさりと承諾してくれた。

そして現在、管制室では藤丸とマシユ、そして俺という戦闘組三人はド真ん中に立たされており、全員の視線を集めている。ロマニは何人かの部下とともに部屋の壁際に待機している。何が起ころうとも対処できるようにするためのだ。

ただ、唯一オルガマリーが来ていない。他の職員はほぼ全員集まっているにも関わらず。

彼女もこの英霊召喚に立ち会う予定であったはずなのに。

「ふ、古崖さん。一体いつ始まるんですか？ 僕、緊張のしすぎでトイレに行きたくなっちゃいましたよ……。」

「お前は子供か。そんなの事前に済ませとけ。」

「だって……。」

「だってクソもあるか。」

せめて時間が過ぎてもオルガマリーが来なかった時に行け。そうすりゃあ多少言い訳が……。」

その時、ドアを思いつきり開ける音が部屋に響く。

皆の視線はそのドアを開けた人物へと集まり、藤丸は『まじか、トイレ行きそこなった』と言わんばかりの表情をする。

「全員集まってますね？」

「ああ、あとはお前らだけだ。」

時間ギリギリぴったり。オルガマリーと彼女が引き連れた何人か

の職員で、ようやく職員全員が集まる。

「一体何してたんだ？」

「触媒を探していました。強力な英霊を手に入れる為に、と思っていました。あいにく一つもありませんでした。」

堂々と歩き、俺たちに近づきながら質問に答える。

なるほど、だから職員を引き連れていたのか。そいつらで探し物をしていた、と。

しかし、堂々と言うことではない。

「触媒は事前に用意していた。けれど、誰かが処分したようね。」

「おそらく、レフじゃねえか？ 共犯者がいなければの話だけど。」

後半部分だけを小さな声で、オルガマリーだけに聞こえるように言う。共犯者が本当にいた場合、聞かせたくないし。

「それを探すのはまた別の機会です。」

まあ、そうだな。今回は別の目的があるし。

「ところで、何故全員を集めたのですか？」

何故この質問が出たか。それは俺が原因だ。オルガマリーに英霊召喚の日にちを相談した時、カルデア全員を集めてくれとも頼んでいた。

「うーん……歓迎会を兼ねてるのかな。」

「はっ。」

俺の答えに不満なのか、眉をひそめ、俺を睨んでくる。

けど、俺は顔色一つ変えずに話を進める。

「だってほら、これから一緒に戦っていく仲間なんだし、全員に顔合わせぐらいはしといた方がいいだろ？ 本格的なやつは後にしとしても、やっぱ紹介しなくてはいけないらしい。」

「らしいって……貴方が提案したのでは？」

「違う違う。俺は伝えただけで、提案したのは藤丸だ。」

親指を後ろにいる藤丸を指す。その彼は申し訳なさそうに、後頭部を手でさすりながら笑う。

「いや〜……。すみません所長。少し見当違いだとは思うんですけど、やっぱりこうしなきゃいけないと思うんですよ。」

「ええ、そうね。たしかにこの状況に相応しくない考えね。」

それを聞いて、がつくしと効果音がつきそうなほど頭が項垂れて腕もだらんとさせる。顔は見えないが、おそらくこれは泣いているな。ガチじゃないギャグの方で。

「……しかし、貴方の考えも分からなくもありません。」

そしてこの言葉で、次の瞬間藤丸は期待の目を彼女に向ける。

切り替えが早い早い。

「それじゃあー！」

「ですが、今回だけよ。次からわざわざ召喚の度に職員達を集合させる訳にもいかないわ。」

普通はそうだろう。むしろ、今回だけでも許してもらえただけでも感謝すべきだ。

「それで十分です。これで俺も全員の顔を見れますので。」

ありがとうございます。」

……ああ、今の言葉で理解した。彼の真意を。

藤丸は今から迎える仲間だけではない。自身のためにも今いる仲間を集めたのか。

「礼はいらないわ。それよりも立香、そろそろ始めてちょうだい。時間を無駄にはできないから。」

「は、はいー！」

オルガマリーの命令を受けた彼は事前に用意された召喚陣へと歩く。

この召喚陣はどうやら、マシユの盾を使ったものらしく、これを使えばどんな英霊でも召喚できるとか。流石に神を召喚なんていうことは無理だと思うけど。

……無理だよな？

「すーっ、はあー……！」

大きく深呼吸をする藤丸は体を召喚陣に向け……てはおらず、むしろ背にして、ここに集まる全員に顔を向ける。

「まず、皆さん！」

集まっていたいてありがとうございますー！」

最初の行動は大きなお辞儀。日本人特有の行動であるが、それでも彼としては関係ないのだろう。

数秒頭を下げ、次に顔を上げると一人一人の目を見ながら演説でもするかのように言葉を続ける。

「今回ここに集まってきたのもらったの目的は本来、僕達の仲間となるサーヴァントを迎え入れるためでしたが、もう一つあります！ それは僕自身が皆さんと、これから特異点を解決するために戦う仲間として挨拶をするためです。

なし崩し的に、僕はマスターとなり、前線を任される身になりました。おそらく、いや確実に、こんな素人に戦わせるなんて不安だと思ってしまうでしょう。

けど、それでも言います。

必ず人類を未来を取り戻してみせます！ ですから、共に戦う仲間としてどうかよろしくお願いします！」

最後にもう一度、藤丸は深く頭を下げる。

……誰が叩いたか、最初は一つの拍手だった。

彼の熱意のこもった言葉に心を打たれ、無意識に動いてしまったのか。けれども、それは一人が二人、二人が三人と波紋のように広がり、いつしか全員が拍手をしていた。

藤丸を少なからず認めたとということだろう。これには当の本人である彼も呆然とするしかない。

「やるじゃねえか、藤丸。」

「創太さ、ん……」

「こりゃあ、俺も負けてられないな。」

んっん！」

藤丸の前に出て咳払いを一つすると、あれだけの拍手が見事に止まる。

「皆、初めまして。途中から入ってきた古崖創太だ。」

「……」

さて、でしやばったはいいものの何を言うか。

身長低いから全員の目を見れないのが残念だが、仕方ない。熱い言葉を後ろにも届かせてやろう。

「今、俺たちは人類史上かつてない壁に挑もうとしている。

困難で壮絶な戦いになるだろう。とてつもない責任が負わされるであろう。

けれども、人類史上初なんてのは歴史上にいくつもある。それが少し難しくなったぐらいだ！

人理定礎復元がなんぼのもんだ！俺たちが人類初の偉業を成し遂げてやろう！」

最後は拳を高く突き上げ、皆もそれに乗って『おー!!』と言い拳を突き上げる。俺も仲間と認めてもらえたな。

「ほら、次はマシユだぞ。」

「え!?! わ、私ですか!?!」

「当たり前だ。レイシフト組は残りお前だけだ。」

俺も言っちゃったし、マシユにも言ってもらわないと示しがつかない。

「え、えーと、で、デミ・サーヴァントとして、ですがマスターと共に頑張りましたゆー！」

ああ、噛んだな。

トリという大事な場面でまさかの噛むという事態に本人は慌てふためき、周りは笑う。最後の最後まで失態をやらかしてしまったマシユはこれまでになく頬を赤らめる。

しかし、結末は固まっただろう。むしろ最後の出来事があったからか。どちらにせよ、気持ちは一つになった。これからの特異点に挑む覚悟はできただろう。

## 呼び寄せられし虚像

英霊召喚、それは僕にとって不安の一つであった。

最初に聞いた時は驚きもしたけど、やはり一番の不安は僕程度の間英霊は応えてくれるか、だ。

魔術師ですらない僕が過去の歴史的な偉人を呼ぶ。そんな身の程知らずの行為ができるのだろうか。

確かに戦うとは思った。けど、やはりこういうのは古崖さんあたりのほうが適任だと思う。しかし、古崖さんはあくまでもサーヴァントを従えるのは僕の役目だと断られた。何故かは分からない。けれども、理由があつてのことだろう。あの人は目先の利益だけに囚われず、リーダーのように未来を見据える。だから、僕はその言葉を信じる。

「来い、我が英霊よー！」

召喚の詠唱、初めてだから不安であつたが、最後まで唱えきり、マシユの盾が中継となつた召喚サークルが反応する。

一本の光の輪、それが召喚陣の周りを回り、そして中心へと縮まると同時に溢れかえる光その場を包む。

「いよいよですね……。」

マシユの言葉、それに肯定するように誰かが生唾を飲む音が聞こえる。溢れ出る光に反して、それぐらい静かな場所になる。

どんな英霊がくるか期待半分、協力してくれるか不安半分。そんな感情が混ざり合いながら、ただ待つ。

英霊召喚というのは触媒と縁と召喚者の在り方が関係していると言っていた。けど、触媒も縁もないこの召喚で関わってくるのは僕自身身の在り方のみ。慌てても来る者が来る。

自身に言い聞かせ、心を落ち着かせ、最初の召喚に応えてくれる英霊を待つ。

そして、ついに

「そろそろ出てくるぞ。」

目の前の光は弱まり、だんだんとその向こうが見えてくるようにな

る。古崖さんの言う通りになるのだろう。

人影はまだ見えない。けれども、実感している。手応えはあったと。

一体どんな英霊が出てくるのか……！

「……あ、あれ？」

しかし、その次に発した言葉は困惑と呆然が入り混じったものだった。

「ドクター、これはどう言う事よ！」

「わ、分かりません！ 召喚システムは正常に作動しているはずなんです……」

周りがザワザワとし始める。

失敗。最初に出てきたのはそれだった。

理由は分からない。僕のせいか、それとも召喚システムに不具合があったのか、何にせよ誰も呼ばれなかったと思われた。

「みんな！ よく見てみる！」

しかし、古崖さんだけは違った。

彼は小さな腕を伸ばし、召喚サークルに指差す。そのの上に乗っていたものは

「ま、麻婆豆腐？」

皿に盛られた白い豆腐と炒められた挽肉、それらにいかにも辛そうな真っ赤なタレがかけられた中華料理が存在している。

先ほどまでは影も形もなかったはずだが、一体何故……

「お、これ結構イケるな。藤丸も食べてみるか？」

何故この人はこんな状況で美味そうに食べているんだ——！

ま、まさか……この召喚システム……

「概念礼装<sup>ハズレ</sup>つきガチャか——！！！！」

「とかって言う夢を見たんですよ。」

「……夢で良かったな。」

英霊召喚を始める直前、藤丸が何か話したいことがあると聞いてみると、それはさつきまでの話だった。

最初の詠唱は間違えてるわ、召喚システムが狂ってハズレを出してしまうわという無茶苦茶ではあったものの、俺は麻婆豆腐が好物だと言った覚えがないのに美味しそうに食べてた所に、少し恐怖も感じる話の内容であった。

「私もその麻婆豆腐という物を食べてみたかったです。」

「マシユ、そこに食いつくな。」

「フオウフオウ。」

今ここでその天然はいらん。

「というか藤丸、そんな縁起の悪い事を言うな。もしそうなたらどうすんだ。」

「今の言葉でフラグが立ちましたね。」

「やめろ!! 俺は建築士じゃないぞ!!」

本当になりそうだからやめてくれ!

「立香! 無駄話をしてないで、早く始めなさい!」

あまりにも無駄に時間を割いてしまったのか、とうとうオルガマリーがキレる直前になっている。

「ほら怒られてんぞ。あっちが噴火しないようにさっさと召喚しよなせ。」

「はーい。すみませんでしたー。」

反省の色を一切見せないような間の抜けた声で返事をしながらも、召喚サークルの前に立つと一気に真剣な表情になる藤丸。

いよいよ、英霊召喚が始まるのか。



実を言えば、俺自身が英霊召喚を見るのが初めてだ。前も言ったが、俺はマスターであったことはないし、誰かの英霊召喚に立ち会ったことすらもない。

だから、俺にとつても初の体験だ。

「すー、ふうー……」

まずは一呼吸で緊張をほぐし、彼は腕を前に突き出し手を広げる。そしてしばらくの沈黙。未だ緊張が残っているのか、心の準備ができるまで少々かかるようだ。

そして、その緊張は俺にも伝わってくる。心臓の鼓動が速まり、手に汗握る。戦いの中での感覚とはまた別。緊迫ではない、嬉々とした感情が俺の中で駆け巡る。

にしても、一体藤丸はいつ始めるつもりだ？ もう五分も黙ったまままだと思うんだが。

「あー……」

と思えば、こちらに振り返る藤丸。

その顔は申し訳なさそうな苦笑いをしている。

「召喚の呪文って、なんでしたっけ？」

「なんでやねん！」

俺のツツコミ共に、この場にいる全員がよしもと○喜劇並みにずつこける。

何故関西弁になったし。

「前から覚えておけって言っただろ！ 具体的に言えば三日前から！」

「いや、だってあんな長い覚えられないですよ……。」

「分かるけどもやな！」

「そうだとしても、始める前に言っておきなさいよ！ さも召喚を始めるようにしてから言い出すのよ！」

「いやー、言い出しにくくて、つい。」

あれだけ真剣な雰囲気になりそうだったのに、段々とぐだぐだしてくる。

あかん。これはあかん。第六天魔王と新撰組切り込み隊長が来そ

うであかん。

仕方ない。この手を使うか。

「おい、誰か紙とペンを持ってないか？」

「まさか、カンペを作るつもり？」

ドクターは俺の意思を汲み取ったかのように答える。

「ああ。なかったら他の方法があるけど……」

口頭でなければ、充分だ。俺の言葉まで詠唱としてカウントされたらたまったもんじゃない。

「それならここにiP〇dがあるよ。」

「まじか。」

いや、ありがたいけど。まさかこんなところで林檎社の製品をお目にかかるとは思わなかった。確かにここは最先端の科学と魔術が融合した施設ではあるが、そんな普遍的な物が存在してるなんて予想外だ。

「じゃあ、それ借りるぞ。」

ロマニからそのタブレットを手渡され、文字が書けるアプリケーションを開く。

お、どうやらフリーハンドで書けるみたいだな。文字を打つのはあんまり早くないから助かる。

「藤丸、俺がこれに文字を書いていくからの通りに呼んでくれ。」

「分かりました。すいません、ここまでしてもらって。」

「謝罪じゃなくて反省しろよ？」

「は、はい。」

申し訳なさそうに藤丸はまた召喚陣に腕を突き出す。

手のひらを広げ、今度こそ真剣な表情で英霊召喚を始める。もちろん、その目線の先は俺が持っているタブレットだ。

「素に……銀と……鉄。……礎に石と……契約の大公。」

彼はカンペを横目に、一つ一つ丁寧に言葉を積み上げていく。

「降り立つ……風には壁を。四方の……門は閉じ、王冠より出で

……王国に至る……三叉路？ は循環せよ。」

意味は理解していないだろう。しかし、間違えはせず、ただ読み上

げる。

次第に淡く小さな光が召喚陣からポツポツと複数に分かれて出てきだし、周りの重力が少し軽くなったかのように、質量の軽い服や髪などがふわふわと浮き出す。

魔力が反応し始めたか。

「システムフェイト、正常に稼働。魔力、召喚者のバイタル、共に正常値です。」

「そのまま続けて。」

周りのサポート側は問題なく進んでいるようで、忙しそうではあるが、焦る様子もなくそれぞれが役割をこなしている。

オルガマリーが全体をまとめ、ドクターが逐一報告しながらも値を正常に保たせていく。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

タブレットには、ただ『みたせ×5』と書いたただけだが、省略しても彼はきちんと言唱を続けてくれる。

「繰り返すつどに五度。」

ただ、満たされる刻を破却する。」

そして、ここから本番だ。ここまではただの前準備。

「Anfang」

藤丸が少し笑みを浮かべながら、その言葉を発した時、光は一気に強くなる。

眩い光はしかし、目に痛みを与えるものではなく、けれども何も見えなくなるほど、周りを白くさせる。

屋内であるはずなのに風が吹き乱れ、俺が羽織るローブを暴れさせる。しかし、動いているのは空気ではない。魔力だ。

「召喚工程、次のフェイズに移行！」

魔力値最大……英霊の座への接続完了！」

ここから、英霊に呼びかける詠唱が始まる。

「告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

さつきまでつたない詠唱であったにも関わらず、段々とそれがスムーズになつてきているのは、彼が思い出してきているのか、それとも気分が乗ってきたからなのか。

おそらくは後者だろう。だって、あんなにも楽しそうに笑顔でいるんだから。

「誓いを此処に。」

周りに吹き荒れる魔力は一段と激しくなつていき、それと同時に召喚陣へと収縮されていく。

「我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。」

「英霊、選定。縁による召喚を実行！」

「みんな、最後だ！ 失敗しないよう集中して！」

普段はゆるい雰囲気であるロマニが、士気を上げみなを纏める声を出す。

それもそのはず。最後に失敗すればこれまでが水の泡だ。もう一度やり直さなければならぬ。

「座からの反応、検知！」

「英霊、来ます！」

ついに、彼の呼びかけに応える英霊が呼び寄せられるようだ。後は藤丸が最後の詠唱を紡ぐのみ。

「さあ、決めてくれよ……！」

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

全ての召喚工程が終了した。その直後、

「つ………！ これは………魔力が！」

光で何も見えないが、その先で行われようとしている事が、俺には分かる。

高次元の魂、英霊が召喚され、その体を周りの魔力で作られる。エーテルで編まれ、そして人体とは似て非なるもの。

人間であったはずなのに、人間を超えた者。それが今、ここに再現される。

「だれか………そこに………！」

眩しすぎる光が徐々に落ち着いていった時、藤丸が召喚陣の上に人がだつている事に気がつく。

はつきりとは見えないが、和服のような衣服で、背中になにやら長物を背負っているようだ。しかし、英霊特有の威厳というか……何かを成し得たという風には見えない。たとえそれがどれだけ立っているだけで、洗練された身のこなしだと感じてても、だ。

「サーヴァント、アサシン。」

そして、その光が完全に収まった時、人影は言葉を発する。その姿、それは過去の記憶を呼び起こす。

ああ、そいつは大剣豪の好敵手として名を残した……わけじゃない。名を借りた別人、ただある技を習得しただけの農民。

「佐々木小次郎。ここに参上つかまつた。」

俺の記憶、それと寸分変わらぬ姿で彼は呼ばれた。

佐々木小次郎と名乗った剣士は周りを見渡した後、藤丸の存在に気づいたや否や、彼の前まで歩き、そして

「いやはや、ここまで大勢の人に現れるとは思わなんだ。しかし、今問うべきはこれであろう。」

其方が拙者のマスターか？」

主人であるか、それを問う。

「え、え……ええつと……そう、なる、かな？」

ぎこちなく、まるでロボットダンスのような動きで頭をかいたり、そこら中に視線を移しまくる。

そして極め付けは、

「小次郎さん……だっけ？　……ここ、こりえからよりよひくおねがひましゅ！」

極限まで噛みまくった挨拶だ。

背筋をピンと張り声を出したは良いものの、これでは最初から面目丸潰れだ。俺の知ってる小次郎ならば、まあ、少なくとも即斬はしないと思うけど、それでも今後の関係がどうなることやら。ほら、相手も苦笑いしてるし。

さて、こんな緊張しちまった藤丸は、フォローでも入れておくか。

「失礼、ちよつと良いかなアサシン。」

佐々木小次郎と藤丸の間に割って入り、二人に見降ろされる。

背の高い小次郎がいるせいで、さらに俺の身長が際立ってしまっているのが少し悲しい。

「む……其方は？」

「俺の名前は古崖創太だ。今はお前を召喚したこいつの指導者をやっている。そんでもって、こいつは藤丸立香だ。」

名乗り忘れた彼の分まで自己紹介を行うと、申し訳なさそうにペコペコと何度も頭を下げながら、『す、すみません。まだ名乗ってませんでした。』と謝る。

「ちよつとこいつは訳あって色々と未熟でな。こういう儀式とか、緊張とかに慣れてないんだ。だから、少しサポートさせてもらおう。」

まずは、何故ここに呼ばれたか分かっているか？

「ふむ、拙者が呼ばれるなど特例の事態。しかも、聖杯戦争のためではなく、人理修復のために呼ばれたとなれば、余程のことであろう。」なるほど。大まかには理解しているのか。

「はい、そうなんです！」

と、ここで藤丸がまた大きな声を出す。

「このままだとみんなが、ここの人たちが……！」

だからお願いです！　どうか俺たちと一緒に戦ってください！

またさっきのように大きく頭を下げる。しかし、そこにはもうぎこちなさはない。

「あい、分かった。そもそも拙者はそれに応えたまで。其方は未だ未熟であるが、その純粋な志があるのなら、我が刀、マスターに預けよう。」

「あ、ありがとうございますー！」

これで、主従契約は結ばれた。

戦力としてはまあ、不足はしないだろう。彼は白兵戦であれば、あの騎士王と互角に持ちこめる技量がある。対人戦限定ならば、安心だろう。

……騎士王？

「あ、そういえば。」

「古崖さん？」

今の今まで忘れていたことがあった。超重要でなおかつ、超強力なアレを。

「どうしたんですか？ 急にスマホなんか取り出して。」

「まあ、ちよつとな。」

騎士王騎士王と散々記憶を思い起すような単語をだしておきながら、あいつの存在を完全に頭から抜け落ちていた。

「まさか、誰かに電話するつもりかい？ そんなことしたってここは秘境中の秘境だよ。そうでなくても外は人がいないのに誰かいるわけが……」

ロマニがフラグっぽい何かを言っているが関係ない。

俺はある場所へと電話をかけ、ツーコールの後、

「あ、もしもし？」

「うっそー!？」

相手方が電話に応じる。

「ああ、こっちは大丈夫だ。そっちは？ ……それは良かった。だったらこっちに来てくれないか？ 使い魔がいるはずだから、そいつが道案内してくれる。お前なら一日で来れるだろう……え、五日後？

なんでそんな……事情ねえ。妙な間が空いてるから、おそらくそっちに誰かもう一人いるのか？

まあ、いい。とにかく五日後だな。こっちに関しては話を通しておくから。じゃあな。」

伝えたい内容を伝えた後、通話を切る。これで援軍が来てくれるだろう。

「まさか、本当に繋がるなんて……」

「あんまり彼を常識で考えない方が良いわ。大方あの携帯に何か仕込んでるんじゃないかしら。」

オルガマリーの言う通り、オレの携帯には電波以外でも通話が可能な機能が付いている。とは言え、それで携帯料金を浮かせようなんてのは流石に小賢しいと思い、非常時以外はあまり使ってない。

「古崖さん、誰に電話したんですか？」

「さあな。後になってからのお楽しみだ。まあ、頼りになるのは確かだ。」

「えー……教えてくれたって良いじゃないですかー。」

「そんな顔を膨らませても教えないもんは教えない。いいから楽しみに待ってけ。」

と言うよりかは、俺の口からは言えないといった方が正しいか。何しろ本来なら隠すべき正体なのだから、本人から伝えた方が俺としては良いと思っっている。

さて、それよりも今後についてだ。小次郎が新たに仲間に加わったことから、それを考慮して訓練を行う事になる。レイシフトの予定は明後日。それまでにチームとして仕上げなければならない。

召喚から二十四時間後。

「マシユ！ 相手がどこを狙っているのかを読み！ 一昨日までとは、勝手が違う！」

「はい……！」

よく見て……考えて……！」

俺たちはまた模擬戦を行っていた。と言っても、マシユの相手は俺ではない。敵役は先日召喚されてきたアサシンこと、佐々木小次郎だ。

……いや、彼自身は佐々木小次郎ではない別の誰かなのだから、その名前で呼ぶのは違う気がする。が、まあいいだろう。

小次郎には敢えて本気で戦ってもらっている。マシユはまだまだ力不足ではあるが、少なくとも今までの訓練で後衛への攻撃を防ぎきれるぐらいには力をつけていると、見立てている。俺はマシユの後衛兼指導役ということで、マシユとそのマスターである藤丸にあれこれ厳しい指摘を出している。

「マシユ！ 首に気をつけるんだ！ 小次郎さんはそこを重点的に



狙ってる！」

「了解です、マスター！」

しかし、藤丸の方はだいぶ成長したようで、まだ頼りない部分もあるけど、一通りのサポートは出来ている。例えば……今の状況かな。

「甘い！」

「っ……………」

小次郎のほぼ同時だと思わせる神速の剣技に、マシユは反応が遅れる。左からの攻撃を防いだはずなのに、すぐさま右からの斬撃が来る。彼女にとっては目にも留まらぬ、という事だろうが実践だと死は免れない。

「古崖さん、攻撃準備を。」

「ああ。」

彼がいなければ、の話だが。

「魔術礼装、起動。行使魔術、選択……」

この四日間、彼が習得してきた司令塔としての技術<sup>スキル</sup>。その一部が発揮される。

「マシユ！ そのまま突っ込め！」

彼女にその言葉は通じたのかどうか、その返答も聞かず彼は手のひらから光弾を放ち、マシユに撃つ。

それは攻撃のものではなく、彼女の動きを補助する魔術だ。その証拠に、光弾が彼女に当たってもダメージや衝撃などはない。むしろ、彼女の体を包む光となっている。

「瞬間強化か……良い判断だ。」

それは礼装に編み込まれた魔術の三つのうちの一つ。名の通り一瞬ではあるが、身体能力を限界以上に引き上げる魔術で、そのお陰で対処できないはずの剣撃が彼女の盾に防がれる。どころか

「はああっ！」

一瞬にして、彼の攻撃直後にできた隙を突くまでにスピードが上がっている。

「ひよっこだと思案していたが、三日合わさればなんと……」

「本気で戦え言っただろ！ 何余裕かましてんだ！」

追い込まれたというのに、なぜか軽口を叩く小次郎さん。その様子について我を忘れて怒りのツツコミを入れてしまった。

「だが……まだまだよのう。」

しかし、彼は本当に軽口を叩けるまで余裕があった。

その身は一瞬にして翻し、彼女の攻撃を避ける。しかも、ただ避けただけではなく、互いの位置を入れ替えるかのように。それはまるで蝶のごとき流水の動き。

「ふっ……！」

それにとどまらず、物干し竿と呼ばれる刀で彼女を背中から斬りつける……！

「緊急回避！」

だが、それを藤丸は見逃さなかった。

マシユが完全な後手に回ってしまい、仕切り直しをせざるを得ない今、彼はそのためのも行動をとる。

体勢がとうあれ、状況がどうあれ、それは瞬間移動に近い速さで強制的に相手の攻撃を避ける……はずだった。

「ぎゃっ……！」

何がどうなったか、彼女は理解できていないだろう。

藤丸は確かに『緊急回避』をマシユに発動させ、そして彼女は強制的にその場から動かされた。

だが一瞬、一瞬ではあるが小次郎の刃先が三つにブレた。宝具の片鱗、彼が小次郎である所以の技、燕を斬ろうとして編み出した必殺の技。それが彼女の腕を、肉を斬った。骨には届かないだろうが、それでも戦闘に支障をきたしてしまう。

「詠唱破棄、魔弾、連続射出……！」

しかし、俺はあくまでも敵の隙を突くのみ。

藤丸とマシユ、二人が作り出した隙、敵にとって多少予想外であった状況から生まれる僅かな硬直に攻撃を入れる。

純粹かつ高密度の魔力の弾、それを瞬時に六発作り出し、撃ち出す。どれも貫通力は凄まじく、生半可な鎧ならば容易く撃ち抜く。例え高

ランクの対魔力でも防ぎきえることは難しいだろう。それこそ概念が作用するものでなければ。

「くっ……！」

けれども、紛いなりにも小次郎という男は英霊、人の身を越えた存在。しかも技量という点でおけばトップクラス。防ぐ以外に方法は様々にある。

一つ目。まずは重心を最小限にスライドし避ける。

二つ目。軸を上手く使い、体を回してまたもや避ける。

三つ目。回転の勢いを利用して刀を落とし、軌道をそらす。

そこまでは順調であった。いや、そこまでしか対処できなかった。残りの三つ、それはもう小次郎の懐へ入る直前まで迫っている。どうあっても攻撃が入る。普通ならばそうだ。

しかし、相手は普通ではない。人の身を越えし超人。例え三流であろうともその力を侮ってはならない。

「秘剣……」

だからこそ、その切り返しが多重次元屈折現象第二魔法に似た何かであつても

「燕返し。」

驚きはしない。

その刀は一つしかないはずなのに、三つの斬撃を放つ。俺自身は直接見たことはないが、構えも何もなしにいきなり出せるとは初耳だ。

何にせよ、小次郎はその技を使い、残りの魔弾を全て斬り伏せた。元は空を踊る燕を落とす技のはずだが、それを防御に応用されたか。こうなってしまうえば、俺が追撃をしても彼はことごとく対処してしまう。ほかの何か、不意をつける者でなければその身には届かない。

そう、他の者でなければ。

「やあっ！」

『燕返し』の直後、小次郎も予想外で対処不可能な七撃目が背後から迫る。彼自身もそれは察知している。しかし、目の前の魔弾に気をとら

れすぎて、気付いた時にはもう遅い。

その七撃目はマシユによるものだ。右腕にあつた傷はすでに治つており、盾を振るうまでに回復している。

『応急処置』。藤丸の礼装に編み込まれている三つ目の魔術。彼はそれを使いマシユを回復させた。敵が俺の攻撃に気を取られていた隙に彼女の元へと駆けつけて。

「っ……っ！」

完璧なまでの攻撃。これが剣道であれば、審判が声高々に一本と判定しただろう。まあ、そもそもこれは試合ではないし、審判もない。それにそんな攻撃を当ててしまえばいくら英霊だろうと座に還つてしまう。

だから、

「そこまで。」

俺はマシユの攻撃を受け止める。

「勝負あつた。だから、模擬戦は俺らの勝ちだ。」

小次郎もいいな?」

「あいや、まいったまいった。駆け出しと油断していれば、中々に戦えるではないか。」

そう答える彼の表情にはまだまだ余裕がありそうで、しかし先の闘いが全力ではなかったようにも見えない。これは楽しんでいるのか。「……はあーっ。考えても仕方ないか。」

それよりも藤丸、マシユ。これまでよく頑張つたな。最初と比べるまでもなく、素晴らしい成長っぷりを見せてくれたな。」

「えっへへ！　ありがとうございますー！」

「あ、ありがとうございます。」

俺が褒めると前者は素直に、後者は少し照れながらも喜ぶ。

これで、特異点でも彼らは十分な戦力になる。

「よし、そんじゃあ今日はここまでだ。明日はいよいよレイシフトの日だからな。午後からはゆっくりと休むように！　解散ー！」

今日一日中特訓をして明日に疲れを残してしまえば、どんなミスが起こるか分かつたもんじゃない。本番の前日は疲れを取る。それに

限る。

しかし、解散とは言ったものの、誰一人として部屋を出る者はおらず、むしろ今から皆と一緒に、という雰囲気だ。

「じゃあ創太さん！ また昼食作ってくださいよ！」

「ええー、またか。そろそろ似たようなもんばっかで飽きたんじゃないか？」

以前、彼らに食事を振舞ってから俺はどうやら料理長となつてしまったようで、ちよくちよく食堂に来る職員らにも飯を出していたら好評価。

さりとて、俺は本業ではないので、レパトリー自体は少ない。そろそろ他人に出せる料理はなくなってきたしなあ。

「藤丸、お前は料理作れないのか？」

「……目玉焼きは得意です。」

「つまり、家庭科の授業以外では経験なしか。」

「い、言わないでくださいよ！」

これは任せられないな。

「小次郎は……」

「拙者、食事は自分で用意してはいたが、味は期待せぬ方が良好だろう。」

だよな。あまりとやかく言うつもりではないが、彼は元々農民らしいし、料理の腕はそこまでだろう。

「じゃあマシユは？」

「私ですか？」

……すみません。私は先輩よりも経験がありません。皆無なのです。」

まあそうだろう。マシユは割と過保護に育てられたみたいだし、食事はこの人達が用意してくれてるから、必要とはしなかったのだろう。過保護というのは少し違うが。

「そうか。なら、結局俺がやることになる……」

「みんな、お疲れ。トレーニングはどうやら終わったみたいだね。」

観念したかのように、料理を作ろうと諦めようとしたところ、ふわ

ふわした声が聞こえてくる。医者のような格好と、脱力した雰囲気を持ち合わせた彼、ロマニが手を振りながら歩いていった。

「こんにちはドクター！」

「こんにちは、ドクター。」

「うん、こんにちは。レイシフト前日だっていうのにまだ訓練してるのかい？」

「まあな、でも今日はここまでだ。流星に休ませる時間も作らなきゃいけないしな。」

「ならちようど良かった。昼食はまだだね？ 食堂でご飯ができてるよ。」

以前の敬語とは変わって、フランクな感じで話してくる。少しは打ち解けてくれたのだろうか。

「そりゃあ助かる。そろそろ何を料理したらいいかが尽きてきたからな。」

「それに関しては創太さんに頼りきりになってごめん。けど、今日はちゃんとこつちで用意したよ。」

「おう、ありがとな。」

「ええー、今日は古崖さんの料理じゃないのか……」

俺としてはありがたいと思った矢先、藤丸はあからさまに残念そうな顔をする。

「そこまで落ち込むという事は、創太殿の作る飯は相当な美味なのか？」

「いやあ、そうじゃないんですけど……なんて言ったら良いか。」

「創太さんの味は、何とか暖かいんです。確かに美味しいのではありませんが……その、優しく、何かを思い起こさせるような……」

マシユは藤丸のフォローをしようとしたつもりなのだろうが、途中で言葉が詰まってしまふ。その表現できない何かは思い出せない訳ではなく、まるで経験した事がないようだった。

けれどもその直後、彼が納得したかのように思い出す。

「そうー、そうだよマシユー！ 古崖さんの料理は母さんが作ってくれるような優しく暖かい味なんだよー！」

「田舎の味、というやつか。某もまっこと、口にしてみたくなかった。」  
三人にそう言ってくれて嬉しいが、俺が作る味は俺の物ではない。  
別の……そう、アイツの味だ。俺はそれを真似ただけに過ぎない。  
だ。こんな危機的な状況で気持ちだけでも落ち着かせようと、その味  
を再現したまでだ。

本当ならもう少し大雑把な、味の濃い料理が俺の作る料理だから。

「僕も機会があれば創太さんの料理を食べてみたいよ。」

「けど、今日はカルデアの地元料理なんだろう？俺としてはそつちを  
食べたい。だから、早く食堂に向かおうぜ。」

誰かの腹が鳴る前にさっさと行こう。

そうやって俺たちは食堂に移動する。明日はレイシフト、世界を救  
うための本当の第一歩。そのために今からはゆつくりと休まなけれ  
ばならない。

## 第一章・旗を掲げよ 開始・強襲

最後のトレーニングから一日経ち、現在は朝の九時頃。

レイシフトのメンバーである俺、藤丸、マシユ、そして小次郎は管制室へと集合していた。他にも司令塔であるオルガマリーやドクター、その他サポートしてくれる職員達もいる。しかし、管制室を見てみると、まだ爆破事件の爪痕が残っている。壊れているコフィンもあるし、完全復旧は遠そうだ。

今日これから行われるのは第一特異点、フランスの百年戦争へのレイシフト。世界を救うための第一歩が今、始まろうとしている。

緊張の糸が部屋中に張り巡らされ、その雰囲気慣れてないのか、藤丸はカチカチに固まっている。

「おい大丈夫か?」

「ぜ、ぜぜぜ、全然へへへ平気、じゃ、なななないです。」

「先輩、落ち着いてください。こんな時は深呼吸です。私の掛け声に合わせて一緒にやりましょう。」

「せーの、ひっ、ひっ」

「同じネタをやるな。」

「フオフオウ。」

止められたマシユは『はて?』と、不思議そうな顔で首を傾げてくる。おい、まさかその呼吸の仕方が普通だと思っただろうな?

誰だ、こんな純粋な子に変な知識を吹き込んだのは!

「マスター殿、その可憐な少女の気が立っているが無視しても構わぬのか?」

「ああ、大丈夫ですよ。あの人は輪に入れなくて寂しいだけですから。」

「そ、そんな事思っただけよ!」

オルガマリーの話になった途端、先ほどまでの緊急はどこか行ったかのように弄り出す。こんな状況でも弄られるのは変わらないのか。



「ふむ、いわゆるつんでれというやつか。素直に言葉を伝えられないとはなんとも可愛らしいではないか。」

「どこからそんな知識を仕入れてんだ？」

「ほらほら、皆んな静かにして。所長の話が終わらないとレイシフトにも行けないんだから。」

ドクターの言葉で全員しようがないと行った感じで、一斉に静かになりオルガマリーに視線を集める。

「コ、コホン。レイシフトメンバー諸君、今回の特異点への目的を改めて説明します。」

まず、最優先事項は聖杯の回収です。調査の結果、冬木と同じく特異点は聖杯によって成り立っていると判明しました。さらに聖杯は願望機でありながら多大な魔力も溜め込んでおり、今後の戦力強化にもなり得ます。

その為、破壊をしない事はもちろん、出来るだけその力を使わないように回収、および帰還してください。」

冬木での事を考えているのか、俺を睨みながらも説明をしていく。しかし、あの時はオルガマリーを救うために仕方なくやった事だし、そんな怒ることでもないと思う。

「次に、レイシフトをしてからの行動ですが、拠点の確保です。霊脈を探し確保できれば、その霊脈を使ってこちらから物資を補給できます。なので、最初にそれを行うように。」

拠点を構えるのは大事なことだ。確実に休める場所があるっていうのは精神の負担が軽くなるし、なによりも疲れを癒せる。

「そこからは現地調査です。聖杯があるということはそのに必ず歪みができるはずです。百年戦争での歪みを見つけて、それを解決すれば自ずと聖杯へと辿り着くはずでしょう。」

これで目的とそれに至るまでの行動ははつきりとした。しかし、「これはあくまでも人理修復のために特異点を元に戻す作業です。決して目的以外の事はしないように。」

彼女ははつきりと、誰かが困っていても、死にそうになっても助けるなど言った。

確かにその考えは正しいだろう。何も無いメリットに多大なリスクを負う必要はない。失敗など許されないのに、リスクを増やしてられない。死んだらそこで終わり。だから、彼女はそう言うのだろう。「……けど、目的を達成する助けになるなら、余計な事はしてもいいんですよね?」

それでも、藤丸はその意見に反抗するかのように尋ねる。

「貴方にその判断ができるの? いや、そもそもそんな余計な事をする余力が貴方にはあるの?」

「つ……そ、それは」

「なあ、藤丸。」

諦め切れないようだが、それに待ったをかける。

「その心を持つているのは良い事だ。けど、我慢する事っていうのも必要になってくる。だからもしその時が来た時、お前は選択しなきゃならない。」

「だから、な?」

「……分かり、ました。」

理解してくれたものの、その顔は拗ねた子供そのものだ。けど、納得しろとは言わない。俺だって何度もその選択をしてきたのだから。「分かってくれたよね。」

これで作戦の確認を終わります。レイシフトメンバーは所定の位置で準備するように。

「……それでは、今から人理を掛けた戦争を開始します!」

その号令とともに周りが騒がしくなる。レイシフトの準備を始めるためだろう。それとともに俺たちもカルデアスの前に設置されたコフィンへとそれぞれ向かう。

「……一人、不機嫌な顔だが。」

「お、コフィンの中はクツションになってるみたいだな。そりやそうか、硬い床で寝るとか居心地悪いもんな。」

そんな事を尻目に、わざとらしく気にしていないようにコフィンの感想を言う。

前は緊急だったから、コフィン無しでレイシフトしたけど、これな

ら、わざわざ自分の魔力を消費する事はなくなるな。

「と、その前に。」

そういえばだが所長たちに伝え損ねた事があったな。

「オルガマリー、ちよつといいか？」

「レイシフト直前に何の用？」

「伝え忘れた事があったな、すぐ済むからそんな怖い顔するな。

でだ、こいつなんだが……」

羽織っているローブの内ポケットからある写真をオルガマリーに渡す。

「これは？」

「ある友人だ。ここにくると思うからそんなときは通して、ついでにレイシフトできるようにしてやってくれ。」

「まさか、前に連絡をしていた……？」

「ああ。頼まれてくれるよな？」

「……貴方が言う程ですから信じてよい人物でしょうね。分かったわ。なるべく早く手配するわ。」

「ありがとな。」

手をヒラヒラと振りながら、再びコフィンへと向かう。

「全員コフィンに入りました。」

「バイタルは？」

「身体、精神ともに異常ありません！」

「よし、シバを起動してくれ！」

とうとう、フランスへと赴く時が来た。

彼女が生きた時代、生きた場所。そう思うだけで心臓の鼓動が早くなる。

「全コフィン、オールグリーン。レイシフト成功率九十九点九八パーセント！」

「行くよ、レイシフト！」

その瞬間、意識が身体を置いていく。前にも感じたこれは少し違和感を感じる。

しかし、俺の感情も御構い無しにレイシフトされる。向かうは彼女

がいるはずのフランスへ……

「……」

「つ、ついたのか?」

レイシフトが完了した直後、藤丸はあまりにもすんなり行き過ぎた事に違和感を覚え、つい疑問を口にしてしまう。前回のレイシフトではドタバタして流れるように冬木へとレイシフトされたらしいので、何かを言う余裕すらなかったのだろう。

しかし、今回は準備万端で余裕のあるレイシフトをしたからか、初めて感覚に意識を向ける事ができていた。

「はい。無事つきましたよ、先輩。」

そう声をかけたのはマシユだ。彼女は既に盾を持ち、戦闘用の霊衣に着替えている。もちろん俺と小次郎もいる。

「マシユ、創太さん、小次郎さん。」

「ふむ、ここがフランスとやらか。日本とはまた違った自然の豊かさがあるな。」

「そうだな。あつちの自然は山ばかりだし。」

「フォウ、フォウ!」

「フォ、フォウさん!」

しかし、突然どこから飛び出したやら。藤丸の顔面にフォウが飛びつく。

「うわっ! ちょ、ちよっと!」

その勢いのまま、藤丸はもふもふに押されて倒れてしまう。

「だ、大丈夫ですか! 先輩!」

「いてて……大丈夫……だと思う。」

顔にへばりついた白いリスのようなフォウをつまみ上げながらも起き上がる。

「しっかし、いつの間にフォウは来たんだ?」

「おそらくは先輩か私、もしくは創太さんのどれかのコフィンに紛れ込んでいたのでしょう。」

「へえ。もしかしたら背の小さい創太さんのなら隙間があるの空いてそうだし、ない話じゃあないかな?」

「そうだとしたら、本当にいつの間に潜り込んだ？ コフィンの中は一応確認していた筈なんだが……」

謎が謎を呼び、何故という単語が終わらない。この不思議な生物は一体何者なんだ？

「まあ、ひとまずは置いておくか。」

「はい。おそらくは特異点から帰る時は一緒でしょうから、みなさんが無事に帰れば、フォウさんも一緒に帰れるでしょう。」

「ならフォウが帰れるように、この特異点を無事に解決しましょう！」

「ああ。さて、カルデアからの通信が来る筈なんだが、少し遅いな。」

向こうで何かあったのだろうか。不安に思ってしまうが仕方ない。とりあえず、周りを見てみよう。そう思っ、意識を周りに広げることが……

「……小次郎、感想は？」

「人や生き物、生物といった類がおらぬな。あそこに黒い煙が上っているのも気になる。」

大方、俺と同じか。

周りは緑豊かな草原だ。しかし、生物らしき者は見当たらない。さらには匂いもすこし気になる。まるで、何かを焼いたような匂いがする。

「ふ、古崖さん？」

「藤丸、マシユ。気を抜くなよ。もしかしたら、いきなり強敵との戦闘になるかも知れない。」

「それはなんで……」

「あー、映像はひとまず大丈夫だね。」

皆んな、聞こえてる？」

藤丸が疑問を言いきる前に、タイミング悪く通信が入る。どうやらホログラム式のように、ドクターの上半身が目の前に立体となって現れた。

「ロマニか。ああ、聞こえてる。」

「全員いるね？」

「はい！ いますよー！」

「なら、所長からの指示があるから代わるね。」

そういうと一旦映像は消え、再び現れる。今度はオルガマリーを映していた。

「全員いるようね。なら、早速指示を出します。」

まず、そこから東に歩くと霊脈があります。その間には街があるはずなので、まずはそこへ向かうこと。および、街の人たちから情報を集めてください。」

「了解。」

「了解です。」

「……分かりました。」

皆返事をするものの、藤丸だけは何処か不機嫌だった。

当然だろう。レイシフト前にあれだけ自身の考えを否定されたんだ。しかも、その考えが正しいはずなのに。その相手であるオルガマリーには少し嫌悪を感じるのだろう。

それでも、今は前へと進まなければならぬ。どれだけギクシヤクしていようと、そんな暇はないのだから。

まあそれでも、いざという時にそれが悪影響なるかもしれないから、何処かのタイミングでフォローをしよう。

「よし、着いたぞ。」

と、考えていると早速第一の街へと辿り着いた。

「なら、誰でもいいから接触を図ってちょうだい。」

「ですが……」

しかし、そこには問題があった。

「どうかしましたか、マシユ?」

「すみません所長、それが……」

「街が崩壊している。」

目の前に広がるのは街であったであろう残骸だ。焼け焦げた跡がある瓦礫や、穴が空きまくっている城壁。そして……多くの死体があった。

「ど、どういうことよ!?!」

「言った筈だ。ここはまるで戦場の跡地のように全てが崩れ去ってい

る。おそらく、生存者は……いない。」

チツ、悪い予感っていうのはいつも当たってしまう。しかも、俺が一番見たくない光景を目の当たりにしちまうのは、何かの因果を感じる。

「……所長、確かに彼のいう通りその街に生存反応はありません。」

「おかしいわ……この時期は休戦のはずなのに……まさか、イングランド側が？ いやでも……」

「え？ マシユ、所長が言ってる休戦とかってどういう意味？ 戦争だから、戦っていた跡があつたのは不思議じゃないよね？」

オルガマリーが通信越しに小声で言っている内容が気になったのかマシユに聞く。

「先輩、百年戦争というのは百年間ずっと戦っていたわけではなく、合間に休戦という物がありました。一四三一年は本来、休戦中であつたはずなので、所長が疑問を抱いているのはそこに関してだと思いません。」

「へえ、そうなんだ。マシユって物知りなんだね！」

「い、いえ……そんなことない、と思います。」

マシユは最後に照れながらも答える。

しかし、俺はそれ尻目に瓦礫の焼け焦げた跡を調べる。

「創太さん、どうかしましたか？」

「魔力だ。」

「え？」

「魔力の残滓が残っている。これは魔術師の仕業か……もしくはサーヴァントか、だ。」

これは本来ありえないことだ。今のフランスに魔術を使えるやつなんてのは聞いた事がないし、だとすれば特異点となる歪みから発生した結果だろう。もしくは、この時代で錬金術に手を染めたあいつのせいか。

ともかく、謎がまた増えたということだ。

「そ、そんな事までわかるのかい？」

「まあな。」

「え？ ドクター、これって魔術師なら誰でも分かるんじゃないんですか？」

「いやいや！ そんなことまでは分からないよ！ 残滓と言っても僅かだから、普通は判断がつかないんだ。」

「なら、なんで創太さんはできるんですか？」

「俺は力を専門にしてるからな。魔力もその一種で、そういう判断もできるってことだ。」

細かく説明していると長くなりそうなので、あえて簡潔に説明をする。

しかし、街が崩壊しているとなると他のところもやられている可能性もある。さつき黒い煙も見えたし、おそらくはこの街も同じこと同じ状態だろう。このまましらみ潰しに近くの街を転々としても人に会えるかどうか。

「……待って、近くに生体反応がある！ そこから北に行つたところだ。」

「そりゃあ朗報だな。早速そこに行つてみよう。情報つていうのは人から聞く方がよっぽど効率が良い。」

「よろしく頼むよ。」

と言うわけで、ドクターからの情報を元に北へと移動する俺たち。

途中で殺気立った狼やら猪やらを倒しながらも先へと進む。

「な、なんで襲われてばかりなんですか……。」

「何かしら異常があったからだろう。おそらくあいつらは防衛本能から興奮してんだ。縄張りから追い出されたとか、同族が殺されたとか、そういう理由からな。」

「となれば、ますます雲行きがあやしい。流石に人間がそれをしていくわけがなからう。」

「ああ、何はともあれ情報が欲しい……と、そろそろ見えてきたな。」

俺たちの向かう先、そこには先程とは違い規模は小さいもの、しっかりとした城壁に囲まれた街が見える。

襲撃の跡もなさそうだし、人がいると判断して良さそうだ。

「にしても、やっぱり見覚えがあるな。あそこの木の並びとか、川の位



置とか……」

「古崖さん？」

「……あ、いやなんでもない。」

と、どうやら無意識に喋っていたようだ。

俺はこの時代のこの景色を見たことがない。けれども、どうも既視感がある。何がどこにあるのかが分かる。土地勘に関しては完全に頭が理解していた。

やはり、この体が覚えているのだろう。

「着いたようね。とりあえず、その門番に接触、及び街の中に通してくれるように説得しなさい。」

「りよーかい。」

「で、誰が行くんですか？」

そう藤丸が言っつて、皆の顔を見渡してみる。しかし、それに快く反応する者はおらず、互いに目を合わせる。

「私、フランス語は少ししか……」

「拙者は聖杯からの知識がなければ、日本の言葉しか話せぬ身よ。」

「フォウ。」

「……た、頼むマシユ！」

おい、俺まだ何も言っつてないのに無視されたぞ。

「わ、分かりました。マシユ・キリエライト、行き……」

「そんなに力まなくても大丈夫よ。レイシフトした際に貴方達の身に翻訳機能がついている筈だから。」

「それを早く言っつてくださいよ！」

……まあ、いいか。どうやら、俺の出番はなさそうだし。

「じゃ、じゃあ俺から行きますよ。」

そう言っつて藤丸は門番へと近づき接触を試みる。どうやら、門番は二人いるようだ。

「ハイイ、エクスキューズミー？ ニホンゴ、ワカリマス？」

駄目だ！ 藤丸は混乱している！

「馬鹿か！ 翻訳できてるって言っつてんのに何で英語っぽくしてんだよ！ とうか相手はフランス人だぞ！」

「相手が外国人だどついついやっちゃうんですよ！　そもそもここイギリスの近くなんだから英語だつて通じるはずですよ！」

やべえ。混乱しすぎで何言ってるのかよくわかんねえ。いや分かるけども分からん。

「双方待たれよ。口喧嘩は良いが、相手方の様子が変だ。」

小次郎に言われて、門番に目を向けると、その藤丸の発した言葉に對して、何が悪かったのやら相手は警戒をしだす

「あ、あれ？　通じてなかった？」

「おそらく。相手の言葉も聞き取れませんね。」

門番の二人は何かを言い合っているようだが、マシユの言う通り少なくとも日本語には聞こえない。

「オルガマリー？」

「わ、私だつて知らないわよ！　ロマニ、翻訳機能は！」

「……え？　翻訳機能？」

あ、このパターンは。

「おいこらロマニ！」

「ご、ごめん！　すぐにプログラムを起動させるよ！」

「そのすぐに、でこの戦闘を回避できるのか？」

「時間的に無理！」

「だらうな！」

しつかりしとけよ！　こんなことで無駄に時間食ってる暇ないんだからさ！

「ど、どうするんですか！」

「マシユ！　とにかく迎撃するしかない！　峰打ちで……」

こうなった以上、戦闘は免れないと確信したのか迅速に指示を出す藤丸。けれども、俺は別の行動をとる。

「まあ、一旦落ち着け。」

今度は俺が門番の二人に話しかける。ここで、貿易で培った話術が活きるとはな。

「古崖さん？　……が、フランス語ペラペラ!?」

「いいえ。確かにあれはフランス語のように聞こえますが……なんと

「いか少し違います。」

それはそうだろう。俺の話している言葉はフランス語であってフランス語ではない。少し別の言葉なのだから。

「彼は貿易商でその生業から様々な国を巡っているから、フランス語自体を喋れる事はおかしくはないはずよ。」

「それは……そうですが。」

「おい、話は終わったぞ。何とか中には入れてもらえるようにはした。」

「ほ、本当ですか?」

「ああ。」

「ちなみに何と言って通してもらえたのでしょうか。」

「日の本から遣わされた者だとか、何とか言っつてな。王様に会いに行くためにここまで来たけど、休める場所が欲しい、とかでつち上げた。」

今の日本は確か室町ぐらいで外への交流に割く力はないはず。だが、逆に言えばどの国にもあまり日本の事情を知らないから、俺の言葉を不自然だと思う奴はいないだろう。

「……あと、少しだけだが情報を掴んだ。」

「それは?」

オルガマリーにその内容を聞かれ、少しの沈黙を作ってしまう。

これは俺にとって衝撃だった。だからこそ、話すのにも戸惑ってしまう。しかし、いつまでも黙っているのは動揺を悟られてしまう。

俺は決心して話を続ける。

「ジャンヌ・ダルクが……魔女になって復活したらしい……と。」

「ええ!?!」

「ま、魔女!?!」

その情報に皆が驚く。

「ちよつと待ってくださいよ! ジャンヌ・ダルクって、あのジャンヌ・ダルクですよね? 聖女って呼ばれてる……」

「ええ。確かにジャンヌ・ダルクは聖女です。しかし、処刑された時は……」

魔女、その言葉を出す事にマシユはためらった。

「まあ、魔女と責められ立てて処刑されたのは間違いない。彼女がそうでなかったとしても。」

特異点というぐらだから、ジャンヌ・ダルクが活躍している最中に何かあったと思っていたが、彼女が死んだ後に何かあったみたいだな。

「もし、それに特異点となる理由があるとしたら、聖杯を使って生き延び、今度は自身が魔女となって復讐しよう。というのが一番それらしい。」

あつて欲しくないことではあるが、可能性としては一番高い。もしくは……

「私もそれに近い考えだけど、今はまだ予測でしかないわ。今後はそれについて調べる事が主な目的よ。」

立香、マシユ、創太。他の住人にも話を聞きなさい。」

「分かりました！」

「了解です。」

名前を呼ばれた内の二人は命令に応えるものの、俺だけはそれに反応を示さなかった。

「ちよつと、創太？ 話を聞いてましたか？」

それよりももっと重要で、かつ危険な事に意識を向けていたからだ。

「……聞こえる。」

「ならば、街の中に入って……」

「違う、何が遠くから聞こえる。」

重い羽音、複数で一つ一つの音の間隔は長い。少なくともただの鳥ではない。それよりも大きい何か。しかもこちらに向かってきている。

「お前ら、戦闘準備だ。」

「え？ 敵なんてどこにいるんですか？」

藤丸とマシユは戸惑い、小次郎のみが警戒態勢に入る。

「……あ！ 生体反応、複数だ！ しかも凄い速さで迫ってきてる！」

「創太さんのいう通り戦闘準備を！」

「わ、分かりました！」

近づいてくる敵に段々と周りが騒がしくなっていく。

「敵襲！・ 敵襲だ！」

城壁の上から警告の声が出される。おそらくは偵察兵か何かだろう。その声によってさらに街中までもが騒ぐ。

「藤丸、マシユ。撃退もそうだが、街も守れよ。」

「それくらいは言われなくてもわかってますよ！」

余計なお節介だったか。まあ、それを聞けただけで良しとするか。遠くから聞こえていた羽音は近づき、それとともに遠くの影が大きくなっていく。あの形は……

「ド、ドラゴン……？ ドラゴンだ！」

若干一名、キラキラ目を輝かせて興奮気味だが、それは間違いだ。

「いいえ！ あれはワイバーンです！ ドラゴンの亜種ですが、その強さは侮れません！」

「ほう、ついには燕を超えて竜を斬ることになるか。」

小次郎、お前の技は多分燕返しじゃなくて竜返しとかそこら辺に変えた方が良いと思う。三方向同時ってそれ燕に出す技じゃねえし。じゃなくて、

「あいつら、城壁を上から超えるつもりか！」

「これじゃあ攻撃が届かない！」

接近してきたワイバーンは俺たちのことなど御構い無しに、頭上を飛び越そうとする。

俺たちは眼中にないって事だろうが、そうはいかない。

「風よ、叩き落とせ！」

風を使い、地面に叩きつけるほどの強い下降気流を発生させ、ワイバーン達を引きずり落とす。これで街に行かせることは阻止できたし、こっちの攻撃も届く！

「数は六体！ 少し多いがやるぞ！」

「はい！ マシユ、小次郎さん、行ってくれ！」

「了解！」

「承知！」

掛け声とともに、マシユ、小次郎、俺の三人はまとまってワイバーン達と戦う。個々としてではなく集団として戦うことで、こちらの数が少なかりょうと、一体だけフリーに動ける、という事態を避ける。

「Gyaoooo!!」

しかし、そのワイバーン達の行動は驚愕だった。相手は知恵あるドラゴンの亜種とはいえ、野生の本能で生きている。例えどれだけの知力があるろうと、それは個体としての物だ。断じて協力するようなものではない。

「なっ!!」

その予想を裏切り、敵はまるで他を生かすかのような動きを取る。

俺たちの作戦に対して、ワイバーン達は三体を守るようにして他の三体がそれを取り囲む。そしてその一体はすぐさま飛び上ろうとしていた。

「一体、上昇しています！　ですが近づけません！　このままではまた街に……！」

「他の三体が邪魔をしてくるなんて……なんでこんなに統率が取れているのよ！」

「このままでは……！」

「マシユ、小次郎！　その三体に攻撃！　あとの一体はなんとかする！」

その指示通り二人は敵の前衛に攻撃を仕掛ける。マシユは盾で防御しながら、小次郎は刀で受け流しながらも比較的柔らかい部分を斬る。

「大地よ！」

そして俺は、以前にも使った魔術を発動させる。土を腕に変えて、自由自在に操る魔術。

「掴め！」

それを使い、飛んでいくワイバーンの真下からまるで生えてくるように土の腕を生成し、足を掴む。だけではなく、

「もう一回、引き摺り下ろす！」

今度は腕を大地に戻して、掴んだワイバーンを地に固定させる。これでもう飛ぶことはできないだろう。

「流石です、古崖さん！」

「まだまだ！ 残りの三体はまだ動ける！ 余裕を作らせたらすぐ飛んでいくぞ！」

俺が捕縛したのは三体だ。残りの三体はまだ自由に飛行でき、さっきのように協力してきたら厄介だ。とは言え、三体三ならそういう状況はそうありえないはずだ。

「っ……い！ 攻撃が重い……ですが！」

人とは比べ物にならないワイバーンの攻撃。尻尾や爪を振り回し、さらには翼までも攻撃に使う。しかし、それでも一つ一つは単調で、異常な先程のような団体としての動きだけだ。

だからこそ、マシユはその全てを受け止める。最前線に張り付き、一歩も下がることはない。

「小次郎さん、一体ずつ頼みます！」

「承知した。」

そのマシユを盾に、藤丸は小次郎への指示を出す。

「小次郎！ 援護するから左から倒せ！」

俺もそれに負けじと、標的を示す。小次郎も俺の言った標的に攻撃をし、そして攻撃を躲す。

彼の持つ技術は対人のソレではあるが、ワイバーン相手でも真つ向勝負ができていく。攻撃を右へ左へと受け流し、足や翼と言った移動能力のある部位に損傷を与えていく。俺もそれに合わせて魔弾を打ち込んだり、泥で動きを鈍らせていく。

そして、相手の動きが止まったところで首を狙う！

これならば……！

「なっ……い！」

だが、またもやワイバーンは予想外の動きをする。いや、すでに……していた。

今度は小次郎のトドメの一撃を避けた。それだけでは予想外でもない。移動能力が低下していようと、力を振り絞った精神論

で避けた、なんてのはざらにある。

問題はその後。彼の眼前には火球が迫っていた。後ろのワイバーン、俺が捕縛しておいた奴が撃っていた物だ。

偶然ではない。そうなるように誘い込まれていたんだ。こちらが各個撃破をしようとした時に、狙われた一体があえて攻撃を受けて誘導し、後ろのやつと小次郎が一直線になるようにしてタイミングを見計らい、先のようになった。

これはあまりにも異常だ。自己犠牲を厭わない軍隊のような統率力、そしてそれをやろうとするワイバーンの知恵と精神力。特異点というのとはこんな強敵がそこら中にいるのか？

「……なんて、考えてる場合じゃねえな！ 壁よ！」

その火球を防ぐために、俺は魔力の壁を小次郎の前に作る。火球がそれにぶつかる瞬間、激しく爆発し、モロに喰らえば火傷どころか骨まで焦がされそうな一撃であった。

しかし、奴らの一連の行動はそれだけでは終わらない。

「まっず……！」

「っ……仲間を助太刀に行ったか！」

小次郎に狙われていたワイバーンが一瞬の隙で退き、足の爪で後ろの三体の内、一体の仲間にとわりついた地面を抉り、脱出させやがった！

「小次郎さん！ 詰めて！」

「心得た……っ！」

小次郎は藤丸の指示に従うが、退いていたワイバーンに道を塞がれる。

ああクソ！ またさつきみたいに街へ行こうとしてやがる！

「なら俺が……っ！」

彼では無理だと判断し、俺が魔術でまた引き摺り下ろそうとするが、別のワイバーンが噛み付こうとして、それを杖で防ぐ。

「すみません！ 一体取り残してしまいました……！」

マシユは謝るが、そもそも竜種であるワイバーンを二体相手に引きつける事自体が難問だ。彼女の責任ではない。けれど……！



「こいつ……！ 何やっても張り付いてきやがる！」

後退しながら魔術で距離を開けようとしても、何が何でもついてくる。炎だろうと氷だろうと、何を放とうと自分の身なんて御構い無しだ。壁を作ろうにも即興物は一発ぐらいしか耐えられない。

基本的に俺の魔術は詠唱を必要としないが、それでもまともな魔術はタメが必要だっていうのに！ このままでは、街が危ない！

小次郎も、マシユも目の前のワイバーンでやっつとだ。俺も似たような状況で、唯一動けるのは藤丸と他兵士たちだが……

「ま、まずい！ どうしたら、どうしたら良いんだ！」

「落ち着きなさいよ！ あんた令呪があるでしょう！」

「レイジユってなんですか!？」

初めてのピンチで動揺しすぎている！ 兵士たちはそもそも歯が立たない！ 実際に動けない二体に攻撃をしてるが、通じていない！ どうすればどうすれば……！

ヤバイ！ ワイバーンが城壁を超える直前じゃねえか！ 何か！

何か何か何か何か！

その時、城壁を駆け上がっていく少女の姿が見えた。

幻影か何かを見たのだと一瞬思ったが、その勘違いは一瞬にして打ち碎かれる。何故ならその少女が手に持った旗の穂先で、城壁上のワイバーンを貫いたのだから。

「彼女は……」

「サ、サーヴァント反応あり！ 遅れたけど、彼女からサーヴァント反応がある！ ……けど、少し弱い？」

「つまり、彼女はサーヴァント……?？」

ロマニの通信で、彼女がこの時代の人間ではないことが分かる。誰に召喚され、そしてどんな目的を持つ者なのか。それは分からない。

しかし、彼女は街を守った。であれば、少なくとも俺達の敵ではないだろう。

「同志よー」

たった一声、それはここにいる敵味方問わず、全員の視線を集める。「あ、貴方は——いやお前は！」

「今はいがみ合う時ではありません！　まずは目の前にいる敵を、共に撃ち払うべきです！」

その言葉一つ一つに、自身の内から何かが込み上げる力なのか、それとも精神的な何かなのか。それはこの場にいる全員が感じていることだろう。

しかし、ただ唯一俺だけは、その声に、その姿に、涙を流してしま

う。「さあ、共にこの街を守り抜きましょう！」

「ぞ、そうだ！　皆んな！　やるぞ！」

敵であるかのような視線を送っていた兵士たちはいつの間にか彼女の言葉に鼓舞され、一緒に戦う事を決意し、ワイバーンを攻撃する。

しかも、先ほどとは違い全く通じなかったはずの剣の刃が、弓から放たれる矢が、竜の鱗を打ち破っていく。

「これは一体……」

やがて、状況は逆転していき、ワイバーンがもう二体ほど倒されていくと、残された三体は完全に撤退を始めていった。

「逃すな！」

「追うんだ！」

追撃をしようとするものの、ワイバーンは口から放つ火球を地面に叩きつけ土煙を巻き上げて目をくらます。それが晴れた時にはもう逃げていった後だった。

「よ、良かった……。助かった……。」

安堵の溜息が藤丸の口から一際大きく漏れる。心情としては俺も藤丸と同じだ。あそこで手助けがなかったら、街はどうなっていたことやら。

「お疲れ様でした。お怪我などはありませんか？」

と、どうやら今回のヒーローから話しかけてきたようだ。

青を基調とした僧女と戦士を彷彿させるような鎧と服を着た女性、しかも旗を持っているとなれば真名は自ずと分かる。

……そうでなくとも、顔を見れば一目瞭然だ。

「は、はい！ 大丈夫です！」

「ありがとうございます。……あの、貴方は？」

「え、えーっと、それは……」

マシユが名前を聞こうとすると、少女は途端に歯切れが悪くなる。

「話を聞くのは良いが、周りの目も気にした方が良からう。」

小次郎がそういうと、藤丸とマシユは周りの兵士たちの様子を見て、そして気づく。

先ほどまでの協力が嘘のように、今は謎の少女を怪訝な目で見る事に。

「……場所を変えよう。ここにいたら問題になりそうだ。」

「ならば、ついてきてください。話はそこで。」

少女の案内の元、俺たちはこの場から離れる。

彼女が一体何なのか、この時代にどういう意味を持つのか。……そして、俺が彼女と出会ったのは何の運命か。答えはまだ先の話だろう。

## 情報収集

ワイバーンの襲撃を追い返し、オルレアンの聖女らしき……いや、確実にそうである少女との開拓を果たした俺たち。周りの敵視されるような目から場所を離れ、近くの森へと向かい、さらにその奥へと進む。

「ここであれば誰の目にもつかないでしょう。」

ジャンヌ・ダルクの案内の下、木々に囲まれながらも少し開けた場所につく。ここは休息の場としても最適だろう。

目的の場所についたとわかった途端、藤丸は地面に尻を落とす。

「つつかれた〜……」

「立香、貴方は何もしていないわよね？」

「そ、そう言われると……反論、できません……。」

オルガマリーから受けた指摘で肩を落とし、目に分かるほど落ち込む藤丸。

「まあまあ。初めての実践だったんだ。それにしちやあ指示は飛ばせていた。」

「古崖さ……！」

その目は感動か、尊敬か、それとも感謝か。どれにせよ俺のフロアへと向けられたものだろうが、次の言葉でそれを打ち砕く。

「ただし、ピンチになった時に焦りすぎだ。戦闘の指揮はあくまでも俺じゃなくお前の役割だぞ。頭使う奴がテンパってたら状況が不利になっていくだけだ。」

「ううっ……で、でも！ 古崖さんだって本気出し損ねてたじゃないですか！ いつもならあんなワイバーンでも勝てるのに！」

「ちち、ちげえよ！ あえて手加減して、お前がどう出るかを見極めてただけだし！」

「ウツソだ！ めちゃくちゃ焦ってるの見たんですからね！」

こいつ！ 自分も焦ってたくせに、人の顔色を見極めてたのか！  
いつの間にかこんな洞察力を身につけやがったんだ！

「あーあ！ それだけ人の事見てられたなら、冷静な判断をして欲し

かったなー!」

「自分の失態を棚上げしといて……!」

うるせえ!　こんなもん意地張り続けなきゃ負けなんですよー!

「……ぷっ。」

おい誰だ。今笑った奴は。

「ジャンヌさん?」

「す、すみません……フフツ、なんだか微笑ましくなって。お二人は仲が良いんですね。」

「そうなんです。出会ってから期間は短いですが、私達の間には鋼鉄のように強固な絆が生まれているのです!」

「フオウフオウ!」

ある意味、マシユの言葉に間違いはない。いやそもそも、ある意味がなくても間違いはない。そうであるはずなんだが……

「……なんか、言葉に出して言われると恥ずかしいな。」

「あ、ああ。そうだな……」

恥ずかしい……いや、俺はそれ以外の感情を持っていた。何か寂しいような、彼女からそんな感想しか出ないことに残念なような。

「貴方達、遊ばないで。」

しかし、オルガマリーはそれらの私情を断ち切るかのように、キツイ言葉を俺たちに浴びせる。

ドウモスミマセンデシター。

「まずはその貴女、ロマニがサーヴァントと言ったけど、貴女の真名は?　一体何が目的なのかしら?　彼らを救った理由は?」

「……それらはたった一つの言葉だけで答えられます。」

私は、私の真名はジャンヌ・ダルクです。」

その真名に俺とオルガマリー以外の全員がまたもや驚く。さきほど悪魔だと言われていたよりも、だ。

しかし、オルガマリーはあえてその事を聞いたのか?　彼女の顔は写真で知っているはずだし、ジアナとジャンヌが同一人物……は少し違うが、ともかく同じ顔だと俺から伝えたし。

「え!? ま、まさかさつき話に出てきた……?」

「魔女となり、この世に再び生を得たという話であったな。」

「それは……」

ジャンヌはその話から目を逸らしてしまう。それが偽物なのか、それとも自身がしてきたことだからなのか。どちらにせよ話を聞かないことには真実は分からないはまだ。

「まあ、待て。まずは彼女の話を最後まで聞いてからだ。」

再び俺は彼女と向き合う。

……ダメだ。チラチラと脳裏に記憶がよぎってしまう。意識をしないようにしていたが、どうしてもその事が頭から離れない。

なのに、なのにどうしてそうお前は、初対面のような顔をするんだ?  
?

「ジャンヌ・ダルクと言ったな。お前は街の人が言ったような『魔女』なのか?」

自身の内にある複雑な想い、それを外に出す事を堪えながら、あくまでも『ジャンヌ・ダルク』に問いかける。

「いいえ、少なくとも私は街の人達に危害を加えるような事はしていません。」

真勢な眼差し、そこに嘘はない。

少なくとも街を襲ったという『魔女』は彼女ではないだろう。

「分かった。その言葉、信じる。」

「ちよつと創太! 何を勝手に……!」

横槍を入れられそうになったが、アイコンタクトで『ここは信じてくれ』と、オルガマリーに送る。

彼女からしてみれば彼女の言葉に確証はないし、俺はただの私情で動いているようにしか見えないだろう。しかも、実際にそうだ。

けど、俺はそれ抜きでも彼女を信じている。彼女が嘘をつく様を、彼女が真実を伝える様を、俺は知っているから。

「……ええ、信じましょう。ジャンヌ・ダルク、貴方が魔女でない事を。」

「信用していただき、ありがとうございます。」

「まあ、一時的に協力するんだ。少し遅れたが、次は自己紹介をさせてもらおう。」

俺は古崖創太、魔術使いだ。立ち位置は……まあ、現地指揮官をやらせてもらってる。」

俺の自己紹介を終えて、次へのボタンタッチをしようと、藤丸と目を合わせる。しかし、彼は首を傾げて何も言わない。

まったく、他の全員はもうすでに理解して、藤丸に視線を集めてるっていうのになんで当の本人は鈍感なんだ。

「え、ええと、なんでみんな注目してくるんですかね……?」

「次がお前の番だからだよ。」

言われて初めて『なるほど!』と手を打ち、やっと自己紹介を始める。

「僕の名前は藤丸立香です! 藤丸の藤はくさかんむりに月にそれから……ええっと……」

「そんなんは言わんでよろしい。」

「あべしっ!」

ツツコミながら、藤丸の後頭部をチョップする。言っておくがこれは暴力ではなくて、一種のコミュニケーションです。決して仲が悪いわけではなく……

「こいつは藤丸立香、人類最後のマスターだ。」

藤丸に任せると話が長引くと判断して、俺が引き続き紹介をしている。

「で、その二人が藤丸のサーヴァントであるマシユと佐々木小次郎だ。」

「改めて初めましてジャンヌさん。私は擬似英霊デミ・サーヴァントのマシユです。」

「デミ……サーヴァント……ですか?」

「はい。正規の英霊ではなく、正確に言えば私には英霊が宿っているのですが……事情があつてその英霊が誰かなのは分かりません。」

成長したとは言え、やはりその事に負い目を感じてしまっているのか、後半は申し訳なさそうに喋る。

「拙者は佐々木小次郎。……本当は名も無き農民であるが、今はそう

呼ばれている。」

「立香にマシユ、小次郎、それに創太ですね。」

……ああ、やはりその呼び方か。似ているけど、確実にそれは違う。あの慣れていないからこそ特別だった呼び方を、お前は口にしないのか。

「……そして、司令塔兼バックアップとしてさつきから通信をしているのが、オルガマリー所長とロマニだ。」

「オルガマリー・アニムスファイアです。暫定とはいえ、貴女を信用しましょう。」

「僕がロマニ・アーキマンです。気軽にロマンと呼んでください。」

「オルガマリーにロマニ……なるほど、夢見がちな人ですね！」

「褒められたのに全然嬉しくない……」

哀れロマニ。そういう星の下に生まれただ。

「自己紹介はそこまで結構でしょう。」

だがしかし、よよよと泣いているロマニを無慈悲にも無視して、オルガマリーは話を進める。

「次は情報交換です。」

ジャンヌ・ダルク、貴方はこのフランスでの異変について何か分かっていますか？」

「すみません、私は何も知りません。」

……それどころか、今の私は何故呼ばれたかも分からないのです。「英霊の座や聖杯から与えられる知識は一切ない？」

「はい。聖杯に召喚されたので聖杯戦争が起こっているだけでは理解しているのですが、それ以外の知識はありません。」

唯一、言語だけはここが故郷であるおかげでなんとか会話はできています。」

そうか、なら俺を見て何の反応もないのは当然か……いや、それでも寂しいモンは寂しい。それだけが変わらない。

「ただ、……この騒動で中心となっているのは、私に似た人物……としか。」

「さつきの兵士もそんな事を言っていたわね。魔女として復活した



と。」

二人目のジャンヌ・ダルク……か。

それが偽物か、それともなんらかのキツカケでできた本物が復活したのか。何にせよ情報が足りなさすぎる。

「あの、話の途中ですが、少しよろしいですか？」

しかし、ここでジャンヌは何か別の話をしようとする。

「少し貴方達が置かれている状況が分からなくて……最後のマスターやデミ・サーヴァントと、ただの聖杯戦争とは違うような……。」

ああ、そうか。彼女からしてみれば何の知識も持っていないから聖杯戦争と呼ばれたと思っっているのだろう。ならば、今後のためにもこちらの現状は伝えるべきだなのだが……

「オルガマリィ、どうする?。」

「伝えても問題はないと思うわ。むしろ、その事を伝えて協力を仰ぎなさい。サーヴァントといえど彼女は現地人です。その観点も必要だし、純粋な戦力としても十分よ。」

よし、トップの許可は貰った。なら、話してもいいだろう。

「ジャンヌ、実はな……」

俺はこれまでにあった事実を話す。二〇一五年に人類は焼却され、それを修復するために俺たちは動いている事を。そして、ここが特異点であり人理修復のために、特異点の原因を解決しに来た事も。

「そんなことが……」

「だから、一緒に協力してくれませんかジャンヌさん!。」

おっと、大事な部分はさらっと盗んでいくなあ、藤丸くん。けども、彼としてはただ懸命に頼んでくれるだけで、他意はないだろう。

「……分かりました。未熟ながらも貴方の旗となりましょう、立香。」  
その言葉と同時に、藤丸の令呪が赤く光る。どうやら仮契約は済んだようだ。

「あ、ありがとうございます! これからよろしくお願いします!。」  
「そんなに畏まらなくとも……」

「いやいや! ジャンヌさんは偉大な先人なんですから、敬意を持たないと失礼だと思っんです! ジャンヌさんが構わないと言っても、

僕はこれが続けます！」

その姿勢に嘘も冗談もない。これはテコでも動かないというやつか。

確かに藤丸はマシユ以外のほとんどの人に敬語を使っている。最初は日本人が故なのだと思っていたが、ちゃんとした理由はあるみたいだ。

「……分かりました。貴方がそれで良いというなら私は何も言いません。ですが、一言だけ。

私は貴方達が言うような歴史的な人物……聖女ではありません。」  
しかし、彼女も自身は偉大ではないと言い張る。

その理由は……彼女の手が血塗れだからだろう。『ジアナ』はそれをずっと気にしていた。それと同じように彼女もきつと――

「さて！ そろそろお喋りはここまでにして次の行動に移そうじゃないか。」

私情を断ち切るかのように、俺は話を本題へとむりやり変える。

「次……とは？」

「情報収集に決まってる。街に行つて色々聞き込みをするんだ。けど、もちろんジャンヌはその間街の外で待機だ。その顔は恐怖の対象となつているみたいだからな。」

さつきも顔を見ただけで怯えていた兵士もいたし、しようがない。

「それは良いのですが、一体どの街に行くつもりですか？ 私の記憶が確かならばここから南に……」

「悪いがジャンヌ、その記憶は当てにならないかもしれない。」

彼女の提案をバツサリ切り捨てる。そのせいか、彼女は困惑する。

「ど、どうですか？」

「ワイバーンの襲撃でここらの街は壊滅しているところがある。そのこの街が必ずしもあるわけじゃない。」

「ならどこに……」

「さつき行つた街だ。あそこはワイバーンを追い払つたし、この短い時間に襲撃が来る事もないだろう。」

「ですが、貴方達が私といふことはすでに知られています。」

そう、そこが最大の難点だ。あそここの門番達には顔を知られ、さらには魔女とされているジャンヌと一緒に逃げていく姿も見られている。そんな俺たちが再び街へ行けば、彼女の姿と一緒に無くとも敵対するに決まっている。

ならどうするか。

「ところで話は変わるが、オルガマリ、霊脈に行けば物資をこっちに送れるっていう話だったな？」

「ええ。マシユの盾を使えば、後は何処にいても輸送は可能です。」

「創太さん？ 何をするつもりでしょうか？」

「まあまあ、歩きながら説明する。だから、今は霊脈に行こう。」

作戦の詳細はまだ伝えずに、強引にパーティ一行を連れて行く。

別に勿体つける必要はないが、驚かせるにはこうした方が良い。

「それじゃあ、霊脈にレッツゴーだ！」

チビを先頭にした奇怪なパーティは進む。

—————

「ほ、本当に入れた……。」

そして、時は流れて数時間後。

俺と藤丸はフード付きマントを羽織り、顔を隠している姿でさつき  
の街へと侵入していた。本来であれば怪しい格好ではあるが、色々と  
細工をしたので、多分大丈夫だろう。

ロマニが忘れていた翻訳機能もちゃんと機能している事は確認済  
みなので、藤丸が会話しても問題ない。

にしても、やはり見たことがない場所であるからか、藤丸はキヨロ  
キヨロと周りを見渡しながら『へえー』とか『本当に過去に来たんだ  
……』とぼやいている。確かに木を柱として壁を石で積み上げた中世  
ヨーロッパの典型的な庶民の家、というのは日本で見られていないだ  
ろうが、今はやるべき事に集中してほしいものだ。

「おい藤丸。さっさと行くぞ。」

「は、はい！ けど、本当にこんな格好で怪しまれないんですか？ 補

給物資としてこんな布を二枚送ってきてもらってましたけど……」

藤丸の言う通り、俺たちが羽織っているのはカルデアから送ってきてもらった物だ。もつと細かに言えば、俺の工房にあった物でこれには魔術が仕込んである。

「大丈夫だ。これは隠蔽……とは少し違うが、周りを誤認させる魔術をかけている。『少なくとも俺たちは害を与える者でも、敵意ある者でもない』ってな。」

「魔術って、そんな事まで出来るんですね！ いや、古崖さんが凄いなかな……？」

「はいはい。どっちでもいいからさつきと情報を集めるぞ。外で待たせてる奴らがいるからな。」

街の中に入っているのは俺と藤丸だけで、他の三人は街の外で待機させている。持ってきてもらったローブは二枚しかなかったので、仕方なく俺たち二人しか潜入していない。

通信も他の人に見られれば怪しまれるので一時的に切っている。

「じゃあ、確認するぞ。まず、そのローブは見られる分には良いし、多少触られても魔術の効果は切れないようになってる。けど、強い衝撃を加えられれば解除されてしまう。さつきの門番にしか顔を知られてないと思うけど、なるべく注意するように。」

「分かりました！」

「あと、俺たちの演じる役は……」

「え、アレ本当にやるんですか？」

「当たり前だ。怪しまれない、とは言ったが純粋な疑問は持たれる。」

藤丸は微妙な顔をしながら、悩み続けてしまう。これは事前に話してはいたんだが、未だ決心がつかないようで、ためらいを感じてしまふようだ。

だが、俺はやるぜ。

「ほら、時間がないからさつきと行く！」

「うわ!? ちょ、ちよつと待って下さいー！」

静止の言葉を耳に入れず、藤丸の腕を強引に引っ張る。丁度良い通行人も見つけたので、そこに突き出してやろう。

「そら、あそこから情報を聞き出すぞ！」

「うおつとつと?!」

藤丸は俺に押されてこけそうになりながらも、三十代らしき女性三人の前に出る。しかし、彼はオドオドして何も喋れず、段々と怪しまれていく。

「あら、どこの坊やかしら?」

「この子ではないのかしら。見覚えなし……」

「まさか他所の国から来た……」

あー、駄目だ。無理やり聞き込みをさせたのは俺だが、流石に一言も話さないのはまずい。初めての事だろうから、慣れないのは当たり前だが、緊張しすぎて声すら出せてない。

仕方ない。事前に決めておいた役割で助けといてやるか。

「ねえねえ。」

俺はとてととと、子供らしく、かつあざとい感じで藤丸の足元に駆け寄る。

ここから可愛らしい少し高めの声を使つてつと。

さあ、俺の演技力を見るがいい!

「にいちちゃん……」

「ふあつ?!?!?」

おい、いくら俺の上目遣いとあざとい声が可愛いからと言って、裏声を出したら、それで余計に怪しまれるだろ。

「にいちちゃん、どうしたの? しやつくり、出ちやったの?」

「ぶふおー!!」

あ、今後は盛大に吹き出しやがった。

いやでも冷静に考えてみれば、本来なら年上の相手にこんなチビっこみたいな背丈で『にいちちゃん』とか言われたら、俺は吐くな。

けど、面白いから続けよう。

「あらまあ弟くんがいたのね。こんにちわ、僕くん。お名前は？」

「ぼ、ぼく、しよ、しようつて言います……あの、にいちゃんと遠いところから歩いてきたの！」

「そうなの？ 偉いわね。」

よしよし、警戒はされずに話ができそうだ。その証拠にご婦人達が俺に向けているのは、完全に子供に向ける目そのものだ。後は本題に入るだけだが……ここは俺じゃなくて藤丸に話してもらおう方が良いか。

「にいちゃん、あのこわいどらごんのこと、きかなくていいの？」

「ぶつ、あ、ああそうです……そうだね。」

なんとか慣れてきたのか、藤丸は冷静さを取り戻しつつも兄という役を演じ始める。

「いくつか、質問をしてもいいでしょうか。」

「ええ、答えられることならなんでも聞いてちょうだい。」

「僕はフランスではない別の場所から来た者です。」

そしてここに来る前に何者かによつて荒らされた街を見えています。調べた所、人が残したとは思えないような痕がありました。そして、この街もドラゴンらしきものに襲われたと聞いています。」

藤丸が口を動かす度に、相手の三人に笑顔が消えていく。この質問の意味が、真剣なものであるからだろう。

「一体、この地で何が起きているんですか？」

誰が話そうか、彼女ら三人が話しあつた後、一番リーダーシップがありそうな女性が話をする。

「……竜の魔女、それは知っているはね？」

「それがジャンヌ・ダルクで、さらに復活した、とは。」

ここまでは既知の情報だ。問題はその魔女が一体どこにいて何をしているか、だ。

「そう、それなら話が速いわ。その魔女はオルレアンを侵略して、ドラゴンを使って街を襲っているらしいの。」

オルレアン、戦略の場として何度も重要視される場所であり、ジャンヌ・ダルクに二つ名がついた要因の場所でもある。

しかし、俺の疑問二つが一気に解決するとは思わなかった。どうやって知ったのかはさておき、次は敵の行動理由だ。目的を知れば敵の裏をつけるかも知れないし、何よりこれからの行動の予測が容易になる。

だが、次の彼女の言葉により、それは難解になっていく。

「しかも、そのドラゴンは生きている人間を攫っているらしいのよ。」

|| || || ||

一方、外の待機組。

マシユ、ジャンヌ、そして小次郎のサーヴァント達は少し離れた場所、人目につかない林の中で立香と創太を待っていた。

しかし、ただ待つというだけであれば暇な事この上ない。もちろん、周りには警戒をしているものの、獣の類はいない。本来であれば主であるマスター立香の身を案じるのが普通ではあるが、それも創太という信頼ある味方によって必要なくなる。ただ一人だけはそうではないのだが。

まあ、それは置いといて、何もする必要がないのであれば何をするか。もちろん他愛のない雑談であろう。

「マシユ。」

最初に話を切り込んだのはジャンヌであった。

「はい、なんででしょう?」

「貴方達は、その……失礼を承知で言いますが、何故そこまで彼を、古崖創太を信頼しているのでしょうか?」

マシユと小次郎、そして通信越しのオルガマリーとロマン。それぞれ四人は、人理修復において最重要である藤丸立香に彼が付いて行くのと口にした時、誰も反対せず、むしろそれが最善であり安心であるというような口ぶりであった。

その光景はジャンヌにとって不自然に感じた。確かに彼は交渉力があり、人間にしてはサーヴァントに匹敵する力を持っているのだろう。ワイバーンとの戦闘では力を出しきれていなかったようだが、そ

れまでだ。

また先のようにワイバーンが複数襲いかかってくれば、立香を守りながら戦うなど、無理とまでは言わないが自身を犠牲にするしかないだろう。

彼一人では限界がある。それが彼女の見解であった。

「……あの人は、そういう人だと思ったからです。」

「はい?」

「その、ジャンヌさんが心配している事は分かります。創太さんだけでは先輩を守りきれないのではないのかと。」

私はたった一週間ですが、彼という人を見てきました。あの人は一人でも目的を実行し、そしてそれを達成する力があります。」

力においての信頼、言葉としてはそう意味している。しかし、それが決定的なものではない。彼を信頼する理由は別にあるようだった。「ですが、ただ強いだけではない。個人の力ではない。」

どんな状況であろうと周りを使い、そして周りと共に生きる。だからこそ、創太さんは信用されているんだと思うんです。彼であればマスターと共に、あるいは街の人々も共に生き延びると。」

——なるほど。確かに彼が適任ですね。

ジャンヌはマシユの答えにそう感じた。

古崖創太というのは個として存在しているのではない。あくまでも常に群を成して生きているのだ。誰かと共に戦い、その誰かの力を倍増させる。だからこそ、藤丸立香の護衛として最適だ。

犠牲を出す事なく、協力して生き残る。それが最善の方法なのだから。

「……私もそんな風になれば良いのですが。」

しかし、マシユは創太に思うところがあった。いや、正確に言えば彼の力、か。

「マシユ?」

無意識に零れた愚痴、それに気づいたマシユは、ハツとしてすぐに謝罪をする。

「す、すみません! つい弱音を吐いてしまい……」



「いえ。誰にでも悩みはあります。」

「……良ければ聞き相手になりますよ?」

それは質問に答えてくれた礼でもあった。彼女の悩みのタネ、それが解決できればと思う気持ちもあった。

「本当に良いのですか?」

「ええ。」

マシユは少し考えた後、ゆっくりと自身が持つ問題を話していく。

「私は通常のサーヴァントではありません。英霊の力を宿した、いわば擬似サーヴァントです。その英霊が誰なのかわからないというのは、先も話しましたよね?」

「はい。……まさか、その事が?」

「それもあります。ですが、宝具は擬似的に使えますし、皆さんと一緒に戦える自信もつき始めました。」

「……それでも、私はどうしても創太さんと比べてしまうのです。」

彼女はゆっくりとジャンヌとの視線を離し、下へと向けてしまう。負い目を自分で話すからか、その声色は暗くなっていく。

「護る為の力、それは確かに手に入れました。しかし、それまでです。創太さんは人間のまま私より強く、そして私たちを引っ張るカリスマもあります。」

私は前線に立って皆さんを守るだけ。相手を倒す力もなく、誰かを率いる力ありません。」

そう思っているとまだまだ未熟であるのだと……」

「なら、私も一緒です。」

それはマシユにとって驚きであった。正規の英雄であるジャンヌから自身も未熟であると言うのは思ってもみなかった。

「私は聖杯や座の支援を受けていません。その為か、私もどこか初々しい感じがするのです。英霊としての記録がない私は召喚されるといのが初体験になります。ですから、そういった意味ではマシユと同じ私も未熟者なんですよ。」

「それを言えば、拙者も同じようなものよ。」

またまたマシユは驚く。今度は小次郎までもが同じようなことを

言い出す。

「拙者はこれの他に喚ばれた事が一度しかない。しかも、それはただ門番をせよというだけで、サーヴァントとして真つ当な役割は果たせておらぬ。」

ならば、この身もマシユ殿と同じ、未熟者のサーヴァントだ。」

「ジャンヌさん、小次郎さん……！」

「ですから、マシユ。貴女は気負わなくても良いのです。自身が未熟であると感じなくても良いのです。ただ、戦い抜く事だけを考えましょう。」

「はい……！　ありがとうございます！」

この出来事を経て、マシユの心はまた一つ軽くなっていく。いつしか本当の力を得るために。そして、この任務を完遂するために。彼女は強くなる。

しかし、ジャンヌは不思議であった。先ほどまで、彼女は自身がサーヴァントとして十全の力を振るえぬ事を恥じていたはずなのに、いつの間にかそれを使い他人を励ましていた。

どちらかと言えば、彼女の立場は逆になるはずであったのに。

——どうして、どうして彼の存在が引っかかるのだろうか。